徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第6集

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
6

北原～大法寺遺跡
十　楽　寺　遺　跡
椎ヶ丸～芝生遺跡

1994
徳　島　県　教　育　委　員　会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
日　本　道　路　公　団

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第6集

四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 6

北原～大法寺遺跡
十楽寺遺跡
椎ヶ丸～芝生遺跡

1994
徳島県教育委員会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

序　　文

本センターは、平成元年4月1日に徳島県内における埋蔵文化財の調査及び研究を目的として設立されました。本年度で設立5年目をむかえ、平成元年度より徳島県から委託を受けました四国縦貫自動車道（徳島～脇間）の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を主な業務としてまいりました。事業を実施するのに必要な体制を整えることができましたのは、徳島県教育委員会の御支援の賜であります。

本報告書は、平成2年度に調査を実施した板野郡土成町北原～大法寺遺跡、十楽寺遺跡、椎ヶ丸～芝生遺跡の3遺跡について発掘調査の成果をまとめたものであります。

これらの遺跡はいずれも阿讃山脈南麓に位置しており、旧石器から平安時代にいたる遺構・遺物が確認されました。このうち椎ヶ丸～芝生遺跡の旧石器時代の石器群、北原～大法寺遺跡の弥生土器、十楽寺遺跡の須恵器焼成に伴う灰原と須恵器などは、本地域の歴史を解明する上での基礎資料となるものと考えております。

本報告書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。なお、発掘調査の実施、報告書作成にあたり、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元の皆様に多大の御援助、御協力を頂き、また研究者の方からは貴重な御教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

平成6年3月

財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

理事長　近　藤　通　弘

例　　言

1　本書は平成2年（1990）度に調査を実施した四国縦貫自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書には北原～大法寺遺跡（板野郡土成町所在）、十楽寺遺跡（板野郡土成町所在）、椎ヶ丸～芝生遺跡（板野郡土成町所在）調査報告を収録した。

3　発掘調査は日本道路公団高松建設局から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。

4　遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

凡例

ＳＡ　掘立柱建物跡	ＳＥ　井戸	ＳＯ　窯
ＳＢ　竪穴住居跡	ＳＫ　土坑（壙）	ＳＰ　柱穴
ＳＤ　溝	ＳＴ　墓	ＳＸ　不明遺構

5　第4図の地形図は建設省国土地理院発行の1／25,000の地形図「市場」「大寺」を転載したものである。

6　方位は国土座標第Ⅳ座標系の北、高さは東京湾標準潮位（Ｔ・Ｐ）を表す。

7　本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帳』1989年度版によった。

8　調査にあたっては、次の機関の指導・協力を得た。

徳島県教育委員会　日本道路公団高松建設局　同徳島工事事務所　同脇工事事務所
徳島県土木部縦貫道推進局　同中央事務所　土成町

9　本書の執筆は以下のとおりである。

Ⅰ　菅原康夫　Ⅱ　久保脇美朗　Ⅲ　久保脇美朗　Ⅳ　久保脇美朗

なお、遺物の写真撮影は島巡賢二、佐藤誠二、全体の編集は久保脇が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経緯…… 1

Ⅱ　北原～大法寺遺跡…… 7
1　調査の経過…… 17
(1)　調査の経過…… 13
(2)　発掘調査の方法…… 13
(3)　調査日誌抄…… 14
2　遺跡の立地と歴史的環境 …… 16
(1)　遺跡の地理的環境 …… 16
(2)　周辺の考古学的環境と遺跡の消長 …… 16
3　調査成果…… 19
(1)　遺跡の基本層序…… 19
(2)　（検出された）遺構と遺物 …… 21
(3)　考察…… 57
4　まとめ…… 71

Ⅲ　十楽寺遺跡…… 115
1　調査の経過…… 117
(1)　調査の経過…… 117
(2)　発掘調査の方法…… 117
(3)　調査日誌抄…… 119
2　遺跡の立地と地理的環境 …… 123
3　調査成果…… 124
(1)　（遺跡の）基本層序 …… 124
(2)　（検出された）遺構と遺物 …… 124
(3)　考察…… 134
4　まとめ…… 135

Ⅳ　椎ヶ丸～芝牛遺跡…… 155
1　調査の経過…… 161

(1) 調査の経過…… 161
(2) 発掘調査の方法…… 162
(3) 調査日誌抄…… 162
2 遺跡の立地と地理的環境 …… 164
3 調査成果…… 165
(1) （遺跡の）基本層序 …… 165
(2) 検出された遺構と遺物 …… 167
椎ヶ丸地区…… 167
弥生時代の遺構と遺物 …… 167
旧石器時代の遺物 …… 185
芝生地区…… 206
検出された遺構と遺物 …… 206
(3) 考察…… 207
弥生時代の遺物について …… 207
旧石器時代の遺物について …… 208
4 まとめ…… 210

插図目次

I　第1図　四国縦貫自動車道（徳島～脇）路線図 …… 4

II　第1図北原～大法寺遺跡調査地位置図 …… 9
第2図北原～大法寺遺跡グリッド配置図 …… 11
第3図北原～大法寺遺跡遺構配置図 …… 11
第4図周辺主要遺跡分布図 …… 17
第5図北原～大法寺遺跡基本土層図 …… 19
第6図ＳＢ1001実測図 …… 20
第7図ＳＢ1001出土遺物実測図 …… 21
第8図ＳＢ1002実測図 …… 23
第9図ＳＢ1002出土土器実測図 …… 24
第10図ＳＢ1002出土石器実測図 …… 25
第11図ＳＢ1002出土石器実測図 …… 26
第12図ＳＫ1001実測図 …… 27
第13図ＳＫ1001出土石器実測図 …… 28
第14図ＳＫ1001出土土器実測図 …… 29
第15図ＳＫ1002実測図 …… 30
第16図ＳＫ1002出土遺物実測図 …… 31
第17図ＳＫ1003実測図 …… 32
第18図ＳＫ1003出土土器実測図 …… 32
第19図ＳＫ1004実測図 …… 33
第20図ＳＫ1004出土土器実測図 …… 33
第20図ＳＫ1004出土遺物実測図 …… 33
第21図ＳＫ1005実測図 …… 34
第22図ＳＫ1005出土土器実測図 …… 35
第23図ＳＫ1005出土土器実測図 …… 36
第24図ＳＫ1006実測図 …… 37
第25図ＳＫ1006出土土器実測図 …… 38
第26図ＳＫ1006出土土器実測図 …… 39
第27図ＳＫ1006出土石器実測図 …… 39
第28図ＳＫ1007実測図 …… 40
第29図ＳＫ1007出土遺物実測図 …… 40
第30図ＳＫ1008実測図 …… 41
第31図ＳＫ1008出土石器実測図 …… 41
第32図ＳＫ1010実測図 …… 42
第33図ＳＫ1010出土土器実測図 …… 43
第34図ＳＫ1010出土土器実測図 …… 44
第35図ＳＫ1010出土土器実測図 …… 45
第36図ＳＫ1010出土土器実測図 …… 46
第37図ＳＫ1010出土土器実測図 …… 47
第38図ＳＫ1010出土土器実測図 …… 48
第39図ＳＫ1010出土土器実測図 …… 49
第40図ＳＫ1010出土土器実測図 …… 50
第41図ＳＫ1010出土石器実測図 …… 51
第42図ＳＫ1011実測図 …… 52
第43図ＳＫ1011出土土器実測図 …… 53
第44図ＳＫ1011出土土器実測図 …… 54
第45図ＳＫ1011出土石器実測図 …… 55
第46図ＳＫ1012実測図 …… 56
第47図北原～大法寺遺跡出土土器種分類表 …… 58
第48図北原～大法寺遺跡出土土器種分類表 …… 59
第49図北原～大法寺遺跡出土土器種分類表 …… 60

III　第1図　十楽寺遺跡調査地位置図 …… 118
第2図　十楽寺遺跡グリッド配置図 …… 119
第3図　十楽寺遺跡遺構配置図 …… 120
第4図　十楽寺遺跡土層実測図 …… 121
第5図　十楽寺遺跡位置図 …… 125
第6図　十楽寺遺跡出土土器実測図(1) …… 126
第7図　十楽寺遺跡出土土器実測図(2) …… 127
第8図　十楽寺遺跡出土土器実測図(3) …… 129
第9図　十楽寺遺跡出土土器実測図(4) …… 130
第10図　十楽寺遺跡出土土器実測図(5) …… 131
第11図　図杯及び杯蓋内外面の成形・整形痕 …… 132
第12図　甕体部外面の叩き目文 …… 132
第13図　十楽寺遺跡出土鉄器実測図 …… 139

IV　第1図　椎ケ丸～芝生遺跡調査地位置図 …… 157
第2図　椎ケ丸地区グリッド配置図 …… 159
第3図　椎ケ丸地区遺構配置図 …… 159
第4図　芝生地区グリッド配置図 …… 161
第5図　芝生地区遺構配置図 …… 161
第6図　椎ケ丸～芝生遺跡位置図 …… 164
第7図　椎が丸地区基本層序 …… 165

第8図　芝生遺跡基本層序 …… 166
第9図　SB1001実測図 …… 168
第10図　SB1001出土土器実測図 …… 169
第11図　SB1001出土土器実測図 …… 170
第12図　SB1001出土石器実測図 …… 170
第13図　SB1001出土石器実測図 …… 171
第14図　SB1002実測図 …… 172
第15図　SB1002出土土器実測図 …… 173
第16図　SB1003実測図 …… 174
第17図　SB1003出土土器実測図 …… 175
第18図　SB1003出土石器実測図 …… 176
第19図　SK1001実測図 …… 176
第20図　SK1001出土土器実測図 …… 177
第21図　SK1002実測図 …… 177
第22図　SK1002出土土器実測図 …… 177
第23図　SK1002出土石器実測図 …… 177
第24図　SK1003実測図 …… 178
第25図　SK1003出土鉄器実測図 …… 179
第26図　SK1003出土土器実測図 …… 179
第27図　SX1001実測図 …… 180
第28図　包含層出土土器実測図 …… 182
第29図　包含層出土土器実測図 …… 183
第30図　包含層出土石器実測図 …… 184
第31図　椎ヶ丸地区旧石器調査区略図 …… 186
第32図　B地点地形測量図 …… 186
第33図　A地点出土旧石器実測図 …… 187
第34図　A地点出土旧石器実測図 …… 188
第35図　A地点出土旧石器実測図 …… 189
第36図　A地点出土旧石器実測図 …… 190
第37図　A地点出土旧石器実測図 …… 191
第38図　A地点出土旧石器実測図 …… 192
第39図　A地点出土旧石器実測図 …… 193
第40図　B地点出土旧石器実測図 …… 196
第41図　B地点出土旧石器実測図 …… 197
第42図　B地点出土旧石器実測図 …… 198
第43図　B地点出土旧石器実測図 …… 199
第44図　B地点出土旧石器実測図 …… 200
第45図　B地点出土旧石器実測図 …… 201
第46図　C地点出土旧石器実測図 …… 202
第47図　C地点出土旧石器実測図 …… 203
第48図　C地点出土旧石器実測図 …… 204
第49図　表面採集遺物 …… 205
第50図　SO1001実測図 …… 206

表目次

I　第1表　四国縦貫自動車道埋蔵文化財調査地一覧表 … 4

II　第1表　北原～大法寺遺跡遺構一覧表 …… 74
第2表　北原～大法寺遺跡出土遺物観察表 …… 76

III　第1表　十楽寺遺跡出土遺物観察表 …… 136

IV　第1表　椎ヶ丸～芝生遺跡遺構一覧表 …… 212
第2表　椎ヶ丸～芝生遺跡出土遺物一覧表 …… 212

図版目次

II　図版1　調査区遠景 …… 89
調査風景 …… 89
図版2　SB1001検出状況（南から） …… 90
SB1001完掘状況（同） …… 90
図版3　SB1002検出状況（西から） …… 91
SB1002完掘状況（南から） …… 91
図版4　SK1001遺物出土状況（北から） …… 92
SK1001完掘状況（同） …… 92
図版5　SK1002掘り下げ状況（北から） …… 93
SK1002完掘状況（同） …… 93
図版6　SK1006掘り下げ状況（西から） …… 94
SK1006完掘状況（東から） …… 94

図版7　SK1010掘り下げ状況（東から）…… 95
SK1010完全掘状況（東から）…… 95
図版8　SK1011掘り下げ状況（東から）…… 96
SK1011完掘状況（同）…… 96
図版9　SB1002床面遺物出土状況…… 97
SB1002ミニチュア土器出土状況…… 97
図版10　SK1002遺物出土状況…… 98
SK1003遺物出土状況…… 98
図版11　SK1010遺物出土状況…… 99
SK1010遺物出土状況…… 99
図版12　出土遺物（1）…… 100
図版13　出土遺物（2）…… 101
図版14　出土遺物（3）…… 102
図版15　出土遺物（4）…… 103
図版16　出土遺物（5）…… 104
図版17　出土遺物（6）…… 105
図版18　出土遺物（7）…… 106
図版19　出土遺物（8）…… 107
図版20　出土遺物（9）…… 108
図版21　出土遺物（10）…… 109
図版22　出土遺物（11）…… 110
図版23　出土遺物（12）…… 111
図版24　出土遺物（13）…… 112
図版25　出土遺物（14）…… 113

Ⅲ　図版1　調査区遠景…… 143
A地区自然流路上層堆積状況（南壁）…… 143
図版2　灰原検出状況（北東から）…… 144
灰原検出状況（東から）…… 144
図版3　A地区自然流路内上層堆積状況…… 145
同灰層堆積状況…… 145
図版4　鉄斧出土状況…… 146
灰原内遺物出土状況…… 146
図版5　自然流路内遺物出土状況…… 147
自然流路内遺物出土状況…… 147
図版6　出土遺物（1）…… 148
図版7　出土遺物（2）…… 149
図版8　出土遺物（3）…… 150
図版9　出土遺物（4）…… 151
図版10　出土遺物（5）…… 152
図版11　出土遺物（6）…… 153

Ⅳ　図版1　椎ヶ丸調査区遠景…… 223
芝生調査前風景…… 223
図版2　SB1001完掘状況（南から）…… 224
SB1001完掘状況（北から）…… 224
図版3　SB1003検出状況（西から）…… 225
SB1003完掘状況（南から）…… 225
図版4　SK1001検出状況…… 226
SK1001完掘状況…… 226
図版5　SK1002検出状況…… 227
SK1002完掘状況…… 227
図版6　SK1001・1002完掘状況…… 228
SK1003検出状況…… 228
図版7　SK1003掘り下げ状況（西から）…… 229
SK1003完掘状況（北から）…… 229
図版8　SX1001検出状況…… 230
SX1001完掘状況…… 230
図版9　SB1001遺物出土状況（石斧）…… 231
SB1001遺物出土状況（弥生土器）…… 231
図版10　A地点ナイフ形石器出土状況…… 232
B地点ナイフ形石器出土状況…… 232
図版11　B地点ナイフ形石器出土状況…… 233
B地点スクレイパー出土状況…… 233
図版12　SB1001出土遺物（弥生土器）…… 234
図版13　SB1003出土遺物（弥生土器）…… 235
SK1003出土遺物（弥生土器）…… 235
図版14　包含層出土遺物（弥生土器）…… 236
図版15　出土遺物（弥生石器）…… 237
図版16　出土遺物（弥生石器）…… 238
図版17　A地点出土遺物（旧石器）…… 239
図版18　A地点出土遺物（旧石器）…… 240
図版19　B地点出土遺物（旧石器）…… 241
図版20　B地点出土遺物（旧石器）…… 242
図版21　B地点出土遺物（旧石器）…… 243
図版22　C地点出土遺物（旧石器）…… 244
図版23　C地点出土遺物（旧石器）…… 245
表面採集遺物…… 245

I　調査に至る経緯

Ⅰ　調査に至る経緯

四国縦貫自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づき、四国４県を連結する幹線道路として計画された。徳島県内では徳島～脇間については昭和48年（1973）10月19日「道路整備特別措置法」に基づき建設大臣から第７次の施工命令が出され（昭和54年３月２日整備計画変更、施工命令）、昭和55年12月19日実施計画の認可、昭和56年１月19日に路線発表がされた。

これは徳島市川内町の徳島Ｉ．Ｃを起点とし、吉野川に平行して西進し、板野郡板野町の沖積平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山麓を通過して脇Ｉ．Ｃを結ぶ区間延長41.4km、用地取得面積259haに及ぶ事業である。

昭和61年４月24日道路局長通達により暫定施工に変更され、62年11月６日徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年５月31日には藍住Ｉ．Ｃ（追加Ｉ．Ｃ）の施工命令が出され、６月30日に実施計画が認可されている。

この間徳島県教育委員会（以下「県教委」という。）は昭和60～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係る分布調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握に努めた。これと前後し、分布調査結果を基に県教委と協議を重ねた日本道路公団高松建設局（以下「公団」という。）は、昭和63年６月17日、文化庁に脇～板野間に係る58遺跡の取扱いについて協議を申し入れ、平成元年３月30日、工事の施工に先立って発掘調査を実施する旨の協議を終了した。

一方、県教委では供用が第10次５か年計画に取り入れられ、平成５年が目標となっていることを受けて、63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成元年４月１日、財団法人徳島県埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）を発足させ、調査に対応することとした。センター発足時には未確定であった徳島～板野間の調査については、平成２年１月22日に10遺跡の取扱いについての協議が終了し、路線内に68遺跡、約360,000㎡（暫定分約340,000㎡）、事業区域面積のほぼ13パーセントにあたる文化財対象地が確定した（第１図）。

県と公団との委託契約をふまえ、県とセンターの委託契約は元年６月１日付けで締結された。センターでは発掘調査にあたって、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することによって、調査の迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地があくまで分布調査結果に基づくものであり、特に工事請負として設計・発注するためには掘削土量の把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の遺存状態及び層厚の把握に努めた。また、用地取得状況を勘案しつつ、散布地・集落跡・古墳など、遺跡の性格・遺構の累積数に

応じた調査方法、調査工期について検討を行い、調査を実施した。

前述したように、発掘調査を先行する事によって層厚・調査面積を絞り込んだことに加えて、徳島～板野間の沖積平野では現地表面下３ｍ以深に遺跡が存在することから、遺物の採集が行われなくとも、慎重を期して微高地が調査対象地とされていたこともあり、最終の実掘面積は当初見込みに比べて減少した。

平成元年度には、14遺跡14,500㎡、２年度は33遺跡76,390㎡、３年度は30遺跡35,748㎡、４年度は残件であった14遺跡6,826㎡について、用地取得がなされた地区から調査を進め、当該区間の調査を完了した（第１表）。

それぞれの調査の進捗状況については、既刊の徳島県埋蔵文化財センター年報を参照されたい。

調査組織及び整理体制は以下である。

事務局長　日下　昭（平成元・２年度）
　　佐藤信博（平成３・４年度）
総務課長　吉田　寛（平成元・２年度）
　　木内正幸（平成３年度）
　　岡本一仁（平成４年度）
主　　事　佐藤　馨（平成２～４年度）
研究補助員　扶川道代
臨時補助員　出村隆子　上田暁美
　　岸いくみ　大岸さとみ
　　福原幸恵
　　柴田みのり　藤川淑江
調査課長　桑原邦彦（平成元・２年度）
　　羽山久男（平成３・４年度）
調整係長　菅原康夫（平成元年度）
　　島巡賢二（平成２～４年度）
技　　師　森長　進（平成元・２年度技術主任）
　　堀江隆治（平成３・４年度）
調査係長　島巡賢二（平成元年度）
　　菅原康夫（平成２～４年度）

調査担当

北原～大法寺遺跡

研　究　員　　川田浩司（当時）　鈴木康司（当時）
　　吉川弥生（当時）　久保脇美朗

十楽寺遺跡

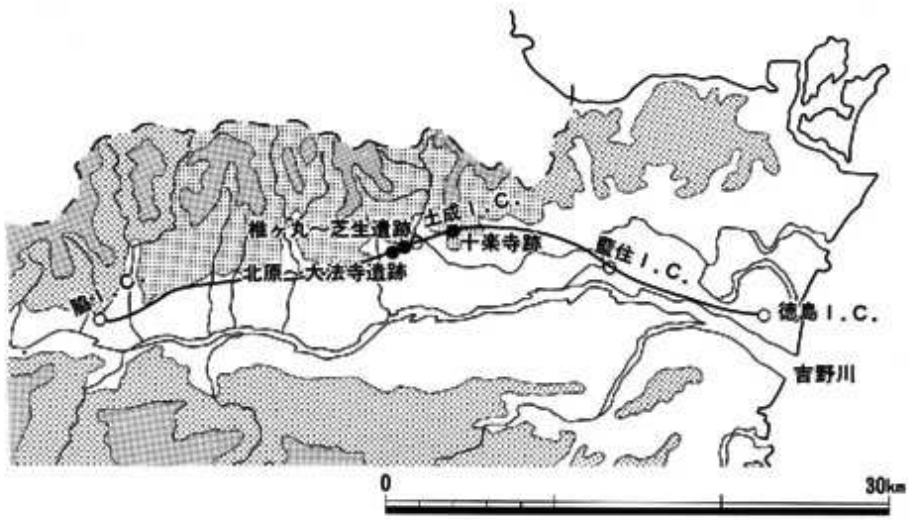
研　究　員　　鈴木康司（当時）　久保脇美朗

椎ヶ丸～芝生遺跡

研　究　員　　鈴木康司（当時）　米倉康博（当時）
　　柴田昌児（当時）　須崎一幸
　　久保脇美朗
研究補助員　　十川道雄（当時）　原　芳伸（当時）

調査報告書作成業務

北原～大法寺遺跡・十楽寺遺跡・椎ケ丸～芝生遺跡　研究員　久保脇美朗



第1図　四国縦貫自動車道（徳島～脇）路線図

第1表　四国縦貫自動車道埋蔵文化財調査地一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	面積（㎡）					備考
			実施面積	元年度	2年度	3年度	4年度	
1	西長峰遺跡	阿波郡阿波町西長峰	170	170				
2	中長峰遺跡	阿波郡阿波町中長峰	100	100				
3	東長峰遺跡	阿波郡阿波町東長峰	30		30			
4	日吉谷遺跡	阿波郡阿波町日吉谷	4,080	1,840	2,240			第5集所収
5	赤坂遺跡（Ⅰ）	阿波郡阿波町赤坂	800		800			第1集所収
6	赤坂遺跡（Ⅱ）	阿波郡阿波町赤坂	50		50			第1集所収
7	赤坂遺跡（Ⅲ）	阿波郡阿波町赤坂	1,600	600	1,000			第1集所収
8	桜ノ岡遺跡（Ⅰ）	阿波郡阿波町桜ノ岡	8,000	2,690	5,310			第3集所収
9	桜ノ岡遺跡（Ⅲ）	阿波郡阿波町桜ノ岡	240	240				
10	桜ノ岡～東正広遺跡	阿波郡阿波町小倉	1,000		1,000			
11	山ノ神遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	10		10			
12	山ノ神～八丁原遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	30		30			
13	上喜来遺跡	阿波郡市場町大俣	1,160		900	260		
14	大俣山路～大俣宇佐遺跡	阿波郡市場町大俣	250			250		
15	上喜来蛭子～中佐古遺跡	阿波郡市場町上喜来	12,560		11,720	840		
16	八板遺跡（Ⅰ）	阿波郡市場町尾開	11			11		
17	八板遺跡（Ⅱ）	阿波郡市場町尾開	360	360				
18	八板遺跡（Ⅲ）	阿波郡市場町尾開	114			85	29	
19	八板遺跡（Ⅳ）	阿波郡市場町尾開	2,000	2,000				
20	日吉～金清遺跡	阿波郡市場町尾開	3,100	2,850	250			
21	古田遺跡（Ⅰ）	阿波郡市場町切幡	60		60			
22	古田遺跡（Ⅱ）	阿波郡市場町切幡	510	510				
23	坤山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	60			60		
24	乾山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	850			850		
25	乾山遺跡	阿波郡市場町切幡	2			2		
26	金蔵～上井遺跡	板野郡上成町浦池	2,730	2,730				第1集所収
27	北原～大法寺遺跡	板野郡上成町土成	4,890		4,890			本報告書収
28	前田遺跡	板野郡上成町土成	10,810		7,710	3,100		第2集所収
29	椎ヶ丸～芝生遺跡	板野郡上成町吉田	3,550		3,550			本報告書収
30	北門～涼堂遺跡	板野郡上成町吉田	200			200		
31	広坪～宮ノ下遺跡	板野郡上成町宮川内	60		60			
32	向山古墳群	板野郡上成町宮川内	50				50	
33	狸ヶ丸遺跡	板野郡上成町高尾	1,400		1,400			
34	けやき原～林遺跡	板野郡上成町高尾	210		210			
35	西谷遺跡	板野郡上成町高尾	7,300		5,650	1,650		
36	法教田遺跡（Ⅰ）	板野郡上成町高尾	10		10			
37	十楽寺遺跡	板野郡上成町高尾	430		430			本報告書収
38	安楽寺谷墳墓群	板野郡上板町引野	2,140			2,140		
39	関堀窯跡	板野郡上板町引野	20			20		
40	天神山遺跡	板野郡上板町引野	1,330		1,330			第1集所収
41	寺谷遺跡	板野郡上板町引野	3,980		3,110	870		第1集所収
42	明神池古墳群	板野郡上板町引野	194		80	114		

遺跡番号	遺跡名	所在地	面積（㎡）					備考
			実測面積	元年度	2年度	3年度	4年度	
43	柿谷遺跡	板野郡上板町泉谷	8,930		3,280	5,650		
44	新池遺跡	板野郡上板町泉谷	31			31		
45	神宮寺遺跡	板野郡上板町神宅	15,649			11,507	4,142	
46	高蒲谷西山A遺跡	板野郡上板町神宅	460		130	330		
47	高蒲谷西山B遺跡	板野郡上板町神宅	1,980			1,730	250	
48	高蒲谷東山古墳群	板野郡上板町神宅	115			115		
49	山田古墳群A	板野郡上板町神宅	2,200			2,200		
50	山田古墳	板野郡上板町神宅	8			8		
51	山田古墳B	板野郡上板町神宅	775			525	250	
52	大谷古墳群	板野郡上板町神宅	30				30	
53	大谷薬師遺跡	板野郡上板町神宅	180		180			
54	祝谷古墳	板野郡上板町神宅	90				90	
55	聖天山遺跡	板野郡上板町神宅	115				115	
56	黒谷窯跡	板野郡板野町黒谷	91				91	
57	松谷遺跡	板野郡板野町松谷	900		40	860		
58	蓮華谷古墳群（1）	板野郡板野町犬伏	353			65	288	
59	蓮華池遺跡（Ⅰ）	板野郡板野町犬伏	340		340			第4集所収
60	蓮華谷古墳群（Ⅱ）	板野郡板野町犬伏	1,220		1,220			第4集所収
61	蓮華池遺跡（Ⅱ）	板野郡板野町犬伏	40	40				
62	黒谷川宮ノ前遺跡	板野郡板野町犬伏	10,580	130	10,450			
63	古城遺跡	板野郡板野町古城	10,000	240	8,920		840	
64	西中富遺跡（Ⅰ）	板野郡板野町西中富	975			975		
65	西中富遺跡（Ⅱ）	板野郡板野町西中富	125			125		
66	東中富遺跡	板野郡藍住町東中富	760			550	210	
67	前須遺跡	板野郡藍住町徳命	876			625	251	
68	新居須遺跡	板野郡藍住町徳命	190				190	
		計	133,464					

Ⅱ　北原～大法寺遺跡

1　本章は四国縦貫自動車道建設に伴う北原～大法寺遺跡の発掘調査報告である。

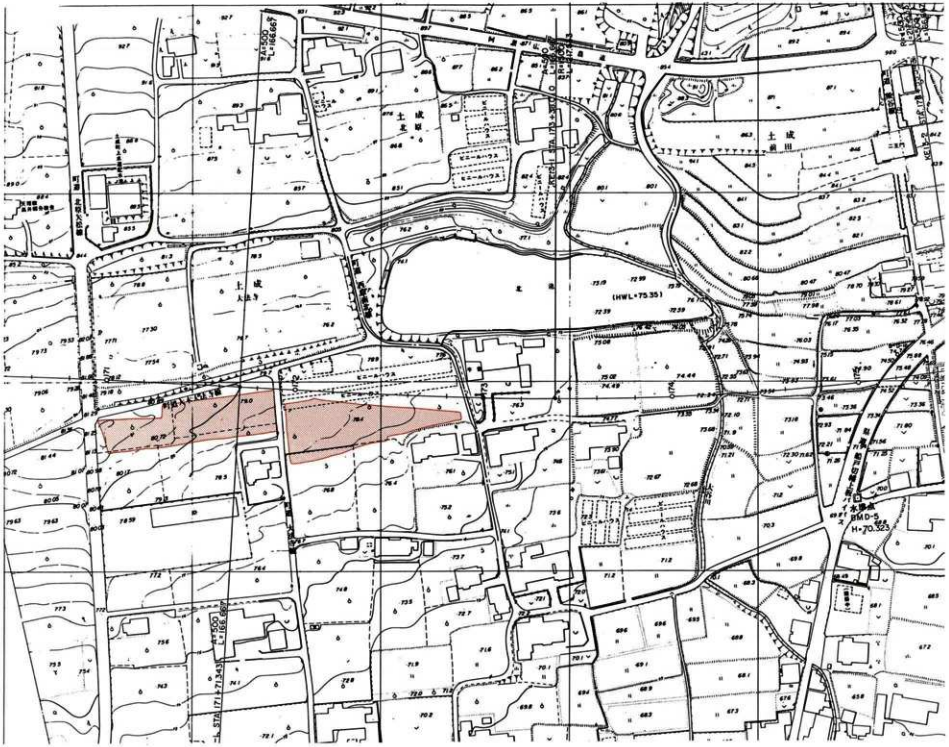
2　発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

調査期間　平成2年4月28日～10月12日
報告書作成期間　平成4年4月1日～平成5年3月31日

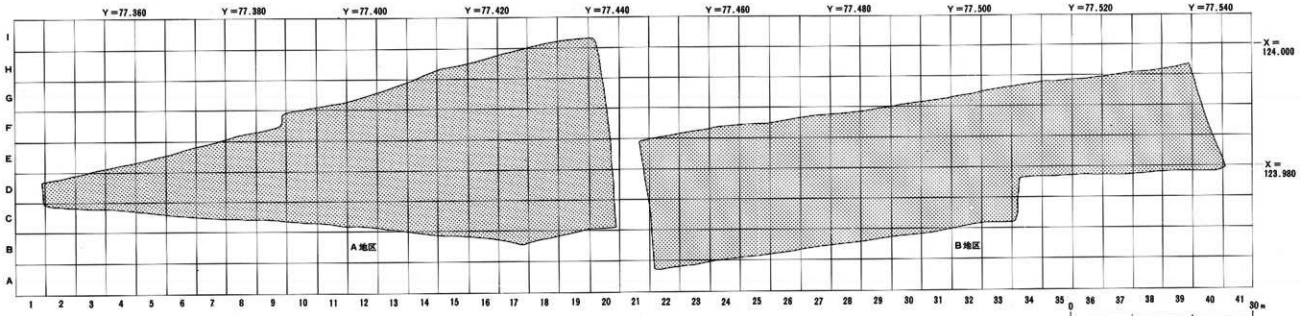
3　遺物番号、挿図番号、図版番号はすべて通し番号とした。

遺跡抄録

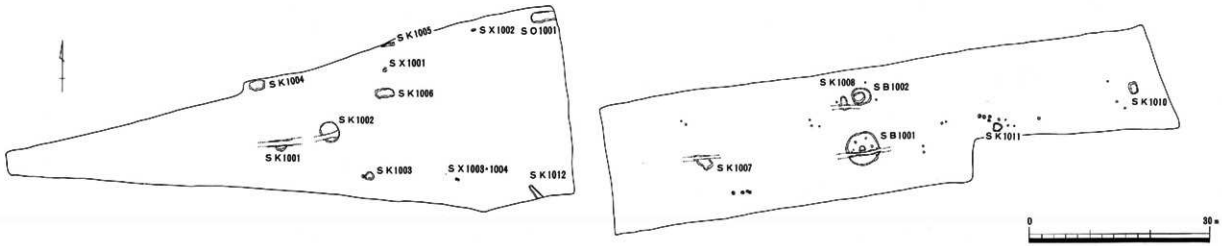
遺跡名	北原～大法寺遺跡
読み	きたはら～だいほうじ
所在地	徳島県板野郡土成町大法寺214他 X＝123.960～124.005　　Y＝77.345～77.550
種別	集落
時代	弥生・中世
主な遺構	竪穴住居跡・土坑
主な遺物	弥生土器・石器・須恵器・土師器・青磁



第1図　北原～大法寺遺跡調査地位置図



第2図　北原大法寺遺跡グリット配置図



第3図　北原～大法寺遺跡遺構配置図

1　調査の経過

1　調査の経過

北原大法寺遺跡が位置する土成の扇状地一帯では、1985年、縦貫道建設予定地の北に位置する北原地区の一部が県立土成工業団地として造成されたが、それに先立ち実施された発掘調査によって弥生時代の住居跡や土壙が検出され、北原遺跡と命名されて弥生時代の集落遺跡であることが周知されるに至った。今回の縦貫道建設に際しては、そのときの成果と分布調査の結果をふまえ、当初20000㎡を調査対象面積として設定し、試掘調査を行うこととした。5月15日から同21日にかけての期間に実施された試掘調査では、平地部分の路線予定地の多くがほぼその中に収まる形になる扇状地の中を東西に延びる帯状の地溝状陥没地形と、その南側の一段高い扇状地上に合計60ヶ所のトレンチを設け、建設予定地内の遺跡の正確な範囲を把握することに努めた。その結果、地溝状地形部分からの遺物の出土は殆ど無かったが、南側の扇状地部分に設けた16ヶ所のトレンチのうち4ヶ所で扇状地特有の多量の砂礫の堆積の中から弥生式土器が出土し、弥生時代の遺物包含層が存在する可能性が確認された。このため本調査では遺物の出土が殆どなかった地溝状陥没地形内の調査を取りやめ、弥生土器の出土した扇状地上の平坦地部分に4890㎡の調査区を設けて発掘調査を実施することとした。

2　発掘調査の方法

発掘調査を始めるにあたっての基準となるグリッドの配置は発掘調査統一基準に従い第Ⅳ系国土座標を基準とし、5m×5mのメッシュを1グリッドとして調査区全体を覆うように区画し、南西の隅から北に向かってはＡＢＣのアルファベットを、また東に向かっては1・2・3のアラビア数字を記号として記入し、その組み合わせでグリッド名を表記するようにした。なお、調査区が東西に細長いため、中央部を南北に走る町道を境として西側の調査区をＡ地区、東側をＢ地区と便宜的に呼ぶこととする。

3　調査日誌抄

5月22日　今日から調査区内の杭打ち作業。

5月23日　午前中、起工測量立ち会い。午後から人力と機械掘削を併用してA地区より表土除去作業。

5月24日　調査区内より弥生土器が出土しはじめる。

5月28日　人力掘削作業と並行して遺構検出作業を行う。

5月30日　今日までにSK1001から1006までの土壙を検出、一部掘り下げ作業にかかる。

6月5日　SK1001・1003上面の遺物の図化作業。

6月6日　SK1002・1005の検出状況の写真撮影、SK1001の図化作業終了。

6月7日　SK1003の図化作業終了。SK1005上面の遺物の図化開始。

6月12日　SK1006の検出状況の写真撮影。

6月14日　B地区の掘削作業開始。

6月18日　今日までに新たにSK1012とSX1001から1004までの遺構を検出。

6月20日　SK1002・1006の掘り下げ作業開始。

6月21日　SK1001・1003・1004の遺構内の掘り下げ開始。SX1001・1002の検出状況の写真撮影。SK1002の精査終了。

6月25日　SK1006出土の遺物の図化作業を開始。

7月4日　SK1006出土遺物の取り上げ。

7月6日　SK1006完掘。写真撮影。

7月10日　SK1002の完掘状況写真の撮影。SK1012の掘り下げ開始。

7月11日　SK1004の掘り下げ作業を終了。SK1005出土遺物の図化開始。

7月13日　SK1012の精査終了。写真撮影

7月16日　SK1002・1006の遺構平面図の図化を終了。

7月18日　SK1003の掘り下げと図化作業を終了。

7月23日　B地区の遺構検出作業開始。

7月25日　SK1005の遺物出土状況図の作製終了。

7月26日　B地区でSB1001・1002を検出

8月1日　B地区の遺構検出作業終了。住居址、土壙の他に30余りのピットが検出される。SB1001掘り下げ開始。

8月6日　SB1002、SK1008の検出状況の写真撮影。

8月7日　B地区SK1007の遺構検出状況の写真撮影。SB1001の掘り下げ終了。

8月8日　SB1002、SK1008の掘り下げ開始。

8月9日　SK1008の掘り下げ終了。

8月16日　SK1007と同じくB地区検出のピット群の掘り下げを開始。SK1001を完掘。

8月17日　SK1011の掘り下げ開始。

8月20日　SB1001の床面精査。

8月23日　SB1002内の遺物出土状況の写真撮影。

8月24日　SK1010内掘り下げ開始。SK

1008を完掘。

8月27日　ＳＫ1007の掘り下げ終了。

8月29日　ＳＢ1002の床面出土遺物の図化作業。

9月3日　ＳＢ1002出土遺物の図化作業の継続。

9月5日　ＳＢ1001の図化作業開始。ＳＫ1011から土器片が多量に出土。

9月6日　ＳＫ1008の平面図化作業開始。

9月10日　ＳＢ1002の床面精査。ＳＫ1010からおびただしい土器片が出土しはじめる。

9月14日　ＳＢ1002の床面精査終了。図化作業開始。ＳＢ1001は作業を全て終了。

9月21日　ＳＢ1002の図化作業終了。ＳＫ1010・1011は図化作業を継続。

9月28日　4日連続の雨天のためＳＫ1010・1011の図化作業を強行。

10月3日　ＳＫ1011の図化作業を終了。完掘状況の写真撮影も終える。

10月4日　雨天ではあるがＳＫ1010の図化作業を強行。

10月5日　ＳＫ1010の図化作業を終了

10月12日　全ての作業を終了。センターに帰還。

2　遺跡の立地と歴史的環境

(1)　遺跡の地理的環境

本遺跡が位置する土成町は、その平地部の大部分を阿讃山脈に源を発する宮川内谷川・九頭宇谷川・鈴川谷川などの中小の河川によって形成された県下最大の複合扇状地よって占められている。この扇状地は単にその規模が大きいと言うばかりではなく、その中を東西に走る中央構造線の影響によって成立した地溝状陥没地形や断層崖などの特異な地形が存在している。特に本遺跡が位置している鈴川谷川の扇状地は、扇央部をこの地溝状陥没地形によって東西に分断され、地溝状陥没地形の東側は北池となっている。今回の調査は調査区の北側がこの地溝状陥没地形にそって設定されているため、北側は高いところでは5mの急な崖になってこの北池にむかって落ち込んでいる。

(2)　周辺の考古学的環境と遺跡の消長

今回の報告の対象となった遺跡の位置する土成・上板両町は、吉野川北岸中流域に属し、南の吉野川と北の阿讃山脈の間に中小の河川によって作り出された複合扇状地上に形成された町である。なかでも引野・切幡両丘陵の間を流れる宮川内谷川や九頭宇谷川流域の扇状地の扇頂部から扇央部にかけてや、背後の阿讃山脈の山麓に形成された段丘面や、丘陵から舌状に張りだした尾根の先端部には多数の遺跡が点在し、徳島県下でもこれまで比較的多くの発掘調査が実施されてきた地域である。時期的に最も古いものは旧石器時代まで遡り、今回報告する椎ケ丸遺跡がその代表的な遺跡として知られている。椎ケ丸遺跡からはこれまでにナイフ形石器を中心に1000点以上の資料が採集され、この地域のみならず県下最大級の旧石器時代の遺跡とされてきたが、その他にも最近の調査によって、西谷遺跡や葬ヶ丸遺跡・前田遺跡・金蔵～上井遺跡・金地遺跡などから断片的ではあるが資料が出土しており、山麓部を中心に広範な分布を示している。続く縄文時代は遺物の依存状態が悪かったり石器などが単独で出土した場合でも旧石器ほど時期を断定することが困難な場合が多いためか遺跡数も少なく、西谷遺跡の他に前田遺跡・大木～峰廷遺跡・金蔵～上井遺跡が知られているだけである。なかでも西谷遺跡は多数の後期中葉の遺物を中心に中期から晩期までの遺物を出土している比較的規模の大きい遺跡で、貯蔵穴1基を含む3基の土壙は、数少ない縄文時代の遺構として前田遺跡出土の後～晩期の土壙とともに貴重なものである。また、この他に特筆されるものとしては、前田遺跡から出土したチャート製の有舌尖頭器と、金蔵～上井遺跡から

出土した石棒があげられる。いずれも県下での出土例が極めて少ないものであるが、前田遺跡の有舌尖頭器は数少ない草創期の遺物としてだけでなくチャートを素材にしたものとしては県下唯一の例であり、旧石器・縄文・弥生の各時代を通じてサヌカイトの使用が一般的なかにあって、同じ前田遺跡から出土したチャート製の極小の石鏃群とともに縄文時代草創期の使用石材を考える上で注目される。この4遺跡は何れも扇状地上に位置し、旧石器時代から縄文時代にかけて断続的ではあるがこの地域を生活の舞台にしていたことが伺える。しかし、次の弥生時代にはいるとこのような様相は大きく変化してくる。今回報告する北原大

1 北原～大法寺遺跡	6 金蔵～上井遺跡	11 御所神社古墳	16 安楽寺谷墳墓群
2 十楽寺遺跡	7 峰延遺跡	12 向山古墳郡	17 天神山遺跡
3 椎ヶ丸～芝生遺跡	8 大木遺跡	13 拝ヶ丸遺跡	18 丸山古墳
4 金地遺跡	9 北原遺跡	14 西谷遺跡	19 穴薬師古墳
5 赤田山古墳	10 前田遺跡	15 十楽寺古墳群	20 姫塚古墳

0 2km

第4図　周辺主要遺跡分布図

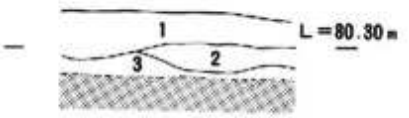
法寺遺跡・椎ケ丸遺跡以外に天神山遺跡・安楽寺遺跡・西谷遺跡・前田遺跡・大木～蜂延遺跡・金蔵～上井遺跡など弥生時代の遺跡は多く、その立地も扇状地以外の河岸段丘や丘陵部にも及び、墳墓として形成された安楽寺遺跡以外は住居址などが検出された集落址であるが、立地条件にかかわらずその時期は安楽寺遺跡・西谷遺跡以外ほぼすべて中期後半から後期初頭の時期に集中するという特徴をもっている。これは、この宮川内谷川流域の弥生時代の集落の特徴というだけではなく、これ以後の古墳時代から奈良時代まで続く傾向で、本格的な集落の復活は平安時代から鎌倉時代まで降らなければ見いだせない。ただ、この間、この地域が全く利用されなかったわけではなく、古墳時代には全期間を通じて古墳の造営がおこなわれたり、奈良時代から平安時代にかけては今回の十楽寺遺跡のような須恵器窯が散発的に築かれている。特に古墳は県下最大の円墳である土成町の丸山古墳をはじめ、安楽寺古墳・十楽寺古墳・皇子山古墳・御所神社古墳・向山古墳群・岩屋古墳・赤田山古墳・姫塚古墳・穴薬師古墳などが知られ、その立地も丘陵の尾根だけでなく扇状地の扇央部近くに位置するものも存在する。平安時代以降、この地域では前田遺跡・蜂延遺跡・西谷遺跡などに掘立柱建物群からなる集落が再び出現し、鎌倉以降も継続して集落として機能しつづけている。これは、平安時代、山田古嗣によって築かれたと伝えられる浦池の存在や、金蔵～上井遺跡で確認された鎌倉時代に遡ると考えられる水田面などから、平安時代から鎌倉時代にかけて、水利技術のうえで水に乏しい扇状地の条件を克服するなんらかの方法によって新たに開発が進んだこともこの地域に再び集落が形成される要因の一つになったと考えられる。

上述した遺跡は主として阿讃山麓から扇状地扇頂部にかけてのものが大部分を占めているが、それから更に吉野川寄りの扇央部や扇端部・沖積地地域では遺跡の存在は確認されていない。しかし、上板町東部を流れる泉谷川下流域の扇端部から沖積地にかけての地域や、これに隣接する板野町の黒谷川下流域の沖積地には神宅遺跡や黒谷川郡頭遺跡・宮ノ前遺跡・古城遺跡などの弥生時代以降の遺跡が点在していることを考えると、この地域でも同様の遺跡が発見される確率は極めて高いと考えられ、弥生時代以降の山麓部の遺跡の著しい遍在現象はこれら扇端部から沖積地にかけての調査が進展することによって明らかにされる可能性がある。

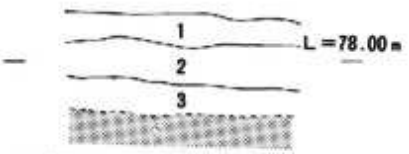
3　調査成果

(1)　遺跡の基本層序（第4図）

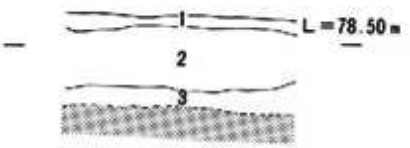
今回の調査の対象となった地点は、北原遺跡の中を東西に走る中央構造線によって引き起こされた地溝帯にそって設けられている。北から南に向かって緩やかに傾斜する扇状地の扇央部を横切る地溝帯の南岸に細長く設けられた調査区は、扇状地の傾斜に沿って地溝帯に面する北西側が最も高く、南東に向かうにつれて序々に下がり、その比高差は2m以上になる。扇状地の堆積のため、基本となる層序は大小の砂岩の円礫と粒子の細かい浅黄色シルトから構成されているが、標高の高い北西側とそれより低い南東側では層序は若干異なっている。北西部では、場所によっては耕作に伴う茶褐色の腐植土の堆積が若干認められるものの、その大部分が地表部の耕作土にまで砂岩の円礫混じりの浅黄色シルト層が露出しているのに対して、南東部に向かうにしたがって表土の耕作土と浅黄色シルト層の間に、同じシルトではあるが明黄褐色土やにぶい黄色土などの色調の異なる層が間層として認められる。弥生時代の遺構は主として浅黄色シルト層の上面から検出されるが、南東部でこの層の上部に堆積している明黄褐色やにぶい黄色土層からは青磁椀や土師皿・土釜・土鍋などの室町時代頃の遺物が出土しており中世の遺物包含層と考えられるが、遺構などは検出されなかった。



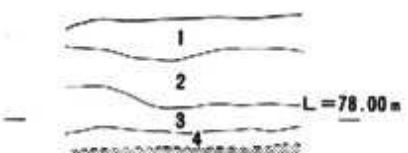
A地区　F－12グリッド北壁土層図
1.表土
2.浅黄色シルト質土2.5Y7/3
3.浅黄色シルト質土2.5Y7/4



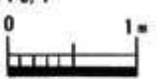
B地区　F－24北壁土層図
1.表土
2.浅黄色シルト質土2.5Y7/3
3.浅黄色シルト質土2.5Y7/4



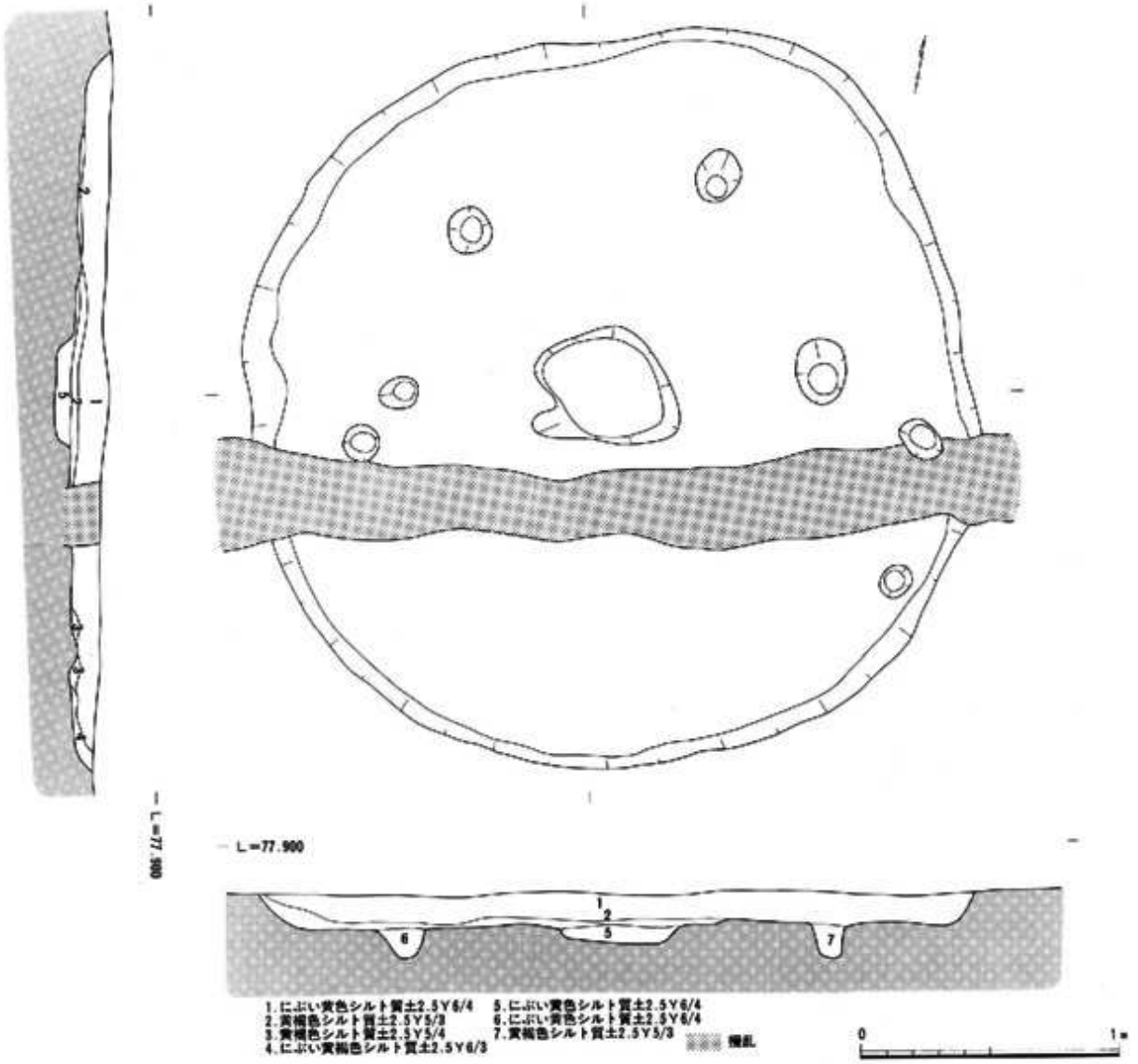
B地区　G－32北壁土層図
1.表土
2.浅黄色シルト質土2.5Y7/3
3.浅黄シルト質土2.5Y7/4



B地区　A－29グリッド南壁土層図
1.表土
2.浅黄色シルト質土2.5Y7/3
3.にぶい黄色シルト質土2.5Y6/4
4.黄褐色シルト質土2.5Y5/4



第5図　北原～大法寺遺跡基本土層図

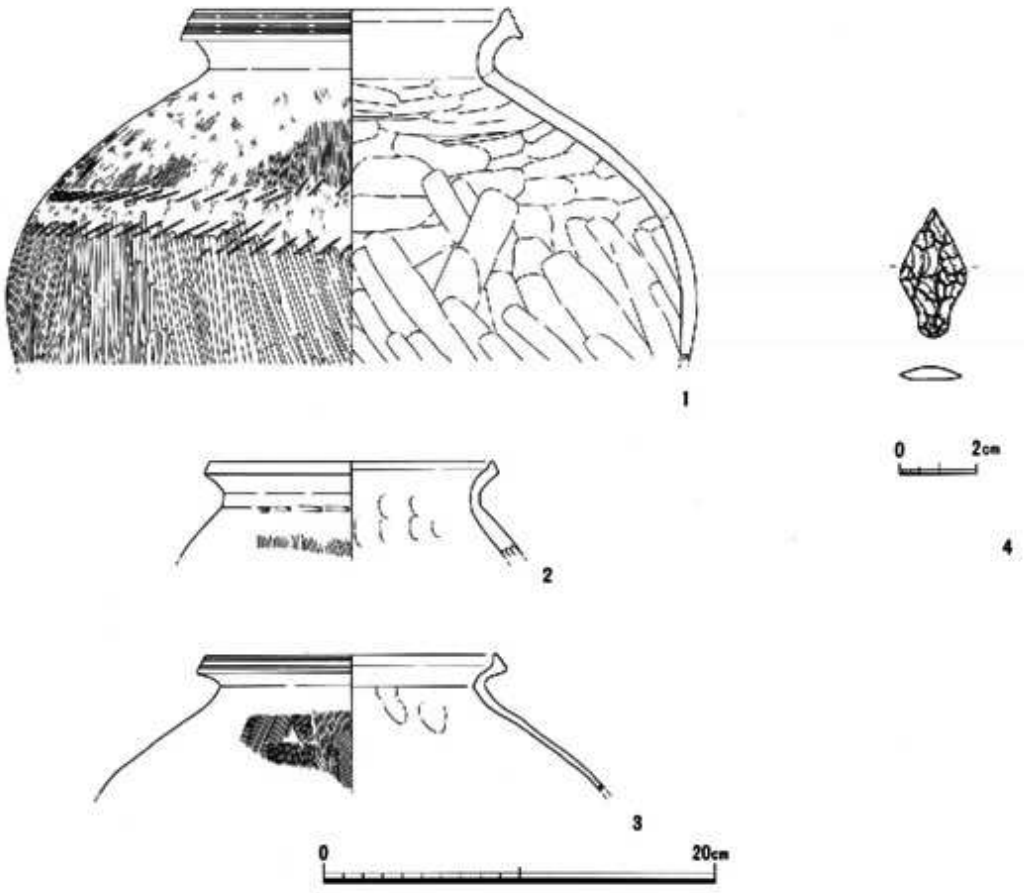


第6図　ＳＢ1001実測図

(2) 検出された遺構と遺物

竪穴住居跡（ＳＢ1001）（第６図）

Ｂ調査区の東側で検出された直径約5.7m・深さ20cmのほぼ円形の平面プランを持つ竪穴住居である。遺構内の埋土はにぶい黄色シルト土が全体に厚く堆積している以外は、床面の上に黄褐色シルトと南側の壁際に礫を多量に含んだにぶい黄色土が認められるだけの比較的単純なものである。壁の立ち上がりは明瞭で、床面には周溝や貼り床の痕跡などは認められなかった。床面のほぼ中央に長さ1.2m・深さ30cmの不整型の炉跡が設けられている。この炉跡と周辺の床面の一部には炭化物を多量に含む灰が堆積し、灰層中とその灰の周囲の床からはサヌカイトの剝片が少なからず検出されたが、この地域の弥生時代の竪穴住居の床面から度々検出されている台石の機能を持っていたと考えられる砂岩の大形の円礫は発見されなかった。住居跡内からはピットが７基検出されているが、柱穴と考えられるものはこの



第７図　ＳＢ1001出土遺物実測図

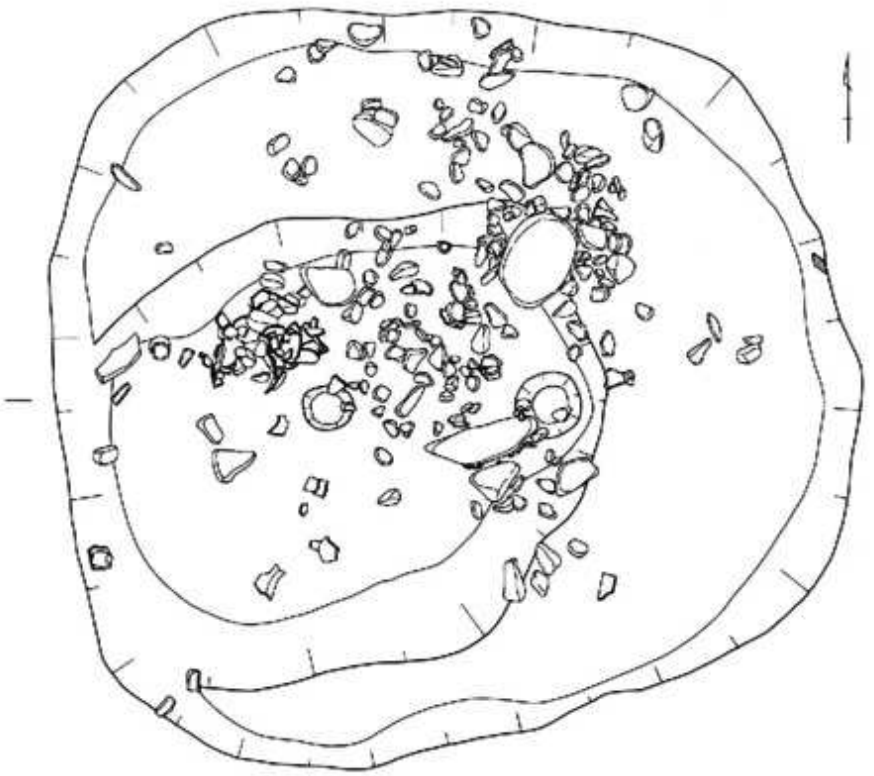
うちの４基と思われ、住居跡南側を東西にはしる攪乱から南では検出できなかった。出土した遺物は少なく、壁際で出土した比較的大きな土器片と炉跡周辺のサヌカイト製の石器以外、埋土中から土器の小片が若干検出されたにとどまっている。

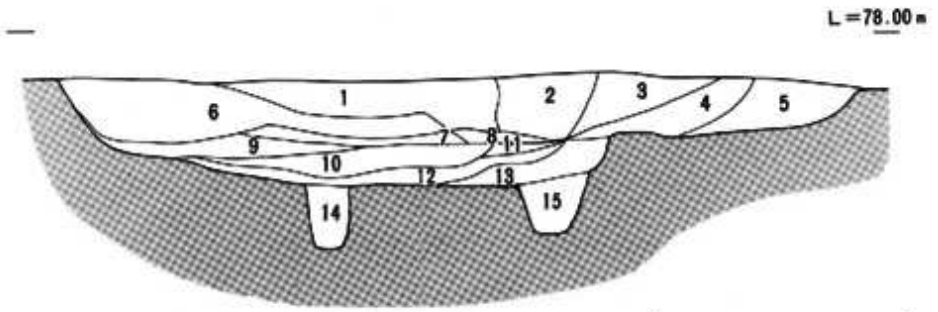
出土遺物（第７図）

１・２・３はそれぞれ壺Ｅ・壺Ａ４ａ・甕Ｂ２に分類される土器である。１はくの字形に外反する短い口縁部と球形の胴部をもった個体で、口縁端部は上下に拡張され凹線が施されている。器面調整は胴部の最大径をもつ部分をはさんで外面では上半はハケ目、下半にはヘラ磨きが施され、その境界付近にはヘラによる圧痕文が加えられている。また、同じように内面でも上半部はハケ目が、下半部にはヘラ削りが施されている。２はくの字形に外反する短い口頸部をもつ壺で、胴部はハケ目調整が施され、頸部との境には棒状工具による刺突が加えられている。３は端部を上方に拡張し凹線を施した口縁を持つ比較的小型の甕で、外面にはハケ目、内面には指頭によるナデ調整が施される。４は炉址から出土したサヌカイト製の有茎石鏃で表裏とも比較的丁寧な調整加工が行われている。

竪穴住居跡（ＳＢ1002）（第８図）

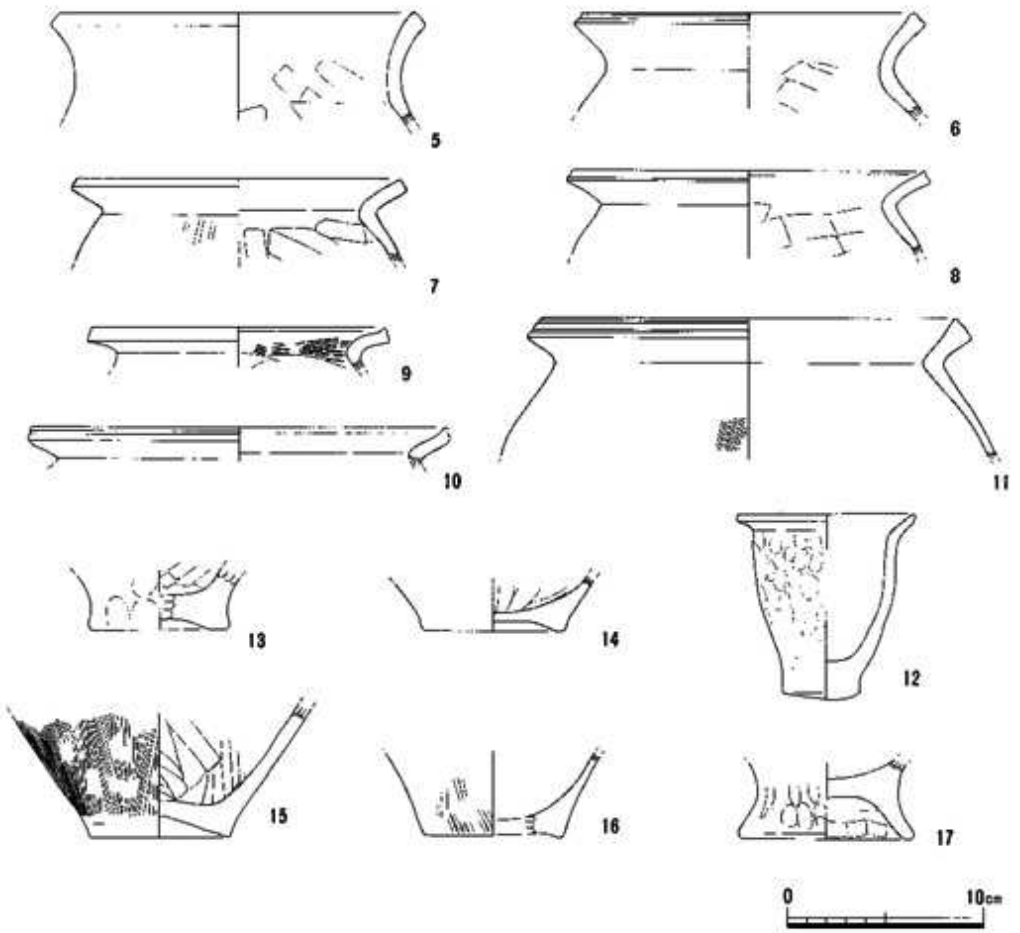
Ｄ・Ｅ－７グリッドでＳＢ1001・ＳＫ1008に隣接して検出された長軸方向の長さ約３ｍ・幅約2.8ｍ・深さ30㎝弱の円形に近いプランを持つ竪穴住居である。遺構の主軸線上に柱穴と考えられるピットが２個検出されたほか、床面の一部が長さ約1.9ｍ・幅1.7ｍの大きさでさらに一段掘り込まれている。この掘り込みの埋土とその周辺からはかなり炭化物が検出されたが、床面の焼けた痕跡や焼土の広がりなどは検出されず、炉址の存在は確認できなかった。遺物は床面からかなりの点数が出土したが、土器については細片のものが多く、図示できたものはごく僅かである。この一方で、石器は打製石鏃３・打製石包丁４・柱状片刃石斧２・砥石４と他の遺構と比較して出土点数がかなり多く、この遺構を特徴づけている。このうち、柱状片刃石斧は遺構の埋積土上部に多量に混入していた礫のなかから、台石として使用されたと考えられる砂岩製の大形の円礫２点とともに出土したものであるが、他の石器については殆どのものが床面上よりの出土であった。また、この他には床面に設けられた浅い掘り込みの中やその周辺からＳＢ1001より量は少ないものの、サヌカイトの剥片が出土している。この遺構は通常の竪穴住居よりはかなり小型であることや、床面の中央付近に設置されていることが多い炉址がみられないこと、主軸線上に柱穴と考えられるピットが２個並んでいる以外、柱穴となるようなものが無いことなど現在までこの周辺地域で調査された同時期の住居とはその規模や構造を異にしており、通常の住居址とはその性格を異にする作業場その他の機能をもった小竪穴状遺構とでも呼ぶほうがふさわしいかもしれない。





1. にぶい黄褐色シルト質土10YR5/3
2. 暗灰黄色シルト質土10YR5/2
3. にぶい黄橙色シルト質土10YR6/4
4. にぶい黄褐色シルト質土10YR5/4
5. 黄褐色シルト質土2.5Y5/4
6. にぶい黄色シルト質土2.5Y6/4
7. 黄褐色シルト質土2.5Y5/3
8. にぶい黄色シルト質土2.5Y6/4
9. にぶい黄褐色シルト質土10YR5/4
10. 黄褐色シルト質土2.5Y5/3
11. にぶい黄褐色シルト質土10YR5/4
12. 黄褐色シルト質土2.5Y5/3
13. 黄褐色シルト質土2.5Y5/3
14. にぶい黄色シルト質土2.5Y6/4
15. にぶい黄色シルト質土2.5Y6/4

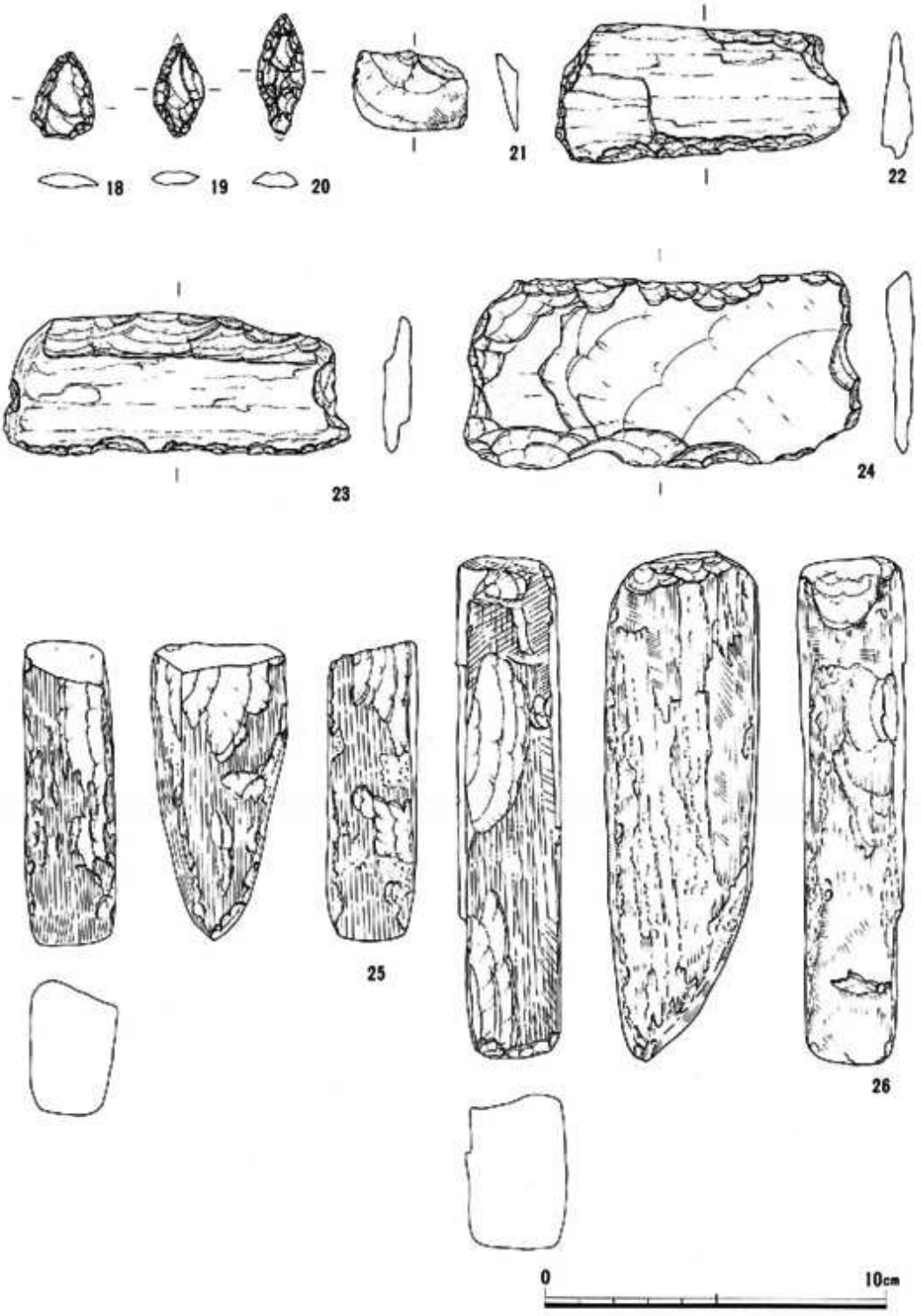
第8図　SB1002実測図



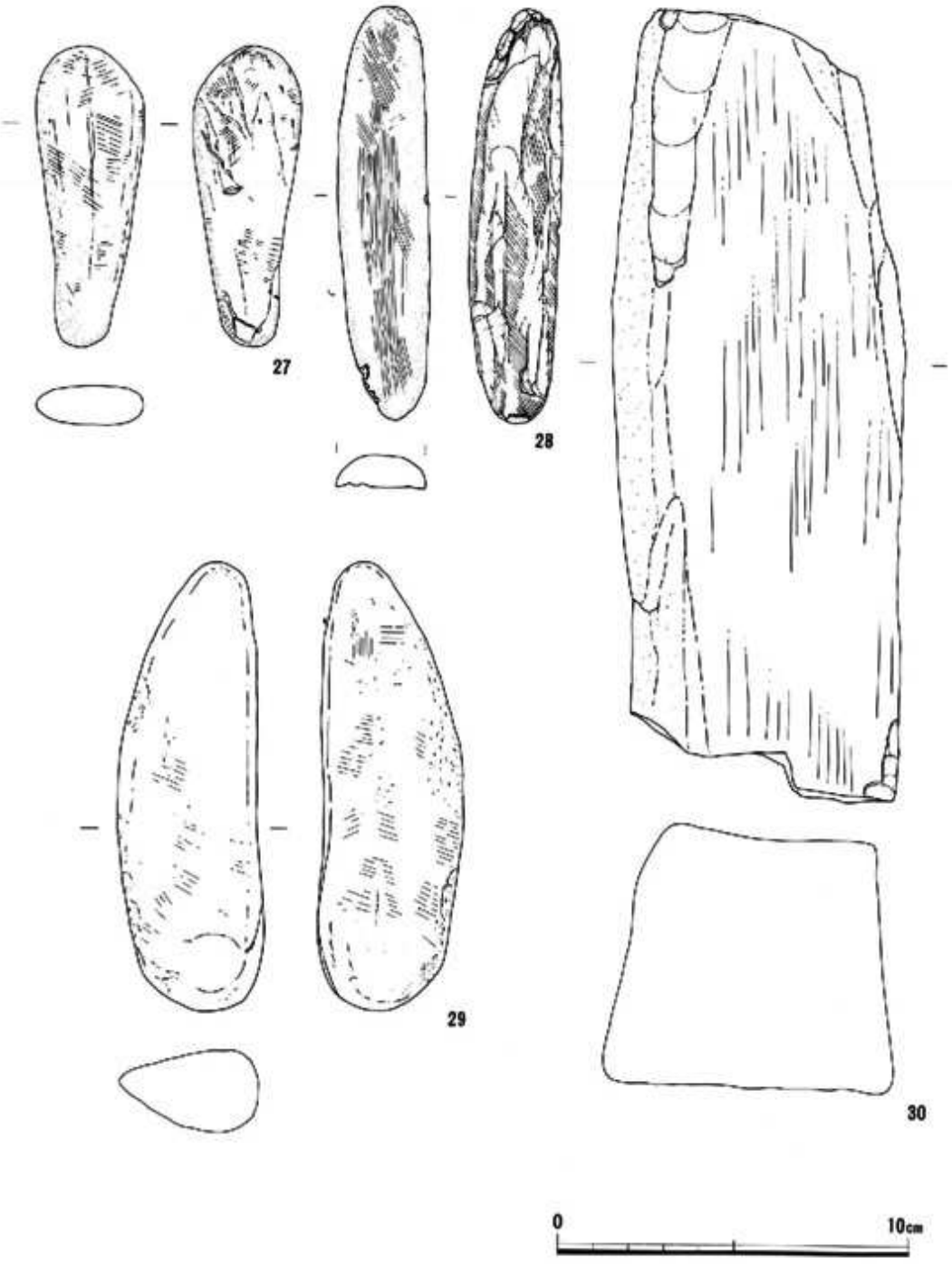
第9図　ＳＢ1002出土土器実測図

出土遺物（第9～11図）

5・6はＡ４ａ類の壺の口縁部の破片で、6の緩やかに外上方にのびる短い口縁端部には凹線が認められる。何れも内面のヘラ削りは頸部まで及んでいる。7・8はＡ類、9～11はＢ類の甕である。8は口縁端部を肥厚させ凹線を巡らせている。9～11の口縁端部の上方への拡張の度合いは小さい。調整の明かなものでは、胴部内面のヘラ削りは頸部まで施されている。12はミニチュアの甕形土器で、遺構の西側の壁際で逆さまの状態で検出されている。口縁はラッパ形に開き、胴部全面に指押さえの痕が残されている。18～20はサヌカイト製の有茎石鏃であるが、19・20の2点は逆刺と茎の境が不明瞭である。22～24は結晶片岩製の打製石包丁で、22・23は両端に抉が入れられているのに対して24では片側にしか認められない。25・26は遺構埋積土上部から台石に用いられたと考えられる砂岩の円礫とともに出土した柱状片刃石斧で、26はほぼ原型を保っているのに対して、25は身部の中ほどから破損して



第10図　ＳＢ1002出土石器実測図

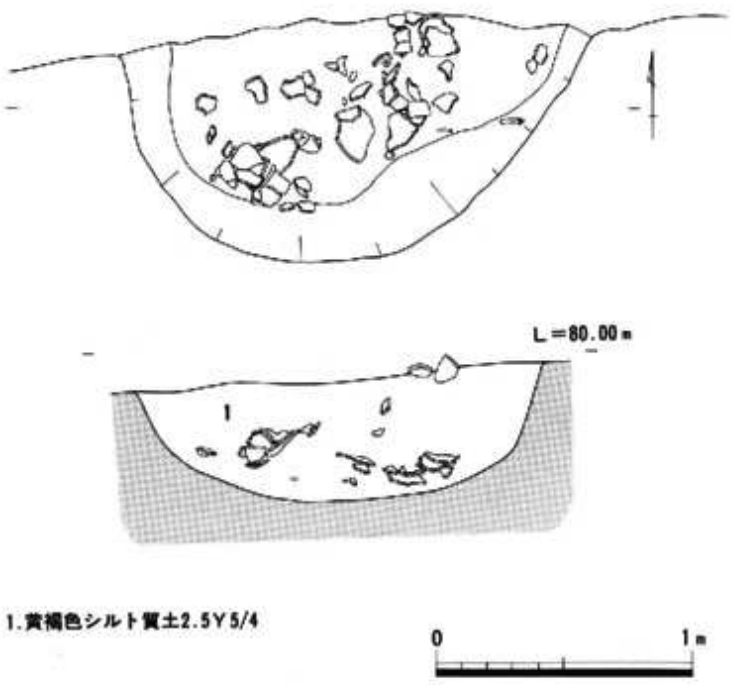


第11図　ＳＢ1002出土石器実測図

いる。両者とも加工の程度は粗く、整形の際の打撃による剝離痕や敲打痕を多く残している。27～29は自然の礫を用いた砥石である。27と29は砂岩あるいは片岩質の礫を未加工のまま使用しているが、28の例ではＳＫ1006出土の砥石と同じく、粘板岩質の細長い礫を縦に割り、その割った面と裏側の自然面を研磨に使用している。30は砂岩製の大型の砥石である。断面が方形で、一つの面は自然面をそのまま残しているが他の三面は作業面として使用されたため凹面となている。27～29のような小型の砥石はこれまでも度々この周辺の弥生時代の遺跡から出土しているが、このような大型の砥石の出土例ははじめてで、この遺構の性格を考えるうえで重要な遺物と思われる。

土壙（ＳＫ1001）（第12図）

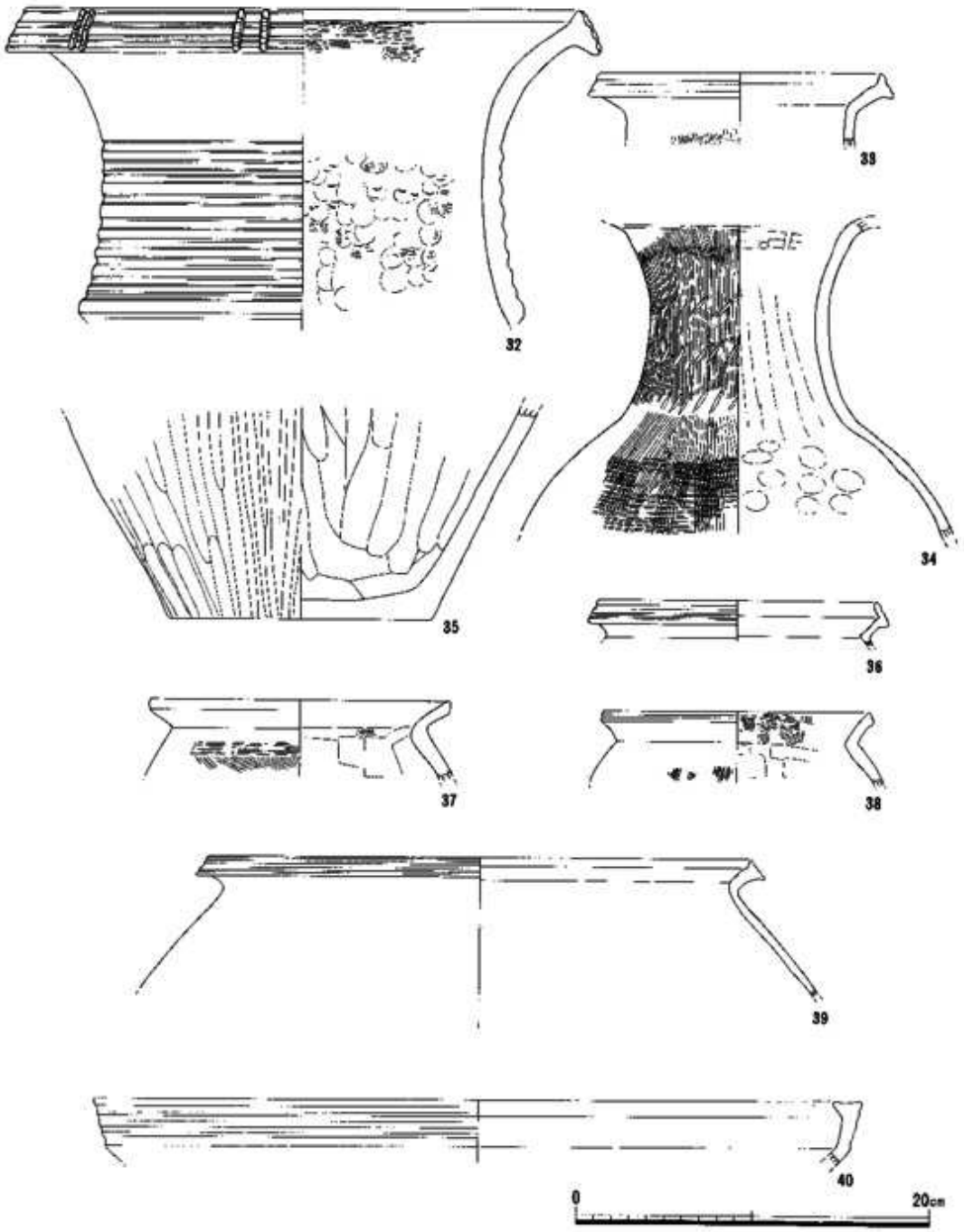
Ａ地区の西側で検出された土壙である。北側半分を果樹園造成に際しての壕堀によって破壊されているため正確な大きさを明らかにすることはできないが、恐らく直径２ｍ・深さ50㎝前後の楕円形にちかい平面プランを呈するものと考えられる。検出当初、遺構上面が砂岩の礫に広く覆われ人為的な集石の可能性も考えられたが、調査が進むにつれ、同様な状況の自然の礫溜まりが数カ所で認められたことや、礫中に土器片などの遺物を殆ど含まない事などから自然に堆積したものであると考えられた。遺構内の埋土はシルト質の黄褐色土だけの堆積の中に遺物とともにやや大型の礫を混入している程度の単純な状態であった。遺物は遺構の比較的下部から多く出土している。



第12図　ＳＫ1001実測図

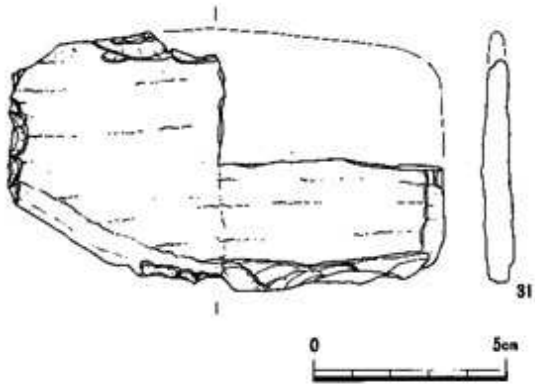
出土遺物（第13～14図）

壺Ａ１・Ａ２ａ・甕Ａ・Ｂ・Ｃ２・鉢がそれぞれ出土している。32は口径20㎝以上をはかるＡ１類に分類される大型の壺で、上下に拡張さ



第13図　ＳＫ1001出土土器実測図

れた口縁端部には凹線文と棒状浮文が、また緩やかに外反する頸部には幅広の凹線文が多段に施されている。器面調整は外面が横ナデだけであるが、内面はハケ目と指頭圧痕が併用されている。35はこの土器の底部で外面は幅広のヘラ磨き、内面はヘラ削りがそれぞれ施され



第14図　ＳＫ1001出土石器実測図

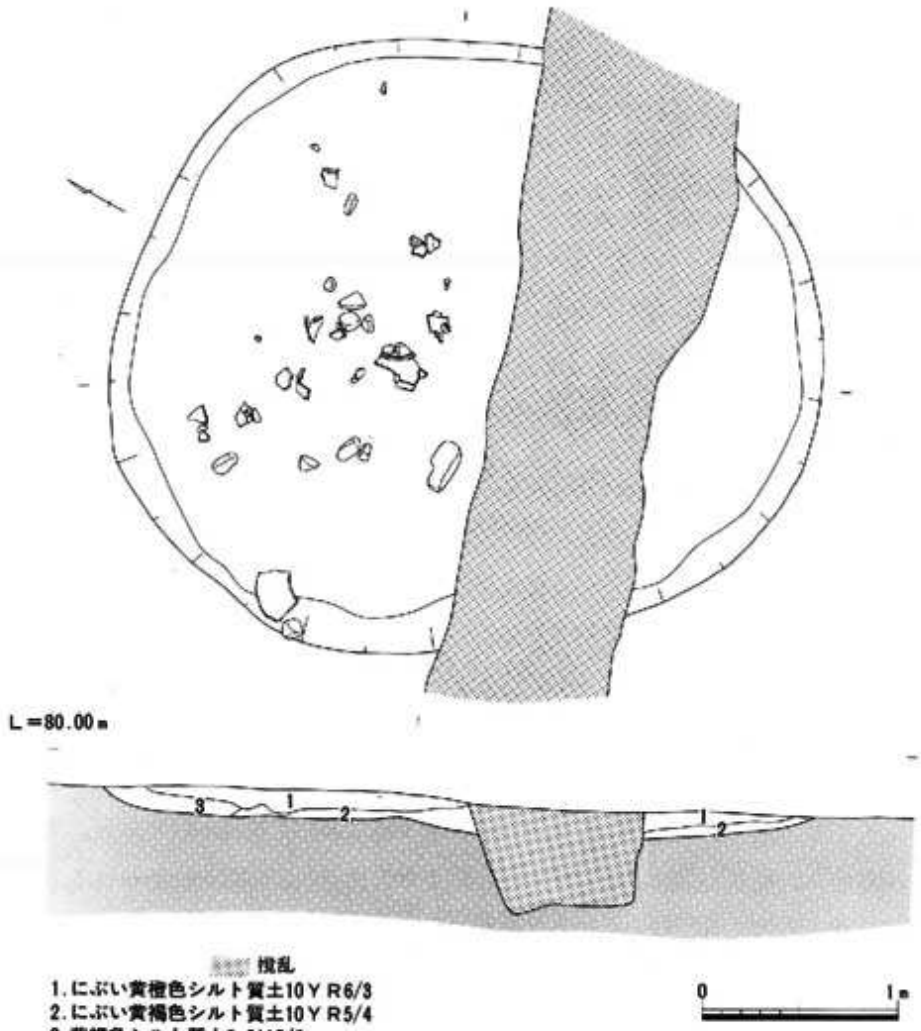
ている。33・34はいずれもＡ２ａに分類される口径20cm以下の中型壺で、33は頸部から斜め外上方に伸びた口縁端部が上下に拡張され、凹線が施されている。器面調整は34の場合、外面には頸部から胸部にかけて全面にハケ目調整が施されているが胴部の一部には平行叩きも認められる。内面は口縁は横ナデ、頸部は指頭によるナデ、胴部上半は同じく指頭による圧痕がそれぞれが施されている。甕はＡ・Ｂ・Ｃそれぞれのタイプが出土している。Ｃ類の甕の胴部の調整は外面は不明であるが内面は指頭圧痕とハケ目調整が認められる。40は大型鉢で、やや開きぎみにのびた口縁の上端はほぼ水平に内側に拡張され、口縁下には凹線が施されている。この他の遺物として結晶片岩製の打製石包丁(31) が１点出土している。

土壙（ＳＫ1002）（第15図）

ＳＫ1001の東で検出された長軸の長さ約3.6m・短軸の長さ3.1m・深さ15cmの楕円形の平面プランをもつ遺構で、南側の一部を耕作の際の溝堀によって攪乱されている。他の土壙と比較して規模がかなり大型で、底面の一部に焼土や炭化物の広がりが認められることから小型の竪穴住居とも考えられないこともないが、この地域の弥生時代の竪穴住居に一般的な床面中央部の炉跡が認められないことや、周溝や柱穴が全く検出されていないことなどから、ここでは一応土壙としておく。また、同程度の規模で同じく底部に集石を伴う焼土層の広がりが検出された土壙が前回の調査でも出土している。遺構内の埋土は上から第１層にぶい黄橙色土、第２層にぶい黄褐色土、第３層黄褐色土の３層に分けられ、いずれもシルト質で大小の礫を多く含んでいるが、第２層では木炭や焼土なども混入している。遺構内の遺物の出土点数は少なく、床面の炭化物の広がりの中から土器の小片がややまとまって検出された以外に、めぼしいものとしては側壁近くから大形の甕の破片が出土しているだけである。

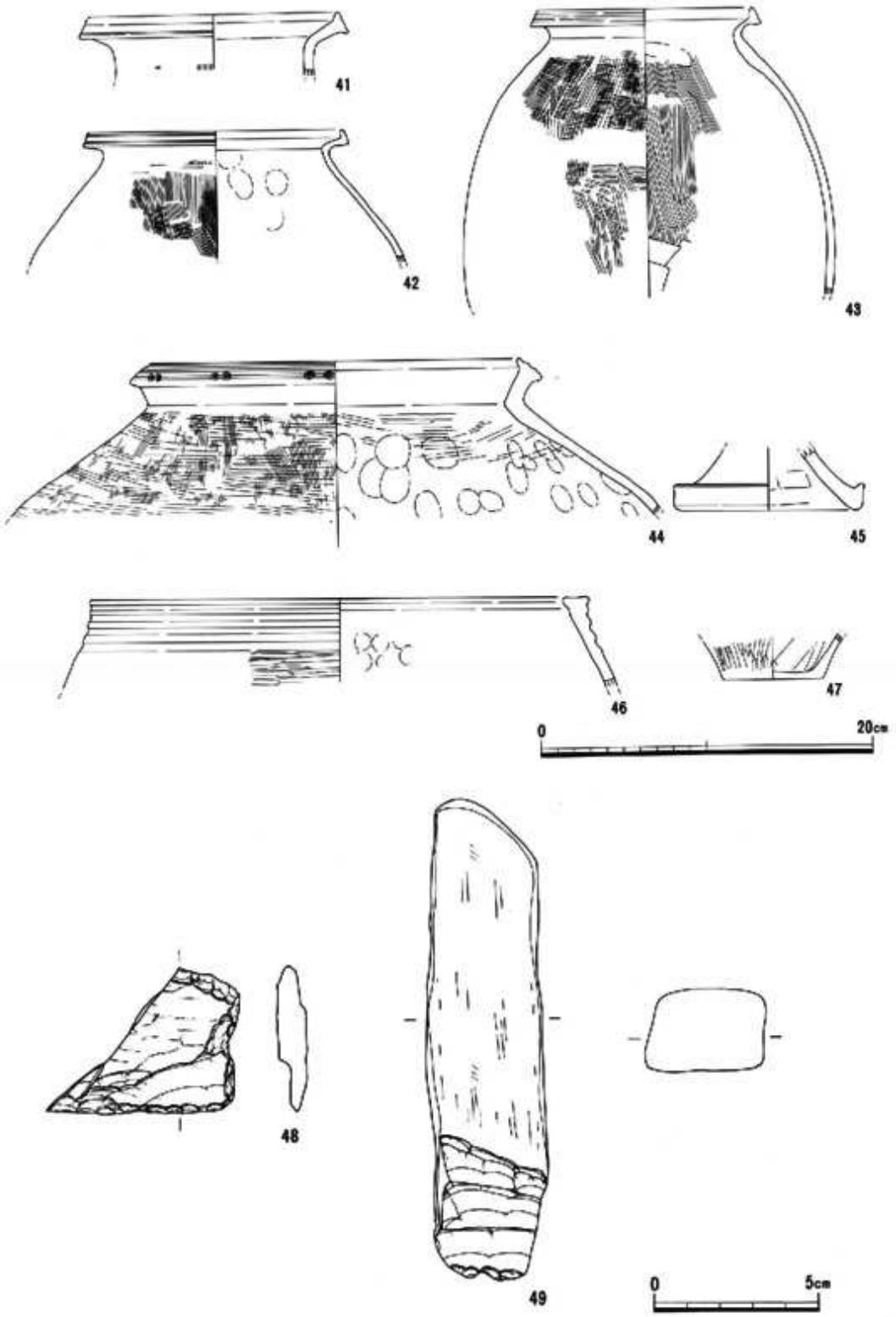
出土遺物（第16図）

壺Ａ・甕Ｂ・Ｃの他、高杯の脚と無頸壺が出土している。41は壺Ａ２ａ類の口縁部の破片で、内外面とも強い横ナデが加えられている。42・43は口縁端部が上方に拡張される口径14～16cmの比較的小型の甕であるが、胴部の調整は42が外面がハケ目、内面が指頭圧痕である

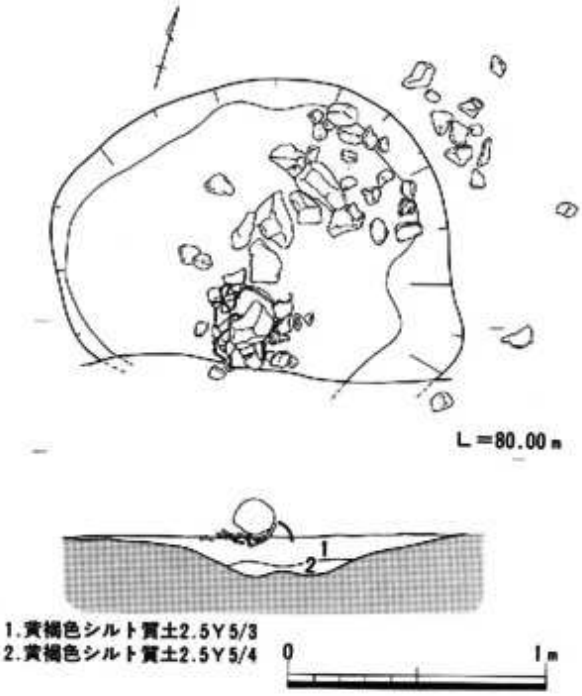


第15図　ＳＫ1002実測図

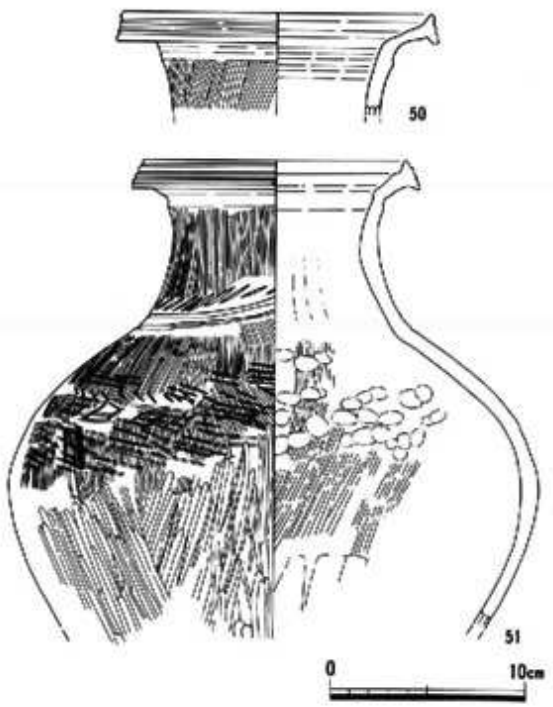
のに対して、43は外面の上半が叩きとハケ目、下半がヘラ磨き、内面の上半が指頭圧痕とハケ、下半がヘラ削りと異なっている。今回の調査の出土資料中、Ｂ２類の甕で叩きを採用しているのはこの43だけである。44はＣ２類に分類される口径25cmの大型の甕で、上下に拡張された口縁端部には凹線文ともに竹管文が施される。胴部外面の調整はハケ目と平行叩きが併用され、内面には指頭圧痕とハケ目が施される。23は無頸壺で内傾する口縁の端部は拡張され、口縁下には凹線がつけられる。調整は外面がヘラ磨き、内面が指オサエが施される。石器は結晶片岩製の打製石包丁（48）と、一端を打ち欠いた細長い礫を用いた砥石（49）が出土している。



第16図　ＳＫ1002出土遺物実測図



第17図　ＳＫ1003実測図



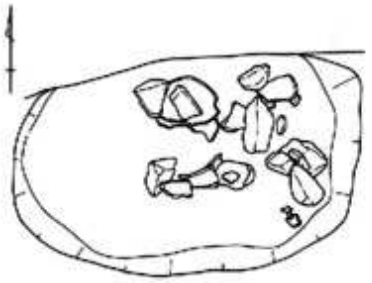
第18図　ＳＫ1003出土土器実測図

土壙（ＳＫ1003）（第17図）

ＳＫ1002の南側で検出された直径約1.5m・深さ15㎝の不整楕円形の皿状の浅い土壙で、南側の一部が攪乱をうけている。遺構検出の時点で遺物がかなり浮いた状態で出土していることから、本来の遺構の堀り込み面はもっと上部に位置し、深さも遺物の出土状況から少なくとも30㎝くらいあったものと考えられる。遺構の中からは、砂岩の円礫に混じってほぼ完形に近い壺形土器が横倒しに近い状態で一個体出土している他、炭化したエゴノ実が若干検出されている。

出土遺物（第18図）

何れもＡ２ａに分類される壺が２個体出土している。50は口縁部のみの破片で、上下に拡張された口縁端部には３本の凹線が施され、口縁部の内外面とも端部近くは強い横ナデ調整が加えられ頸部上端に僅かな突出を生じている。51は50と同じ口縁部の特徴をもつ土器であるが、口縁部の横ナデはさらに強く加えられ、外面の突出が著しい。沈線とヘラ圧痕文によって頸部と区切られた肩の強く張った胴部の上半は平行叩きの後にハケ目調整が加えられ、さらにその上にヘラ圧痕文が巡らされ、下半部はヘラ磨きによって整えられている。



0　50cm

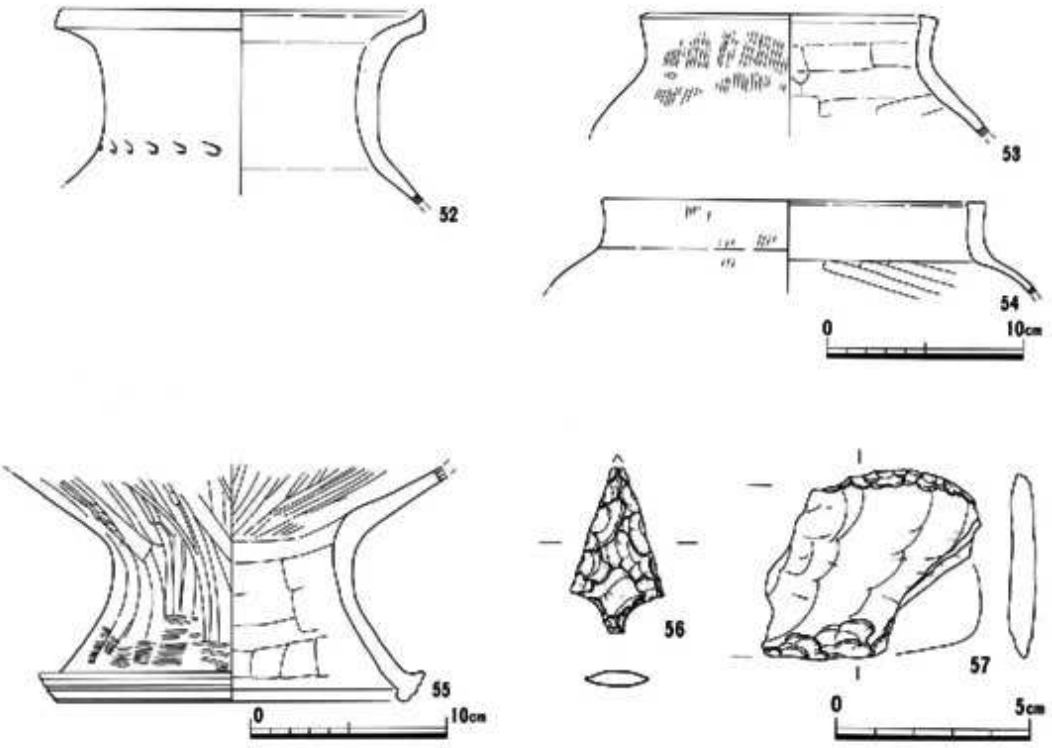
第19図　ＳＫ1004実測図

土壙（ＳＫ1004）（第19図）

Ａ地区のＥ－９・10グリッドで検出された長軸1.3m・幅約0.8mの楕円形の土壙で、一部は調査区外に延びている。遺構の埋土は1001同様粘性に乏しいシルト質の土からなる単純な一層で、遺物の他に拳大の大型の礫と小量の炭化物を混入している。

出土遺物（第20～21図）

52はＡ４ａ類の壺で、二次加熱のため器面調整などは明かではないが、頸部には棒状工具による刺突が加えられている。上方に拡張された口縁端部には、凹線などの痕跡は認められない。53・54は直口壺の一種で、肩のよく張った球形の胴部から短い口縁部が上に向かってほぼまっすぐに伸びている。いずれも外面はハケ目調整によって整えられ、内面は頸部との境までヘラ削りが行われている。55は大型の台付き鉢の脚台と考えられるもので、脚台下端面は上方に拡張され凹線文が付けられている。脚



第20図　ＳＫ1004出土遺物実測図

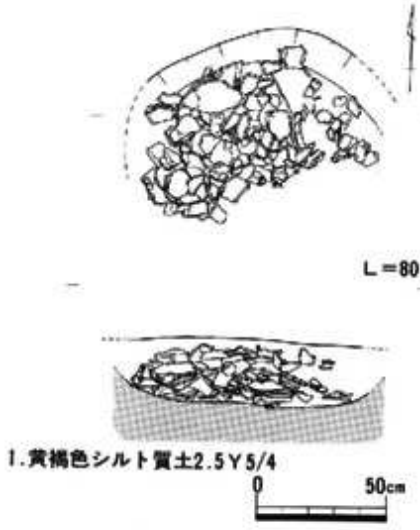
台の外面は平行叩きとナデ調整、内面はヘラ削りがそれぞれ施されている。56はサヌカイト製の有茎石鏃で、先端と茎の一部を欠いている。57は結晶片岩製の打製石包丁の破片で全体の半分以上を欠失しているが、端部には抉の痕跡が認められる。

土壙（ＳＫ1005）（第21図）

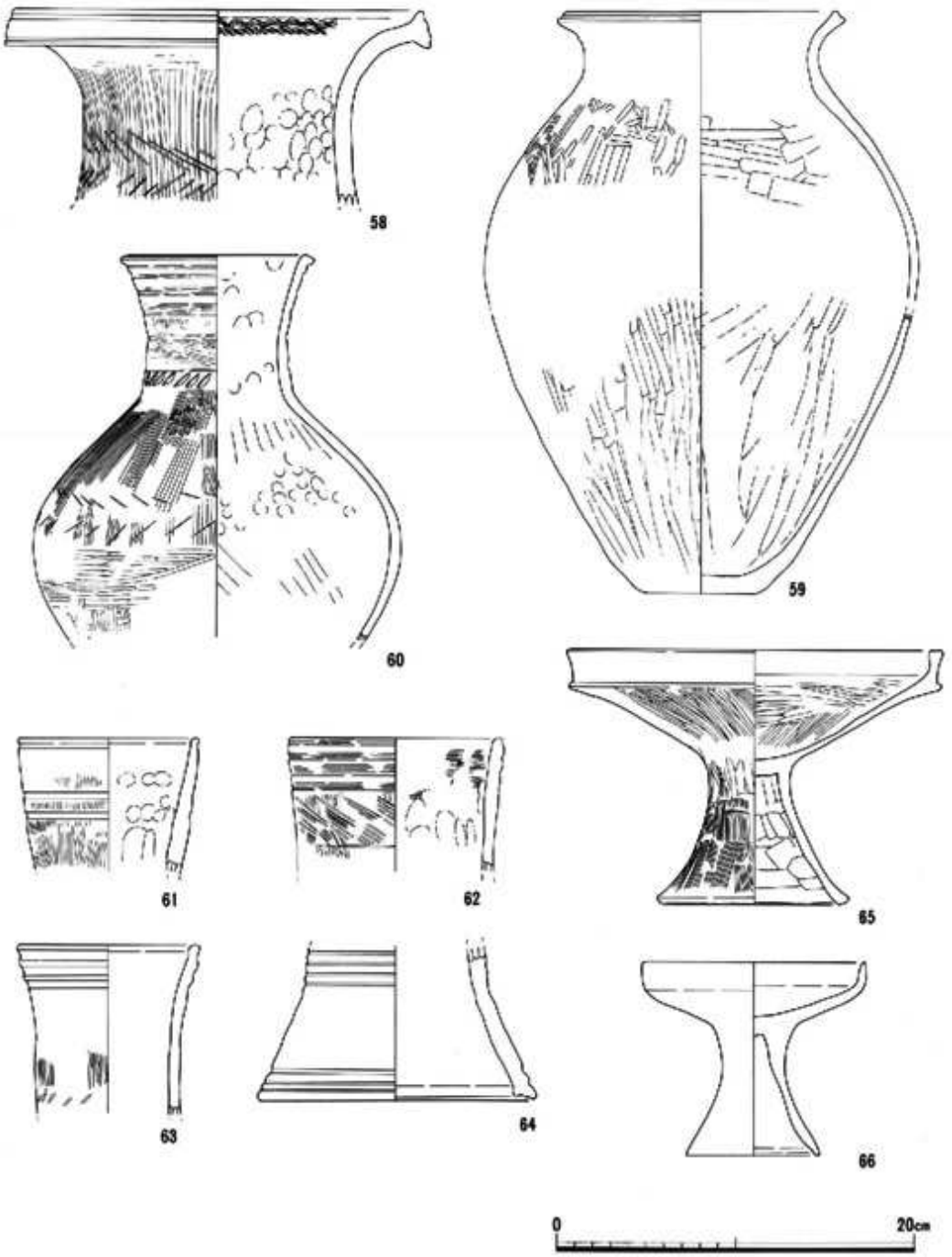
Ａ地区のＧ－14グリッドで検出された遺構で、ＳＫ1004同様、調査区の北側の境界線上に位置している。現地表面から僅か10数㎝の所から土器片がまとまって出土したため、その周辺を精査して発見した遺構であるが、調査の際の不手際からその時点で既に遺構の大半を失っており、僅かに北側の壁の一部が残っているだけであった。残された部分から類推すると、耕作土直下から掘り込まれた緩やかに落ち込む長さ１ｍ・幅60㎝の楕円形のプランをもった遺構であると考えられる。遺構の埋土は黄褐色シルト１層の単純なものだが、土壙内は底面まで土器片が折り重なったような状態で出土している。

出土遺物（第22～23図）

58はＡ１類に属す口径23㎝の大型の壺である。外面は粗いハケ目、内面は指オサエによる調整が施され、頸部にはヘラ圧痕文、口縁内面には櫛描き波状文が施文されている。59はＡ４ａ類の壺で、胴部から斜め外上方に伸びる短い口縁の端部には凹線が付けられている。外面は口縁の一部を除いて全面に粗いヘラ磨き、内面は頸部までヘラ削りが施されている。この他にも、この土壙からは同様の壺がもう１個体出土している。61～63は何れも直口壺に属する土器で、口縁部は軽く外反するものや内湾ぎみのもの、直立するものなど数種類に分けられ、口縁端部も丸くおさめるものの他に、42のような水平面をつくりだし凹線を付けたものがある。高杯は２個体出土している。65は杯部から稜をもって上方に立ち上がる口縁を持ち端部は平坦に仕上げている。66は二次加熱のため遺存状態が悪く口縁部を欠くため細部は正確さに欠けるが、おそらく杯部が椀型の形態の高杯と考えられる。65と同じく脚台端部の拡張は認められないが内面には凹線が付けられる。65の杯部は内外面ともヘラ磨き、脚台部はハケ目調整とヘラ磨きが施され、内面はヘラ削りが加えられる。67はＢ１類の甕で、拡張された口縁部に

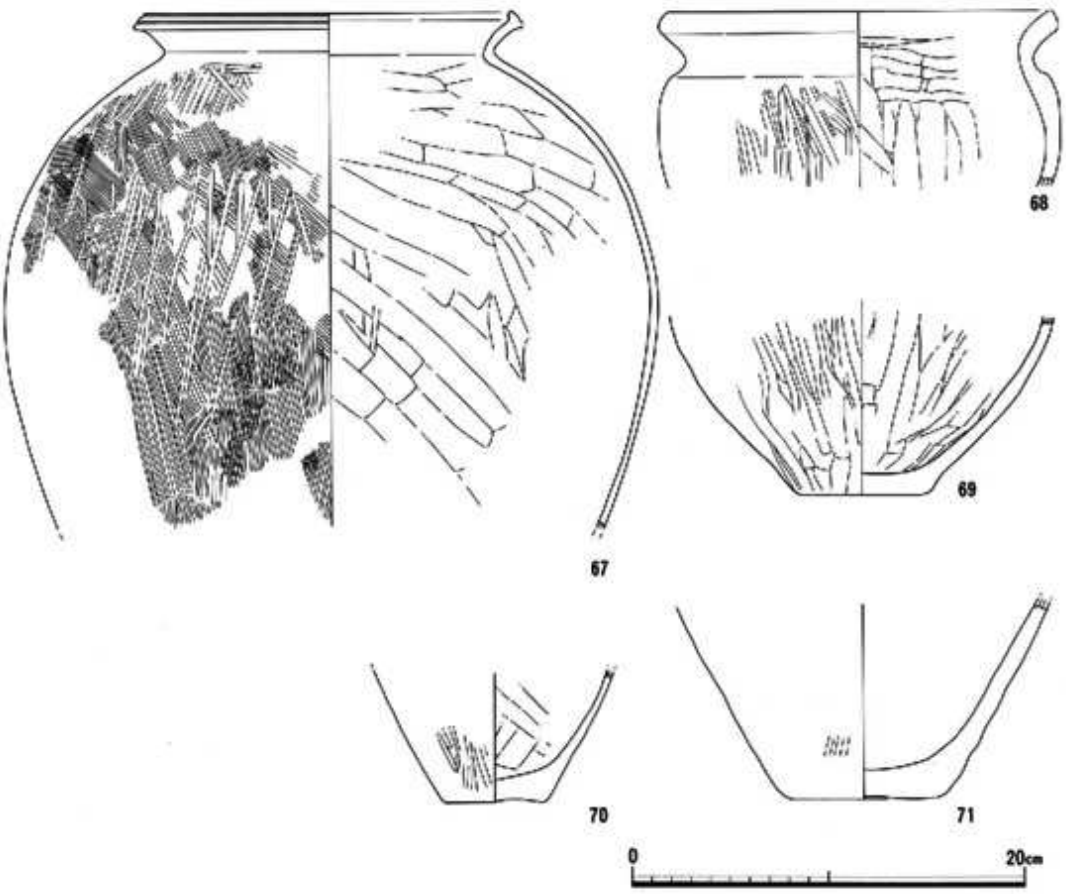


第21図　ＳＫ1005実測図



第22図　ＳＫ1005出土土器実測図

は凹線が２本付けられ、外面はハケ目調整とヘラ磨きが、内面はヘラ削りがそれぞれ施され、ヘラ削りは頸部まで及んでいる。68はＤ類の甕で、頸部から大きく外反する短くて分厚い口縁端部は丸みをもって仕上げられている。胴部外面はヘラ磨き、内面は頸部までヘラ削りが

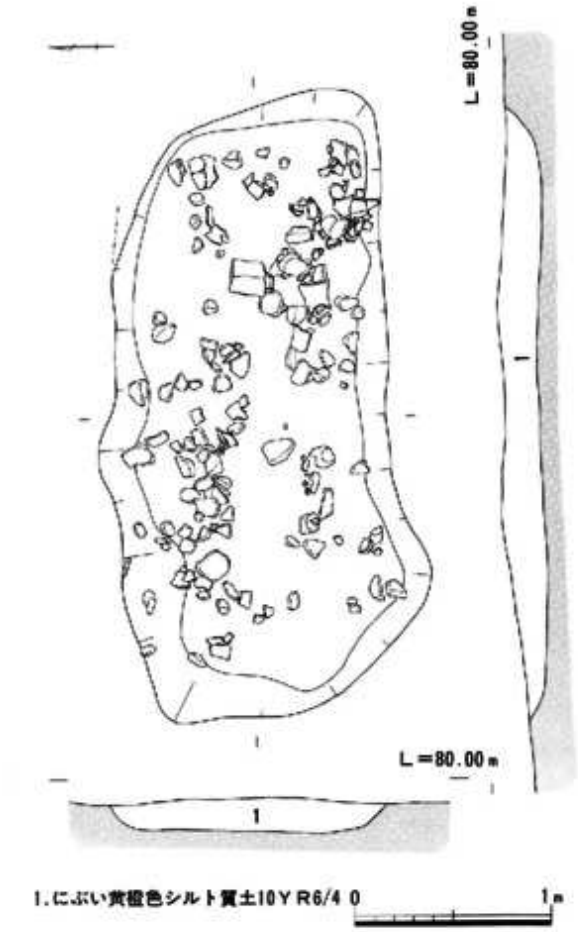


第23図　ＳＫ1005出土土器実測図

施され、胴部と頸部の境は強く撫でられて凹線状のくぼみを持つ。

土壙（ＳＫ1006）（第24図）

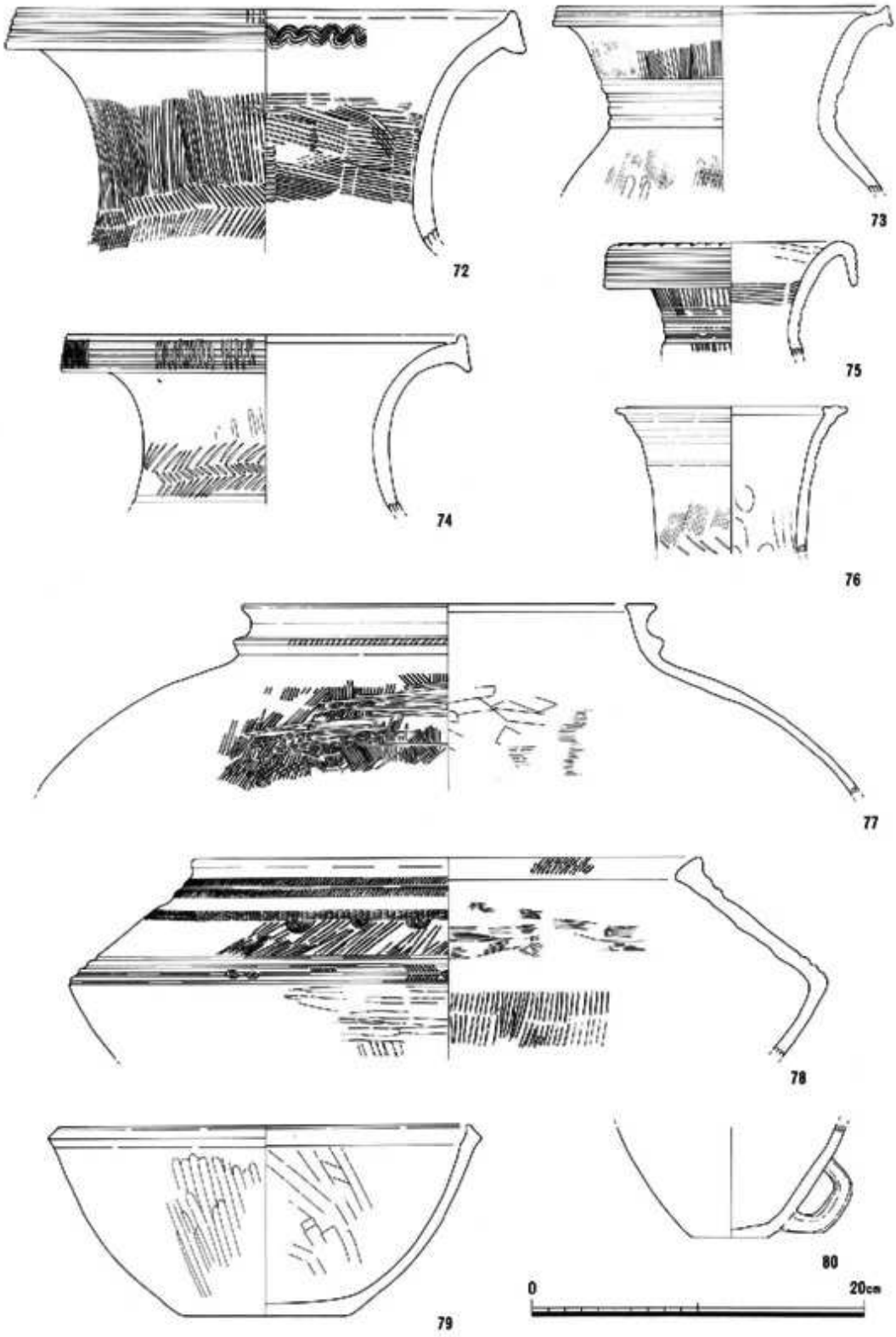
Ａ地区中央やや北寄りで検出された長軸方向の長さ3.2m・幅約1.5m・深さ20㎝の比較的大型の土壙である。検出時の土壙の形状は東西に長い不整楕円形の形態をとるが、遺構の検出された面が、ＳＫ1005同様耕作土直下と非常に浅かったことや、出土した遺物が完形のものに乏しいことなどから、上部を耕作等によってかなり削平されていることが考えられ、本来は方形または隅丸方形に近い形状のものと考えることも可能であろう。遺構内からは遺物とともに大小の砂岩の礫が炭化物をまじえて出土している。



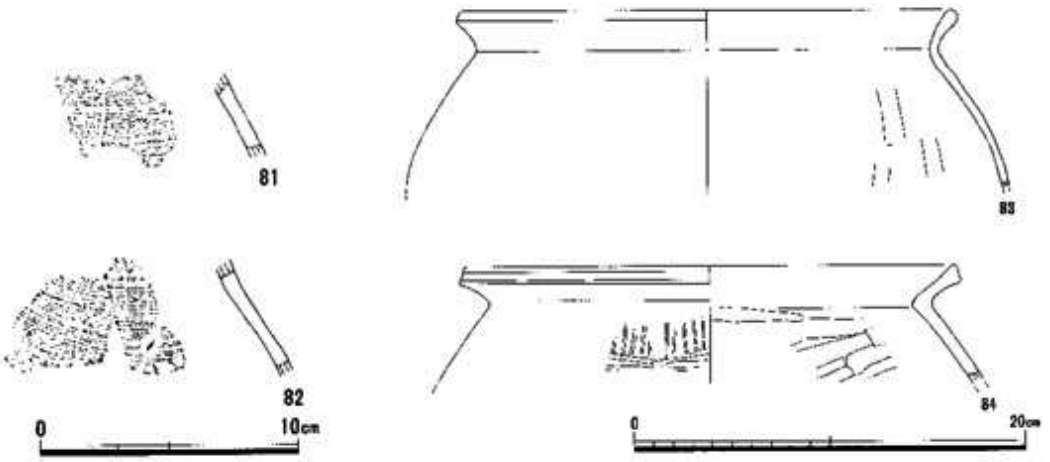
第24図　ＳＫ1006実測図

出土遺物（第25～27図）

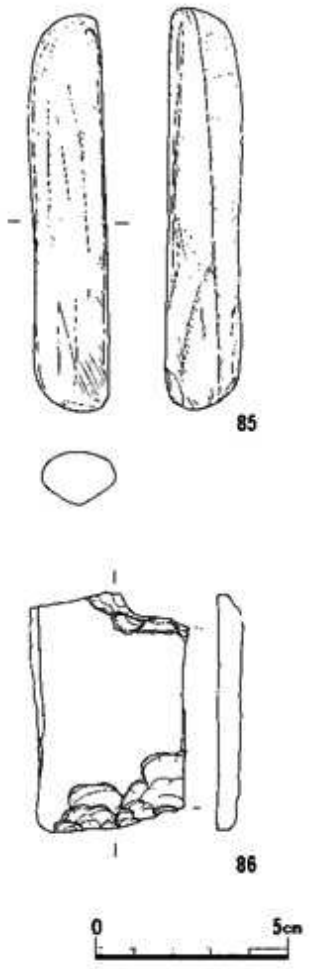
72～74は何れも口径20㎝を越えるＡ１類の大型壺で、程度の差はあれ上下に拡張された口縁端部に２～４本の凹線が巡らされているが、72・73はさらにその上にヘラ描き刻線文が加えられている。また、頸部と胴部の境にはハケ目が施された上に凹線や櫛・ヘラによる圧痕文が何段にもわたって帯状に巡らされている。口縁内面の加飾は、72の土器にＳＫ1005の58と同じような櫛描き波状文が認められる。75はＡ５類の壺である。いったん斜め外上方に開いた後、下方に大きく垂下する口縁部には凹線文と櫛による刺突が加えられ、頸部にも凹線が付けられている。このタイプの壺の出土はこれ一点のみで、他地域からの搬入品と考えられる。76はＢ３類に属する直口壺で緩やかに外反する口縁端部は内外に拡張され、凹線が付けられている。また、筒状の頸部にも凹線とヘラ圧痕文が認められる。77は端部を外方に拡張した短い口縁部と大きく張った胴部を持つ壺で、頸部には断面三角形で刻み目の施された突帯が一条巡らされている。胴部外面にはハケ目とヘラ磨き、内面はヘラ削りによる調整がそれぞれ施されているが、この他に外面にはさらに貝殻または櫛による圧痕文が巡らされている。78は破片のため全体の形は明かではないが大型の鉢形土器Ｃ１類と考えられるものである。算盤玉形に内方に大きく屈曲する胴部にはなだめ外方に拡張された平坦な口縁が続き、端部には貝殻腹縁の圧痕文が付けられている。口縁から算盤玉形に屈曲する胴部上半にかけては凹線によって区画され、櫛描き列点文や扇状文・竹管文が付けられ、各凹線間には刻み目が加えられている。また、この部分には注口が付けられていた痕跡があることから、ＳＫ1010で出土しているような注口付きの台付き鉢になる可能性が非常に高いものと考えられる。79は小型の鉢形土器で、外側に向かって斜めにそぎ落とされたような斜縁の形態の口縁の内面は横に強く撫でられ、凹面となっている。それぞれ外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りが施されている。この鉢に類似する土器が



第25図　ＳＫ1006出土土器実測図



第26図　ＳＫ1006出土土器実測図

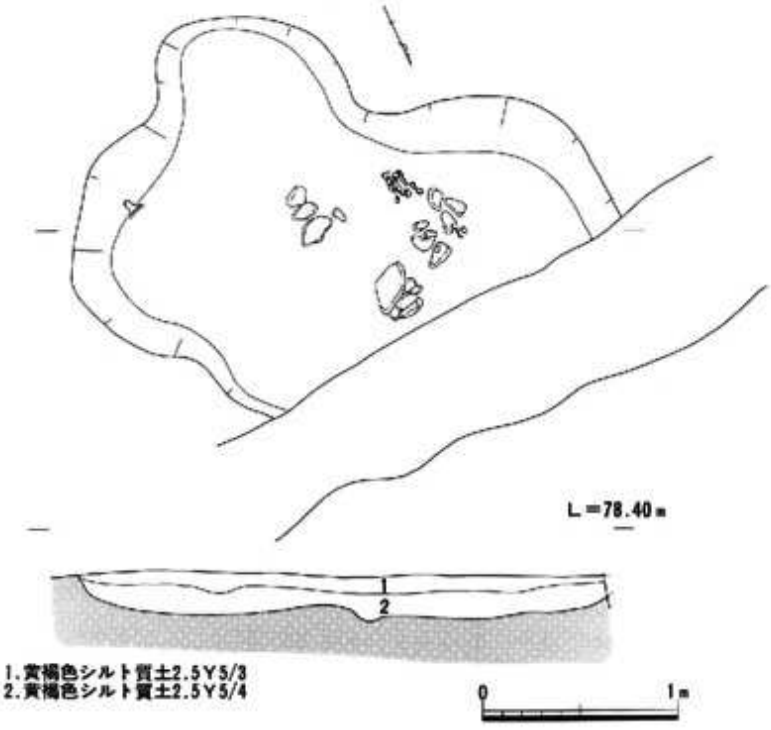


第27図　ＳＫ1006出土石器実測図

ＳＫ1010からも１点出土している。80はジョッキ形土器であるが遺存状態はよくない。81・82はともに簾状文の施文された壺の破片で、恐らく同一個体と思われる。このように簾状文が用いられる土器は次に述べるＳＫ1007で若干出土しているだけで稀な存在である。84の甕も残りが悪く、かろうじて口縁端部に凹線状のものが巡らされていることと胴部外面の粗いハケかヘラ磨きのような調整と内面のヘラ削りが認められるが、口縁の形態から83とともにＡに分類されるものだと考えられる。この他に、石器が２点出土している。１点は結晶片岩製の打製石包丁の破片（86）で身の中央部付近のため形状は不明である。もう１点は細長い粘板岩の自然礫を縦に半裁したものを用いた砥石と考えられる石器（85）である。同様の石器はＳＫ1009でも出土している。

土壙（ＳＫ1007）（第28図）

Ｂ地区のＢ・Ｃ－25・26グリッドで検出された不整形の形態の土壙である。遺構は一部耕作による攪乱を受けており全景を伺うことはできないが最大長1.5mをはかる。遺構の埋土は２枚に分けられるが何れも砂質がかったシルトである。出土した土器は細片のものが殆どで、なかには磨

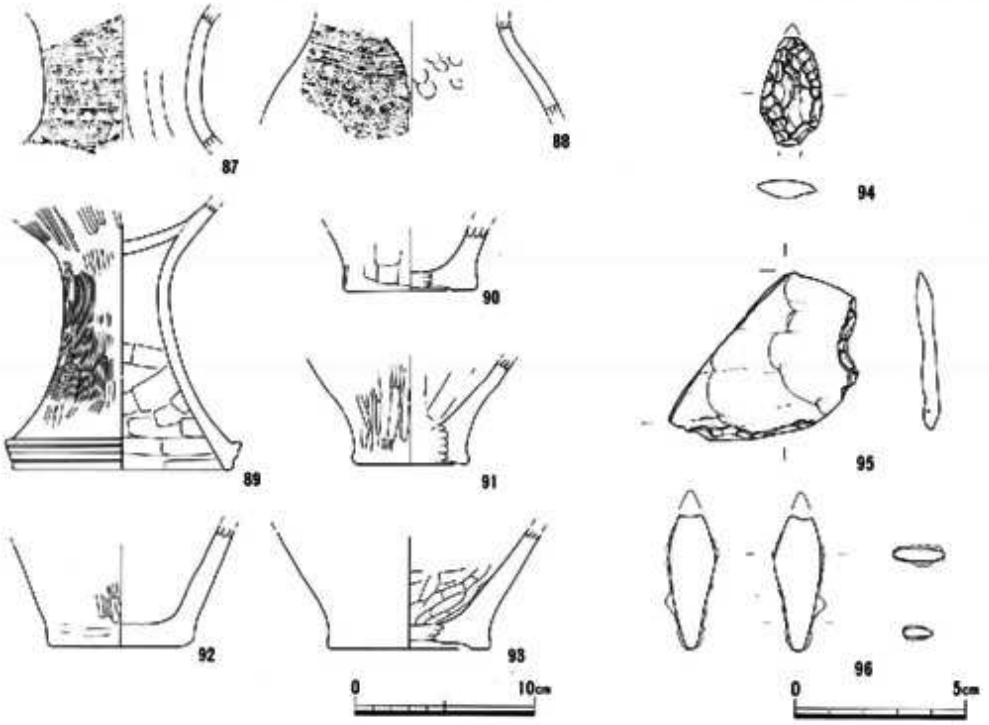


第28図　ＳＫ1007実測図

滅しているものも認められ、遺存状態が良好なものは少ない。

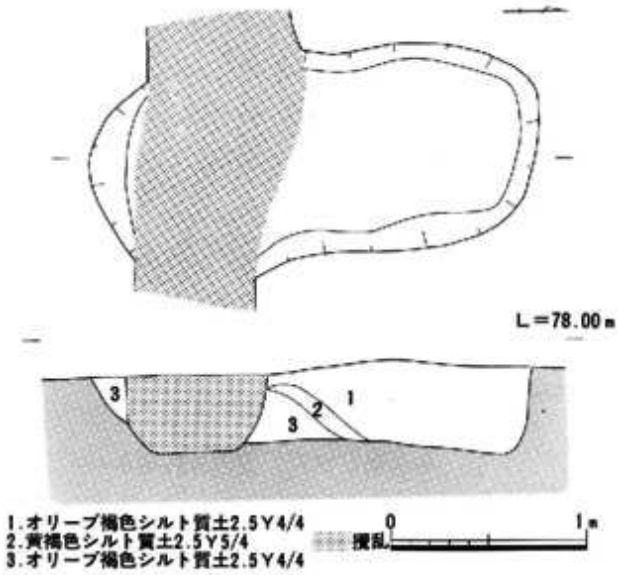
出土遺物(第29図)

87・88は簾状文または櫛描文が描かれた壺の頸部の破片で、87は簾状文の間にさらに刺突文が加えられている。２点とも胎土中に砂粒を多量に含み焼成は悪い。89は高杯の脚台部である。脚端部は上方に拡張され凹線が２本つけられている。



第29図　ＳＫ1007出土遺物実測図

脚部外面はハケ目調整とナデが併用され、内面は粗いヘラ削りが施されている。一般的にＳＫ1007出土の土器には胎土や焼成が他の遺構出土の土器と比較して著しく悪いものが多い。94はサヌカイト製の有茎石鏃で先端と茎の一部を欠く。95は結晶片岩製の打製石包丁の破片で、残っている一端には抉りがみられる。96は鉄製の鏃と考えられる遺物で、身部は偏平で鏑などは認められない。

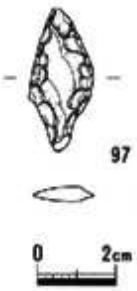


第30図　ＳＫ1008実測図

土壙（ＳＫ1008）（第30～31図）

Ｂ地区のＤ・Ｅ－29グリッドで検出された長さ2.3m・幅1.1m・深さ40㎝の楕円形のプランの土壙でＳＫ1007同様、遺構の一部を耕作によって破壊されている。遺構の埋積土はシルト質の粒子の粗い土に礫が混入し締まりは悪い。遺物の出土点数も1007同様少なく、弥生土器の小片が若干出土した以外はサヌカイト製の打製石鏃(97)が出土しているだけである。

土壙（ＳＫ1010）（第32図）

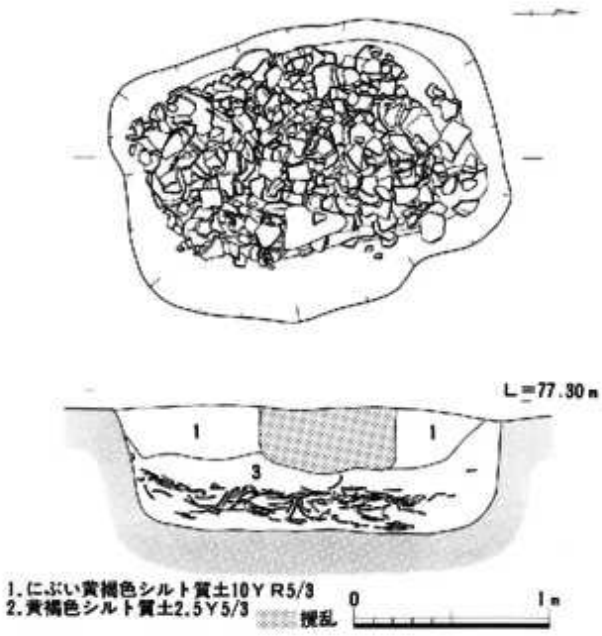


第31図　ＳＫ1008
出土石器実測図

Ｅ－39グリッドで検出された長軸方向の長さ1.9m・幅1.5m・深さ60㎝の隅丸方形に近い形態の土壙である。遺構内の堆積は２層に分かれるが、遺物の出土はほぼ下層に限られる。遺物は検出された当初、土壙内に破片の状態で折り重なる様に出土したため完形のものは少ないと思われたが、整理の過程でその多くが完形または完形に近い状態に復元された。また、土器の中には二次加熱のために赤変してボロボロになった個体が多く認められたが、遺構の埋積土には少量の炭化物が混入しているだけで焼土などは検出されず、壁面などにも熱を受けたような痕跡も認められないことから遺構内で火を焚いた可能性は少なく、遺構に投棄される以前に熱を受けていたものと思われる。

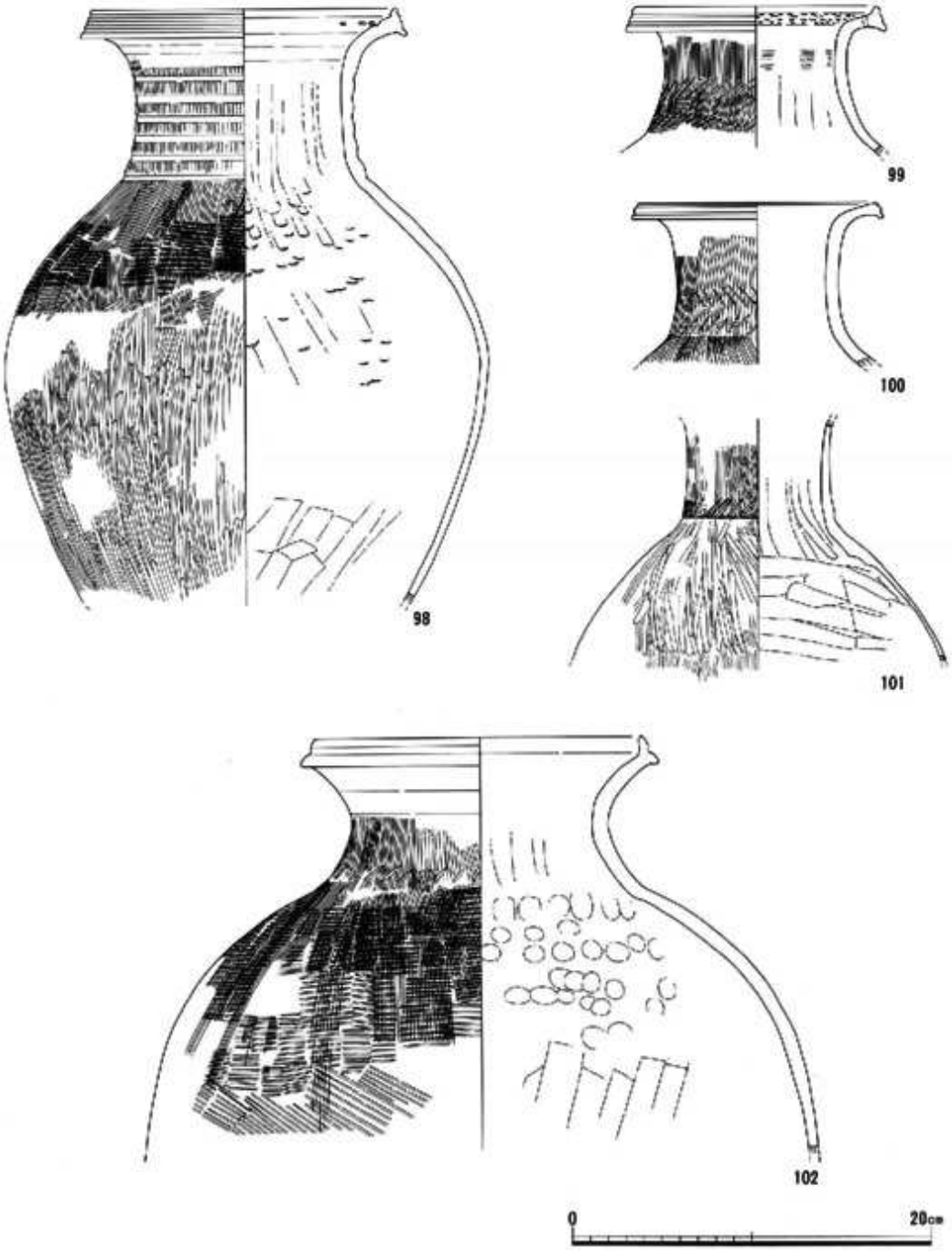
出土遺物（第33～41図）

98・99・102・103はＡ２ａ類、100・101はＡ２ｂ類にそれぞれ分類される壺である。98・

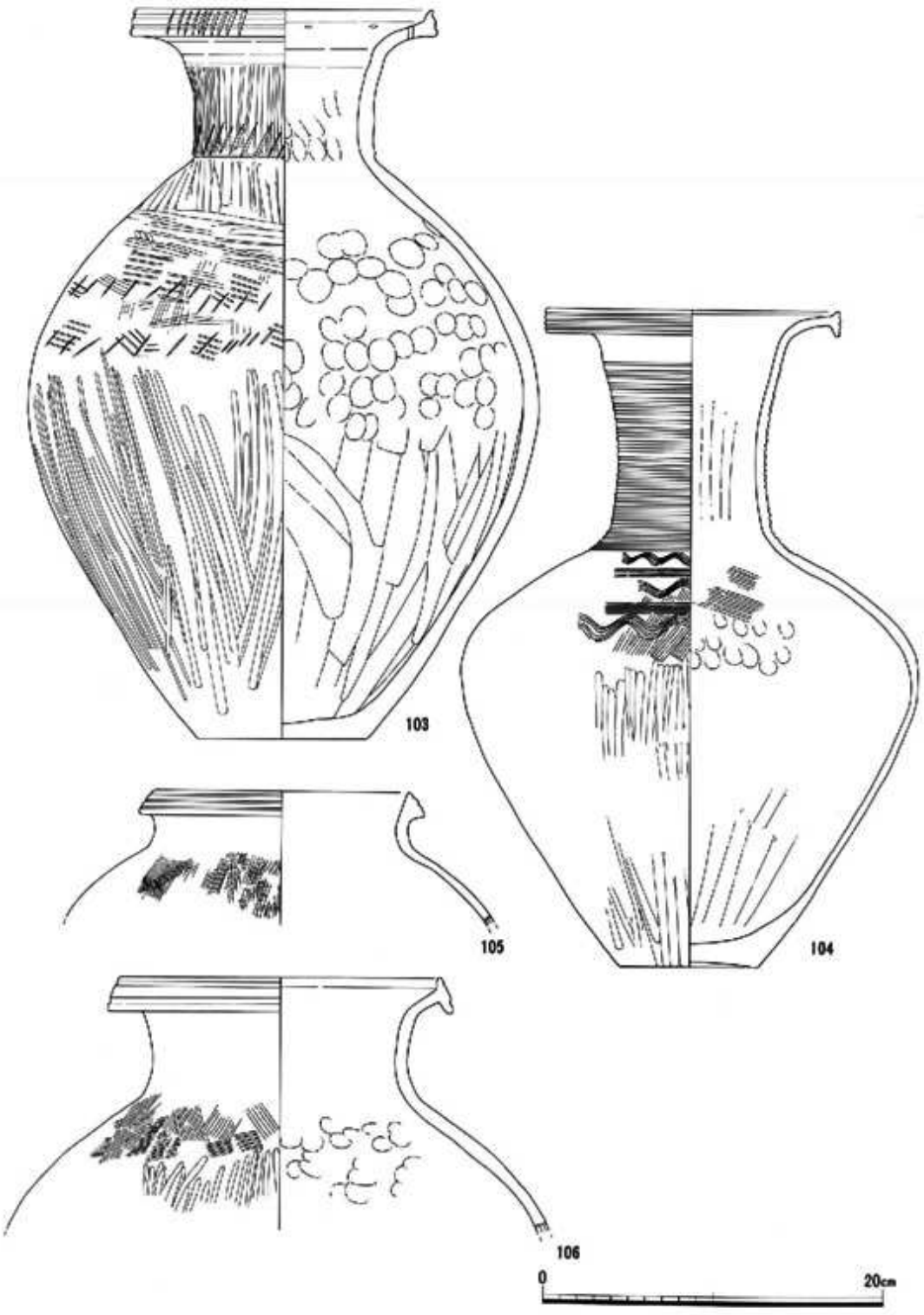


第32図　ＳＫ1010実測図

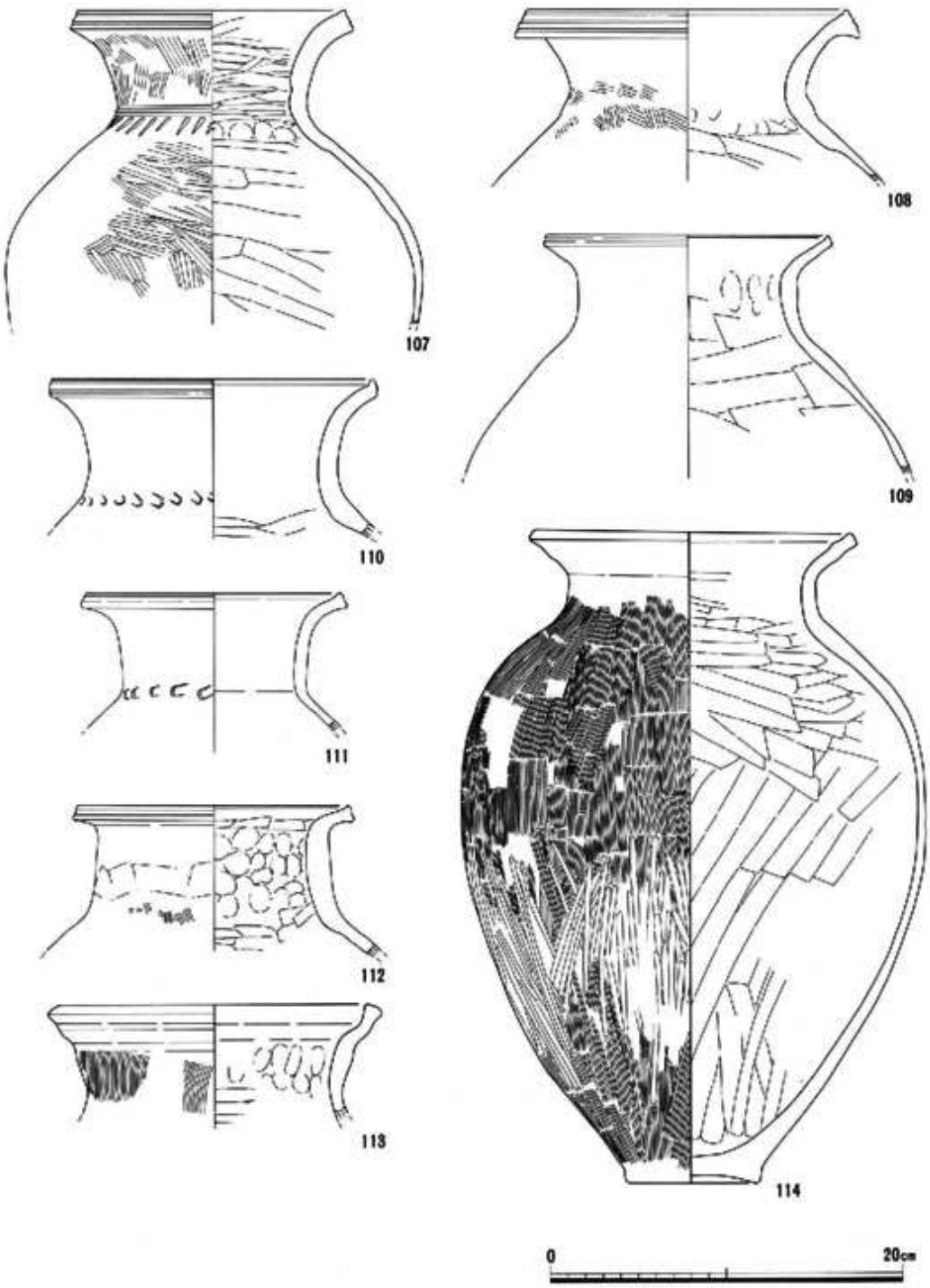
99・102の頸部にはヘラによる圧痕文がつけられているが同様の文様は100や101・102の口縁端部や胴部にかけても見られる。101は胴部外面の調整が上半がヘラ磨き、下半がハケ目と他のＡ類の壺とは逆に施され、内面の調整もヘラ削りの範囲が頸部付近まで及んでいる。また、103は外面の調整にハケの代わりに叩き目とヘラ磨きが用いられているが、部分的にはハケ目が施された後にヘラ磨きが加えられた痕跡が認められる。101・102は98～101よりも大型の土器で、98の筒状の頸部には凹線文が６条認められる。104は上方にむかって緩やかに開く筒状の頸部に水平に大きく開く口縁がついたＡ３類の壺で、上下に拡張された口縁端部と長い頸部には多条沈線が付けられている。頸部から大きく外側に張り出した肩部にかけてはハケ目調整が施された後に櫛によって水平に区画され、その間に同じく櫛描き波状文が描かれている。また、肩部以下はヘラ磨きが施されている。このようなモチーフの壺はこれまでの調査では104の土器しか出土していないが、類似する土器は吉野川下流域の徳島市南庄遺跡で中期末の時期の遺物とともに出土している。より下流域の土器の性格が強い遺物であろうか。105・106はそれぞれＥ・Ａ１類に属する壺である。107～112はＡ４ａ類、113・114はＡ４ｂ類の壺で、107～112では口縁端部を肥厚させたり、上端をわずかに上方に拡張して平坦面を作り凹線をつけている。また、107・110・111の頸部にはヘラまたは角棒による刺突文が施文されている。いずれもＡ２類と比較して器面調整や焼成が粗雑で、頸部まで及ぶ内面のヘラ削りも非常に粗い。111は２次加熱のため土器の遺存状態は悪い。113・114は短い頸部から斜め外上方へ直線的にのびる口縁を持ち口縁端部の断面は方形で口縁部の内外面は強くナデられている。115は複合口縁壺または二重口縁壺と呼ばれる大型の壺の口縁部が変化したと思われる壺Ｃで、軽く内湾する口縁には凹線が６条巡らされ、頸部にもヘラを用いて描かれたと考えられる粗い格子目文がつけられている。胴部内面全体に施されるヘラ削りは極めて粗い。今回の調査では、これ１個体しか出土していないが、前回の調査でも口縁部の破片が１点出土しただけで元々出土数の少ない種類である。この他に壺Ｂ１類(116)・壺Ｂ２類（117）・水差形土器（118）・が出土している。116は二次加熱のため遺存状態が



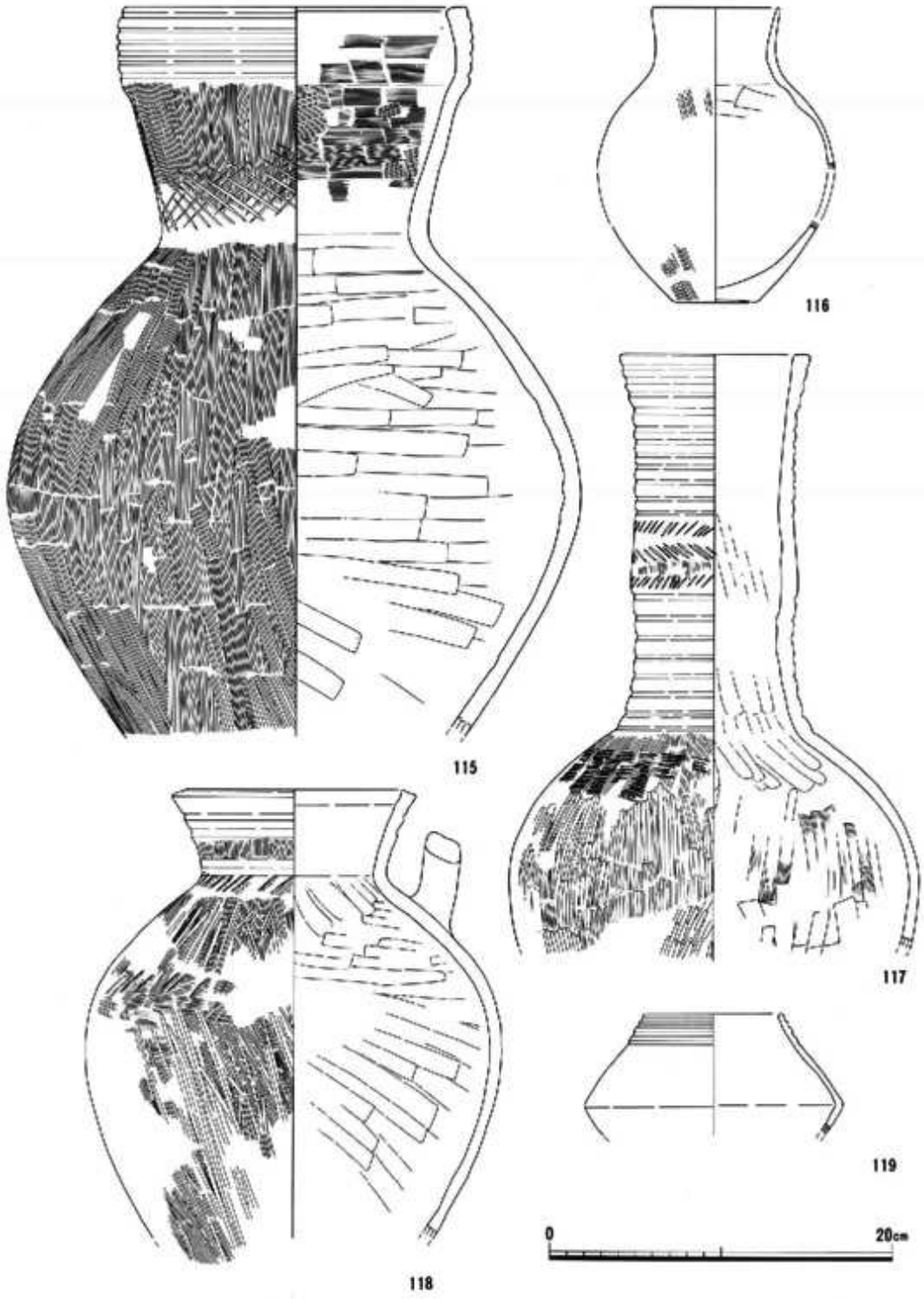
第33図　ＳＫ1010出土土器実測図



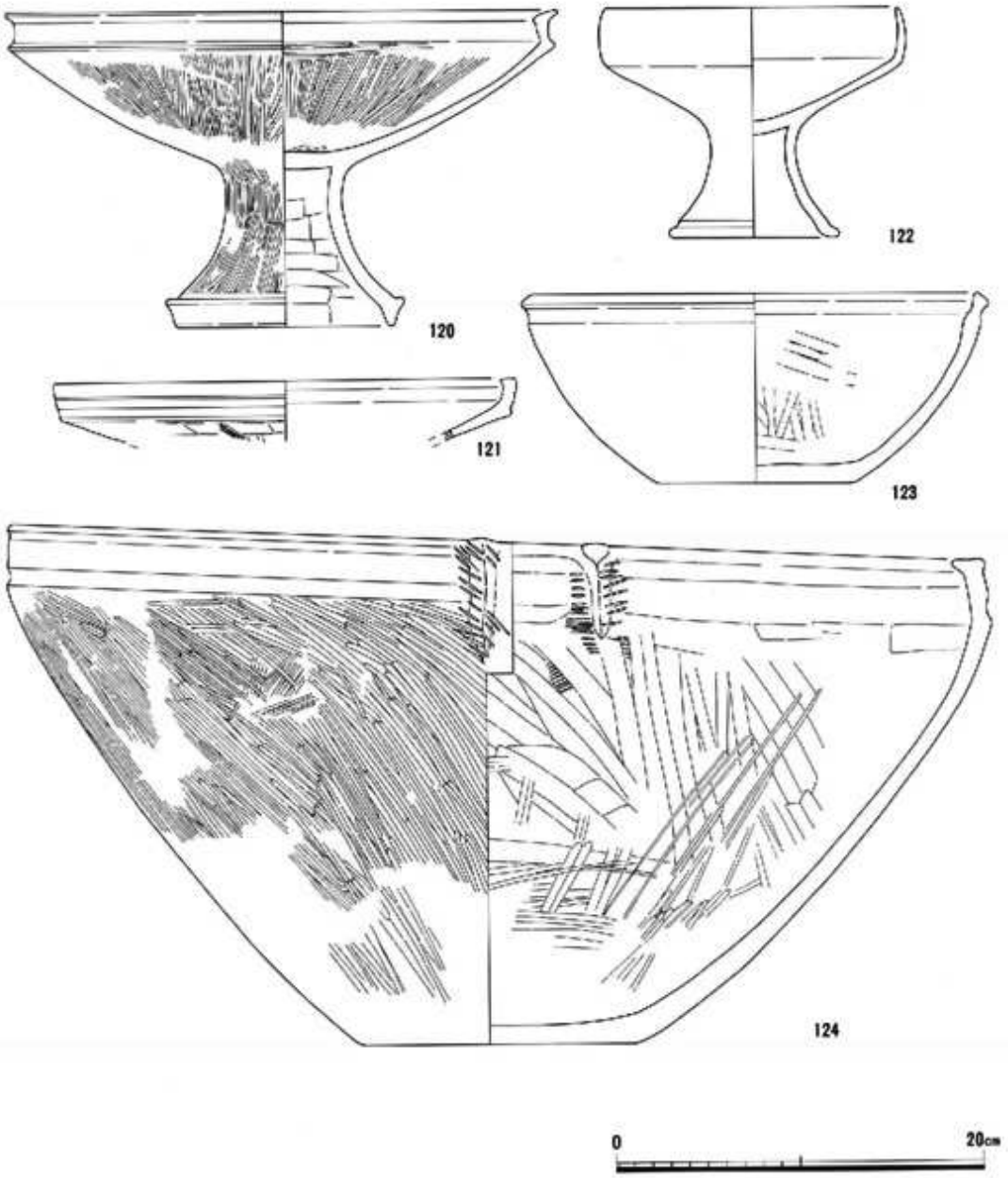
第34図　ＳＫ1010出土土器実測図



第35図　ＳＫ1010出土土器実測図

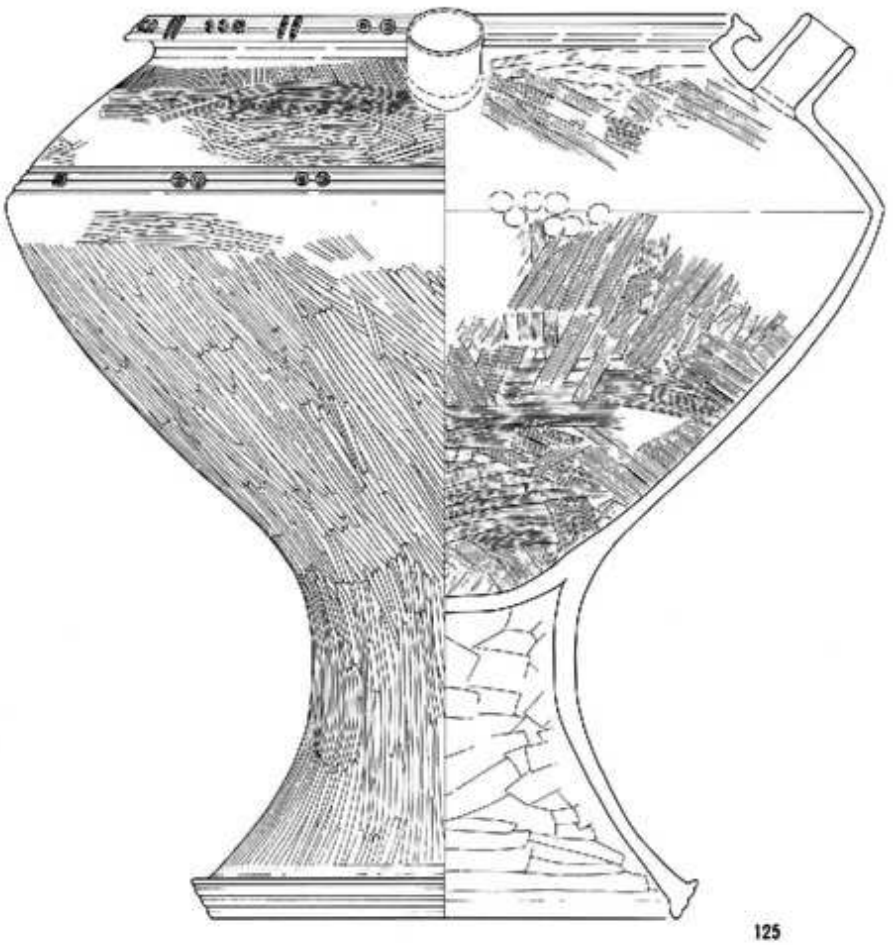


第36図　ＳＫ1010出土土器実測図



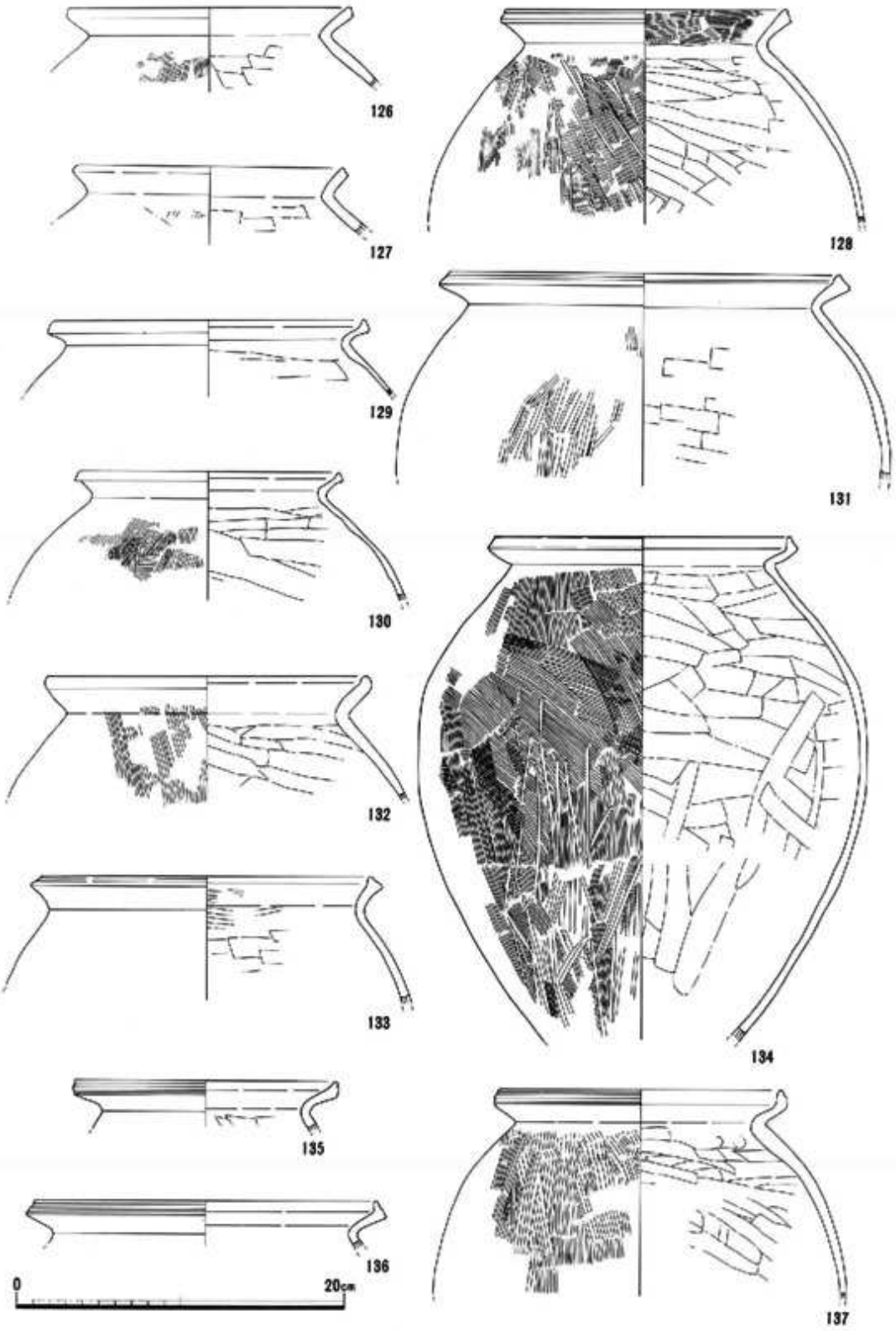
第37図　ＳＫ1010出土土器実測図

悪いが胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削りがわずかに残っている。117は球形の胴部に筒形の長い頸部がつけられている。頸部のほぼ中ほどにヘラによる圧痕文を帯状に巡らす以外は口縁直下から胴部との境界まで凹線文がつけられている。器面の調整は100～102の壺と同じ方法が用いられ、胎土や焼成なども同じ作者の手になったかと思われるほど酷似している。胴部上半には118のように把手が取り付けられたような跡も見られるが確実ではない。

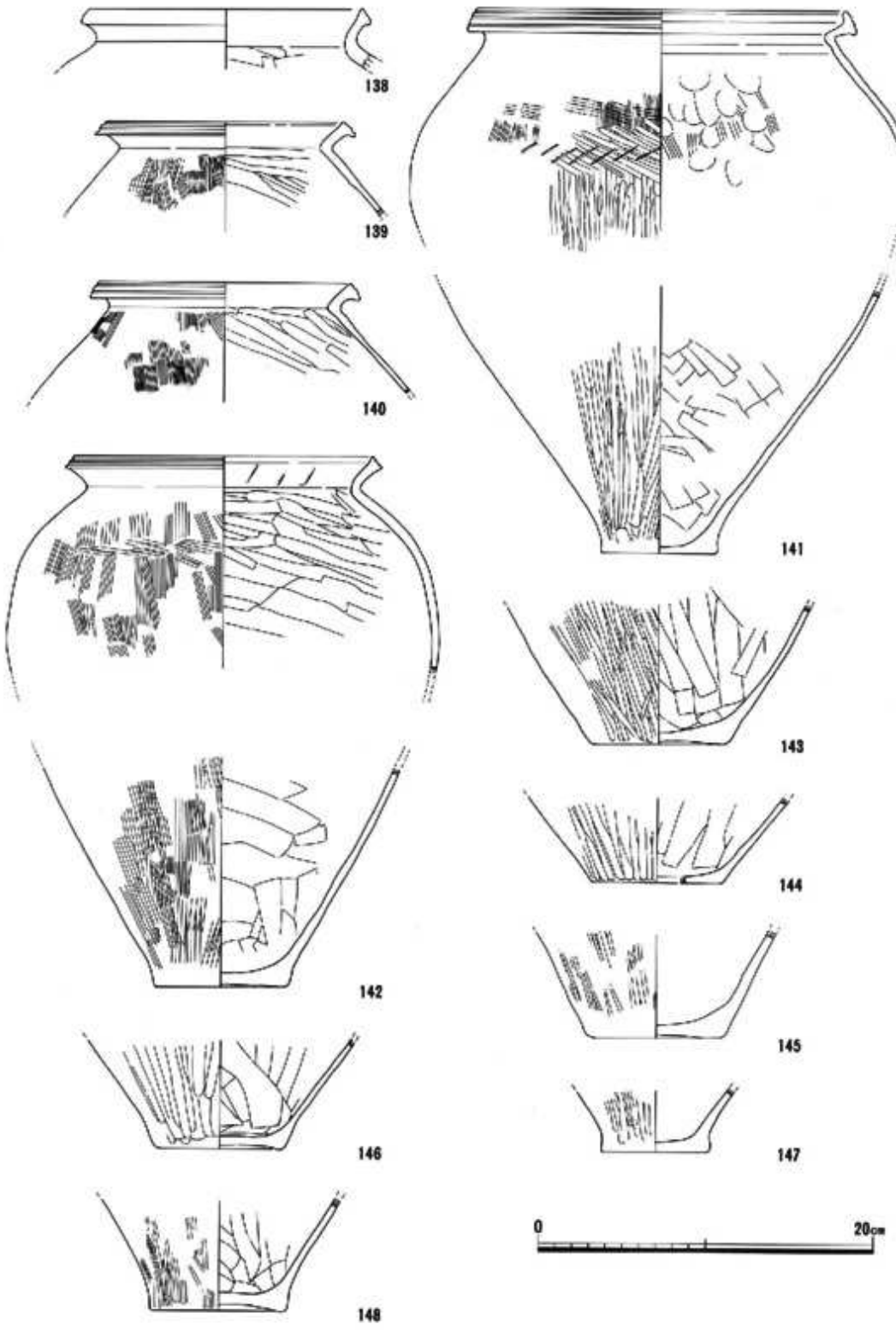


第38図　ＳＫ1010出土土器実測図

これと同じように頸部が著しく伸びる壺は前回の調査でも１例知られているが、胴部が算盤玉形をしており今回の球形のものとは形態が若干異なっている。水差し形土器（118）は、胴部からくの字形に屈曲した直線的に伸びる短い口縁部をもち、ハケ目調整の後、凹線がつけられている。口縁端部は断面方形につくられ中程はややくぼめられている。胴部は口頸部同様、ハケ目調整が施されているが部分的にヘラ磨きによって擦り消され、上半部にはハケによる圧痕がつけられている。無頸壺（119）も116同様二次加熱を受け残りが悪く、僅かに口縁部の凹線の存在が確認できるだけである。高杯は３点出土しているが、遺存状態が良好なのは一点だけである。120は杯部から稜をもって屈曲した口縁部の端部を外方に拡張した高杯Ａ類で、短い脚端部は上方へ拡張されている。杯の内外面と脚の外面は丁寧なヘラ磨き、

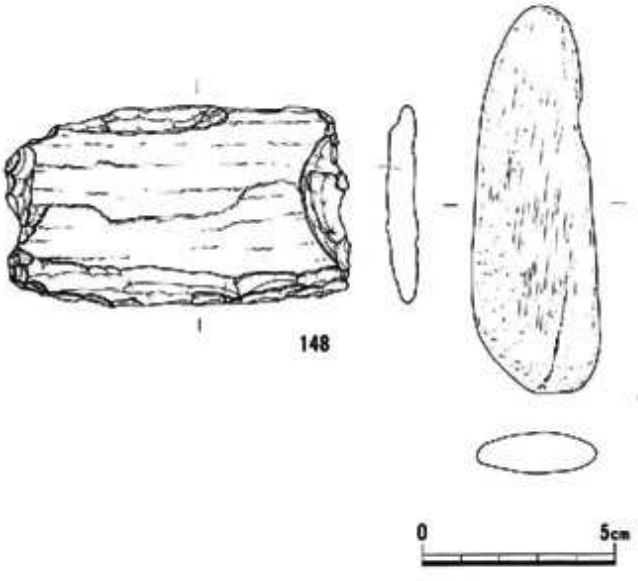


第39図　ＳＫ1010出土土器実測図



第40図　ＳＫ1010出土土器実測図

脚の内面はヘラ削りによって調整されている。121はC類に属すると思われるが二次加熱によっ表面の剝落が著しく杯部の形態も不正確である。脚端部は丸くおさめられ凹線が付けられている。122は杯から直立するように屈曲する口縁端部が平坦に作られ、屈曲部には稜を持たない。大小2点出土している鉢形土器は小型の口径が25cm、大型が52cmと大きさに著しい差が見られる。123の口縁端部は外方に向かって斜めにそぎ落とされるように尖り、口縁直下に凹線がつけられている。124は口縁部近くで軽く内方に屈曲し屈曲部には凹線が付けられ、口縁端部は内外に向かって拡張されて平坦に仕上げられている。2点とも内外面はヘラ磨きによって入念に調整が施されている。125はほぼ完形の注口付き脚台付鉢形土器で、算盤玉形に張る深い胴部にくの字形に屈曲する口縁部が付けられている。上下に拡張された口縁端部と肩部には、凹線がめぐらされ竹管文や棒状浮文がつけられている。脚柱部は短く脚部にかけて緩やかに開く。脚端部は上方に拡張され、凹線が3条巡らされている。器面調整は外面が口縁と脚端部に撫で調整が施され、頸部の一部にハケ目調整が加えられる以外は全面にヘラ磨きが施されている。また、胴部内面は板またはハケを用いたナデ調整、脚部内面はヘラ削りがそれぞれ加えられている。同様の注口付き脚台付き鉢形土器は、104に類似した壺が出土した徳島市南庄遺跡の19号土壙から1点出土している。一般的にこの種の土器が出土する場合、多量の土器が伴う場合が多いが今回も同じ状況を示している。甕（126～148）はA・B・C全てのタイプが出土しているが、中でも端部を上方に拡張した口縁を持つC類（129～137）は出土点数が最も多く、次いでA（126～128）、B（138～142）と続く。口縁端部には往々にして凹線が1～2条巡らされ、多いものでは141のように3条も付けられたものもある。器面調整は141を除いてほぼ同一の手法が用いられている。口縁部は外面が横ナデ、内面がハケなどを用いたナデまたは横ナデが施され、胴部外面はハケ目調整またはこれに不規則なヘラ磨きが施されている。また、内面は確認できるもの全てが頸部との界までヘラ削りが行われている。特に138・139のように口縁端部が上下に拡張されたものまで同一の手

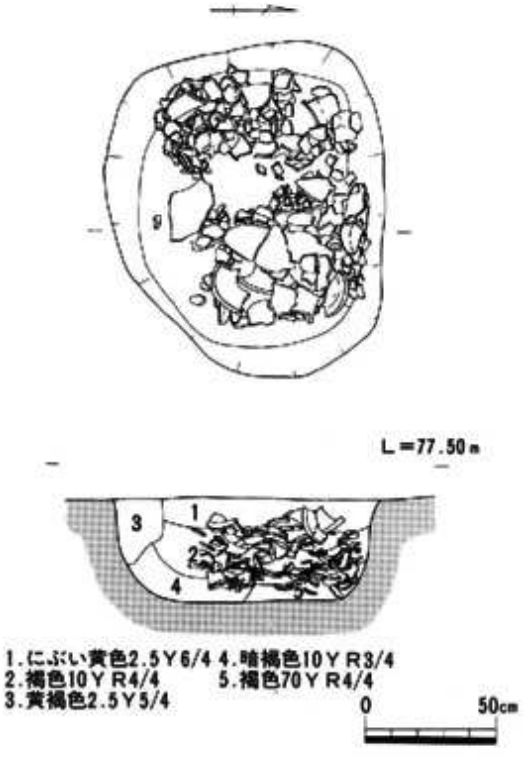


第41図　SK1010出土石器実測図

法がとられ、同じく口縁端部を上下に拡張する141とは調整方法が全く異なっている。141は他の甕と異なり内面上半には指押さえとハケ目調整が加えられ、ヘラ削りは下半部にしか認められないばかりでなく、外面の調整も上半部が叩き目とハケ目、下半部がヘラ磨きという方法が用いられている。これと同じ特徴を持つ甕は、この他にはＳＫ1002・1011から出土しているだけである。この他に石器としては両端に抉を持つ結晶片岩製の打製石包丁（148）と偏平な砂岩をそのまま用いた砥石（149）がそれぞれ１点ずつ出土している。

土壙（ＳＫ1011）（第42図）

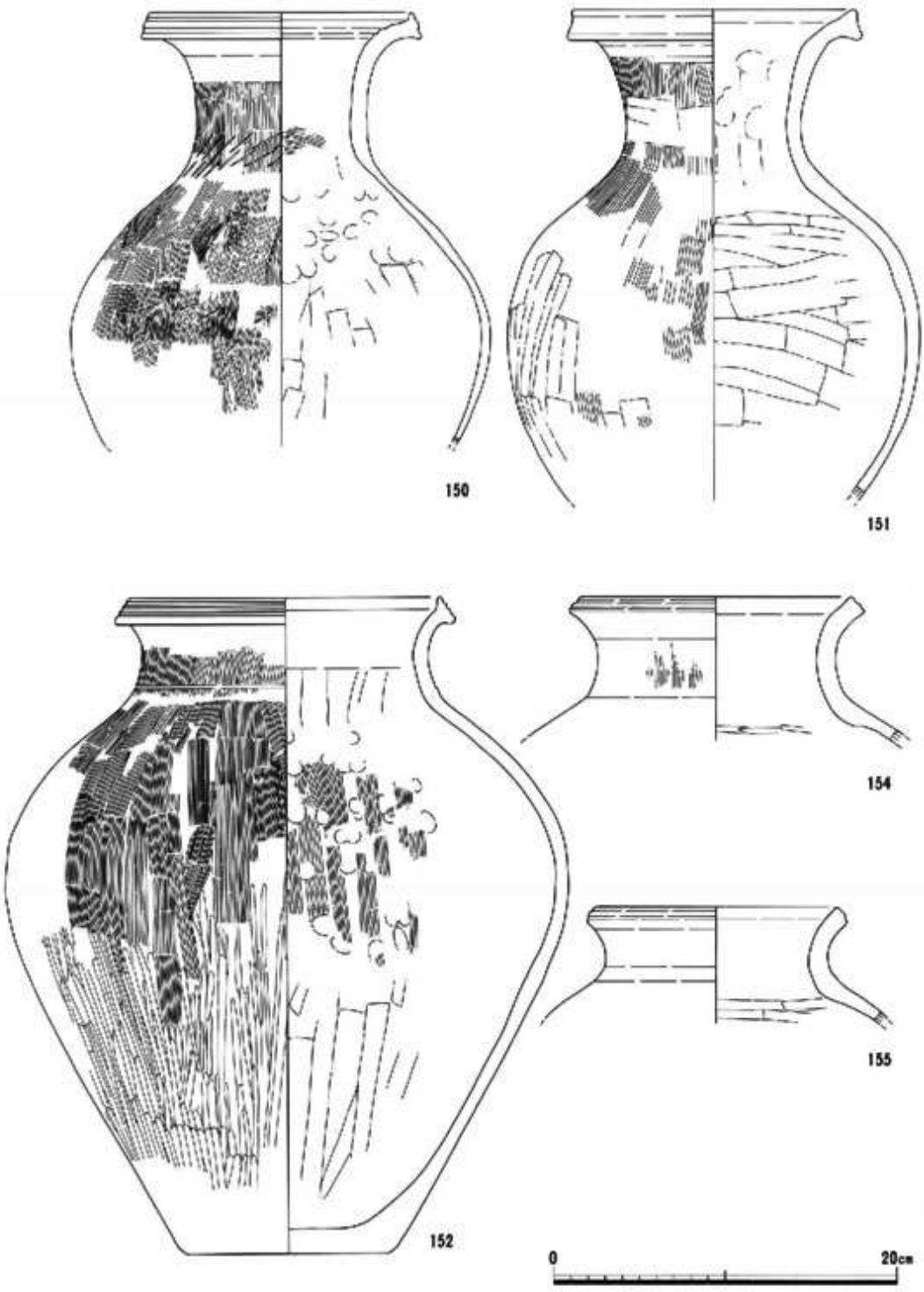
ＳＢ1001とＳＫ1010との間で検出された長さ1.2m・幅１m・深さ40cmの不整楕円形の平面プランを持つ比較的小型の土壙である。おおよそ５層に分けられた遺構内の埋積土中からはＳＫ1005と同じような状態で多量の土器が出土している。遺物が集中して出土する層は２層で、土壙の底面との間に間層を挟み、遺物の投棄が若干時間をおいて開始されたと考えられる。ここでも1010の遺物に認められたような二次加熱を受けた土器が出土しているが、1010とは異なり埋積土中からは多量の焼土が検出されている。ただ、焼土が出土した層が２層で、土壙の底面からかなり浮いた状態だったことや、焼土自体が塊の状態で遺物と混在して検出されていることなどから土器の廃棄の際、同じように投棄されたと考えるほうが妥当であろう。また、これらに混じってＳＫ1003で出土している炭化したエゴの実の種子が多量に出土している。



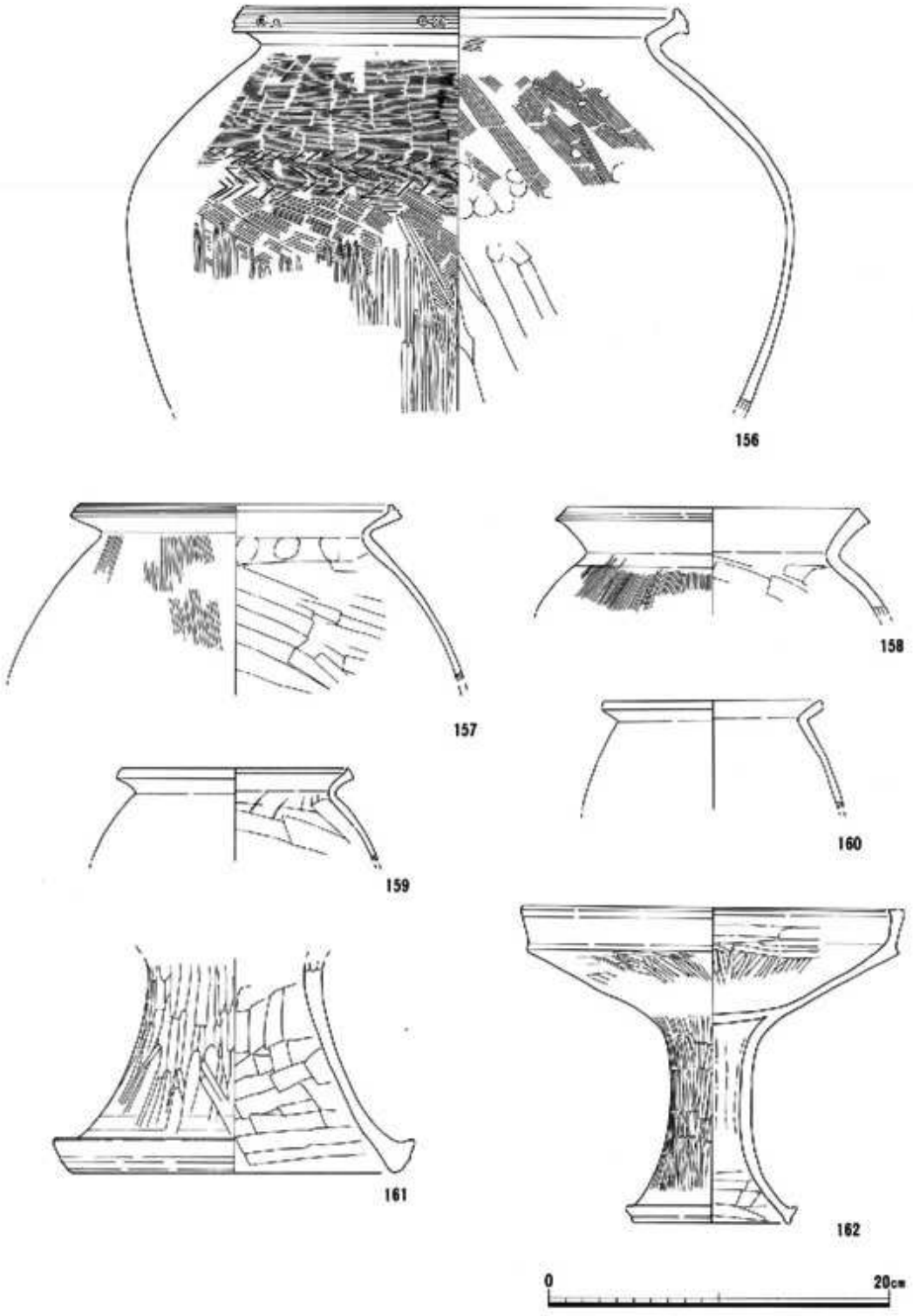
第42図　ＳＫ1011実測図

出土遺物（第43～45図）

150・151はＡ２ｂ類に属する壺である。150の口縁部から頸部の一部にかけては内外面とも強い横ナデが加えられ、頸部外面に僅かながら突出が認められる。口縁端部には２本の凹線が巡らされている。外面の調整は頸部から胴部上半にかけてはハケ目調整、胴部下半はヘラ磨きがそれぞれ加えられ、頸部と胴部にはヘラ圧痕文が付けられている。また内面の調整は胴部上半が指押さえ、下半はヘラ削りが施されている。

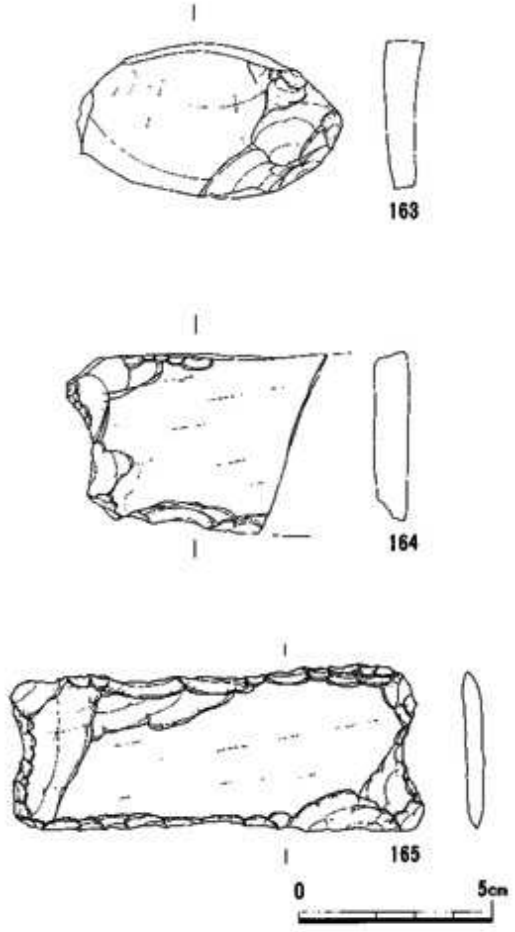


第43図　ＳＫ1011出土土器実測図



第44図　ＳＫ1011出土土器実測図

151は形態や大きさの他、内外面を強く横ナデして僅かな突出が作り出される口頸部など150と類似する点が多いが、器面調整に関しては外面の調整にヘラ磨きの代わりに板ナデを用いることや内面のヘラ削りの範囲がＳＫ1010出土の99と同じく頸部との境近くまで行われることなど異なる特徴を持っている。152はＡ１類に属する壺であるが、ＳＫ1006などの同種のものに比べて口径が小さく、頸部も短くなって小型化している。内外面の調整はそれぞれ頸部外面から胴部上半にかけてがハケ目、下半がヘラ磨き、内面は頸部と胴部の境付近が指頭によるナデ、胴部上半が指頭圧痕の後ハケ目調整、下半がヘラ削りとなっている。154・155はＡ４ａ類に属する壺であるが、２点とも遺存状態が悪く、外面の調整などは不明である。口縁端部も凹線または沈線が付けられていると考えられるが正確には解らない。内面の調整はどちらも粗いヘラ削りが頸部との境まで施されている。156～160の５点の甕のうち158・160はＡ類、156はＢ類、157・159はＣ類にそれぞれ分類される。中でも156は口径25㎝、胴部の最大径が40㎝もある大型の土器で、上下に拡張された口縁端部には３本の凹線とともに竹管文が付けられている。Ｂ類のなかでも口縁端部の上下への拡張の度合いの強いこの種の甕の場合、器面調整は、通常、胴部上半には叩きとハケ目調整が併用されているが、この土器の場合には一見平行叩きと見間違うような横方向のハケ目が加えられ、叩き目と同じ効果をあげている。また、大きく外側に張り出す肩部には斜め方向のハケ目とともにヘラ圧痕がめぐらされ胴部下半はヘラ磨きが施されている。157から160の甕は二次加熱のために器面調整の明かでないものがあるが、おおむね外面はハケ目、内面は頸部までのヘラ削りが施されていたものと考えられる。161は大型の脚台付き鉢形土器の脚部の破片と考えられる遺物で、太くてやや短い脚柱と上方に大きく拡張された脚端部からなり、脚端部には強い横ナデが加えられ、脚柱部外面は丁寧なヘラ磨き、内面はヘラ削りに

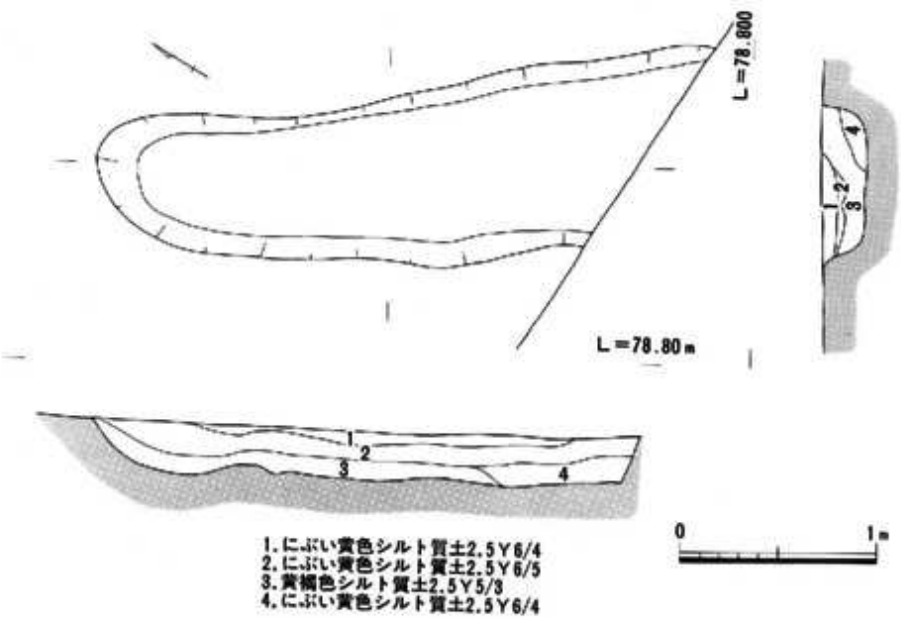


第45図　ＳＫ1011出土石器実測図

よって仕上げられている。162はほぼ完形の高杯で口縁部は杯部から稜をもってほぼ垂直に立ち上がり、端部は内側に拡張されて平坦面を形作っている。脚柱は比較的細長く作られ、張りの弱い脚端部へと続いている。脚端部は上方へ拡張され、凹線が1本巡らされている。石器は石包丁など3点出土している。163はサヌカイト製の削器で厚みのある剥片の一端を表裏に調整を加えて刃部を作り出している。164・165とも結晶片岩製の打製石包丁で表裏何れかに自然面を残し両端には抉が入れられている。

土壙（ＳＫ1012）（第46図）

遺構の一部が調査区外にのびているため全形は不明だが長さ2.8m以上・最大幅80cmの細長い溝状の形態をもった土壙と考えられる。深さ約30cmの遺構の覆土は炭化物や焼土の混入が著しく、一部には炭化物がブロック状に検出されたところもあった。また、側壁や底の一部には熱のために赤変した個所もあり、遺構内で火が燃やされたことは間違いないと考えられる。このように遺構内で火が燃やされたために覆土に炭化物や焼土が混入され遺構の一部に赤変する箇所が認められるものはこの他にもＳＸ1001や1002・1003がある。何れも弥生土器の小片が若干ではあるが出土していることから弥生時代の遺構であることは明かであるが、遺構の性格などは不明である。



第46図　ＳＫ1012実測図

(3) 考察

出土弥生土器の分類

本遺跡の弥生時代の出土土器については、既に1988年の北原遺跡の報告の中で林慎二氏による分類が行われているが、今回は先の成果を考慮しながら形態と調整の両面から新たに分類を試みることにした(1)。

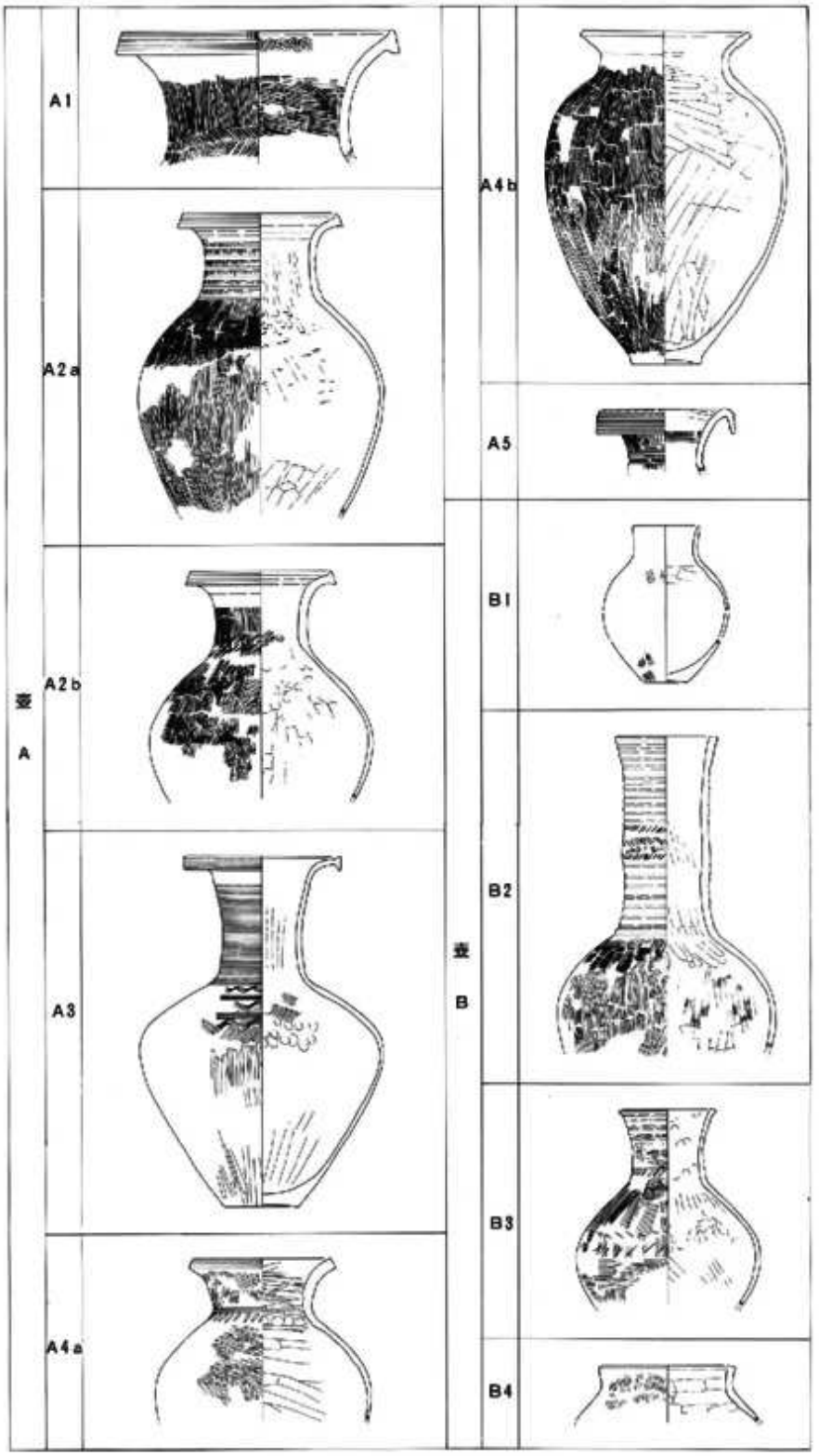
北原遺跡から出土した弥生土器は壺、甕、高杯、鉢、台付き鉢、水差形土器、コップ形土器などから構成されるが、主要な器種は壺と甕によって占められ、特に壺は形態と調整方法から多くの種類に細分が可能である。

壺形土器　今回の調査で出土点数が最も多く形態でも変化に富んでいる。

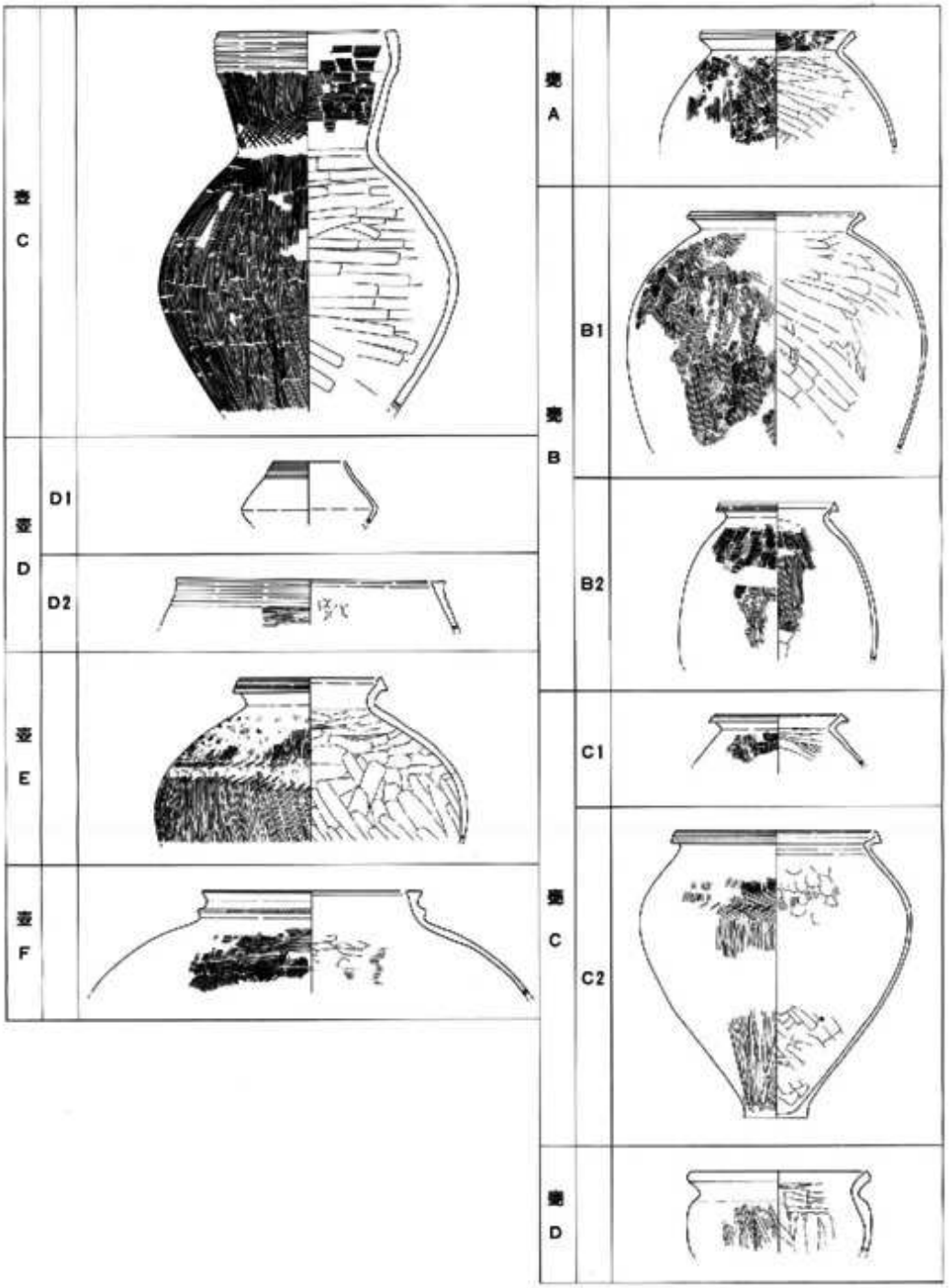
壺A　直立または緩やかに外反する筒状の頸部に、外上方に開く口縁部が付く広口壺とよばれる土器で、形態や器面の調整方法からさらに数種類に分類される。

A１　比較的短い頸部から外上方または水平方向に大きく開く口縁端部は上下に拡張されてやや広い端面を形成し、その上に凹線または沈線の棒状浮文や篦描刻線文が施されている。口唇部内面には櫛描波状文が描かれるものもある。頸部には粗いハケ目調整が施されたものが多く、その上に櫛や篦による圧痕文や凹線文が施される。内面の調整は、口頸部から胴部上半にかけてが指頭圧痕やハケ目による調整が、また、胴部下半にはヘラ削りが施されている。口径20㎝を越える大型のもの（A１a）と、20㎝に満たない中型（A１b）の２種類に分けられ、櫛描波状文はA１aに付けられている。

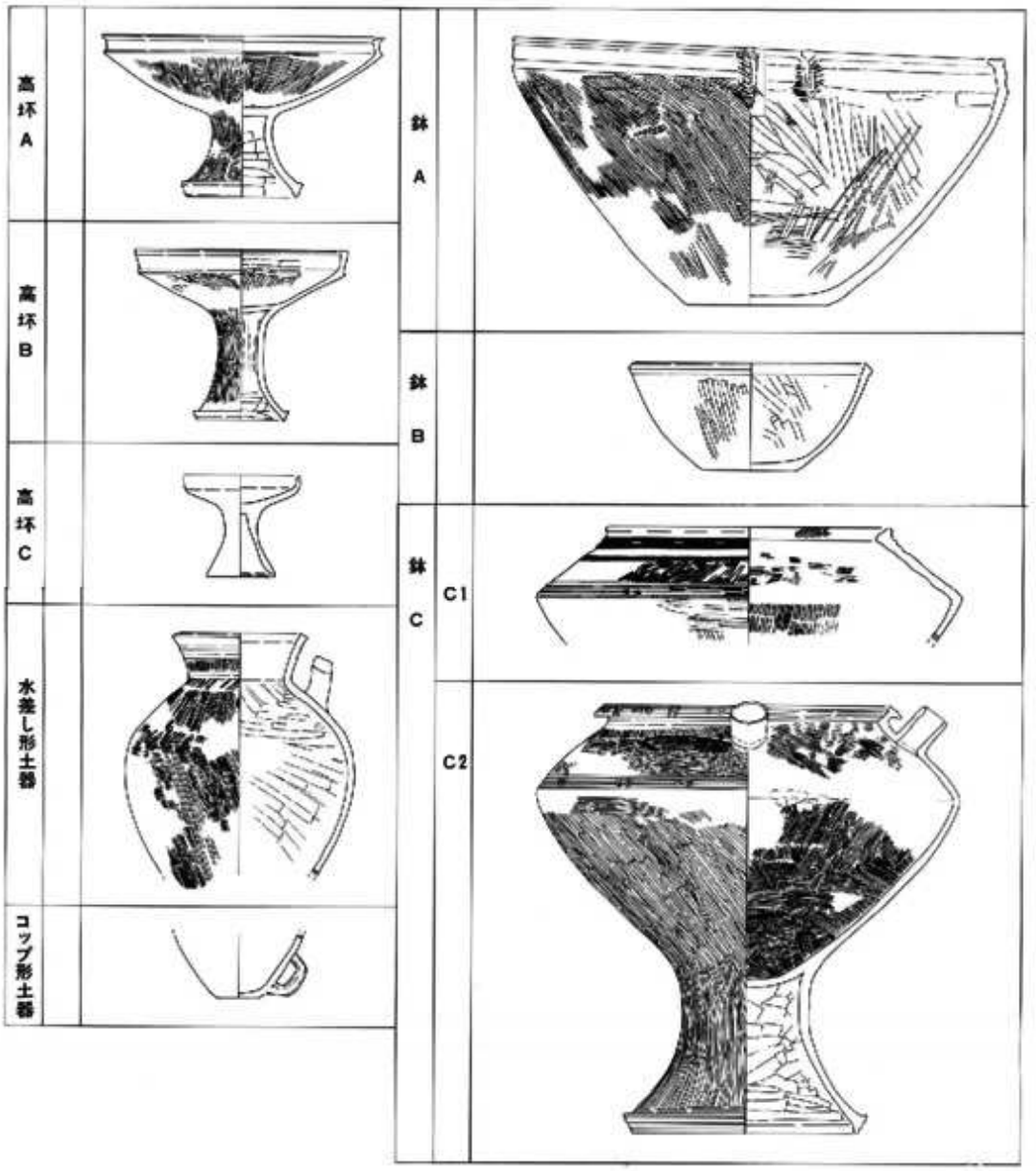
A２　A１同様、外上方または水平方向に開く筒状の頸部と、上下に拡張された端部の口縁を持つ口径20㎝に満たない中型の壺形土器で、頸部は一般的に長めである。上下に拡張された口縁端部や頸部にはA１同様、凹線や沈線・ヘラ描刻線文が付けられるが、櫛描波状文は皆無である。また、頸部下半や体部上半にはヘラまたはハケによる圧痕が巡らされている。これは器面の調整方法によってさらにａ・ｂに分けられる。ａ類の調整は口縁部付近は強い横ナデが加えられ外面に弱い突出が生じるものが多いが、頸部から胴部上半にかけては、縦または斜めのハケ目が、下半部には縦のヘラ磨きがそれぞれ施されている。胴部の最大径付近には、横方向のヘラ磨きまたは並行叩きが、胴部下半にはヘラ磨きがそれぞれ施される。内面は口縁端部付近が横ナデ、頸部から体部の境界付近が指頭によるナデ調整、体部上半が指頭とハケ目調整、下半はヘラ削りが施されている。ｂ類の場合、器表面の調整は口縁付近は強い横ナデが加えられた後、頸部から体部上半にかけてはハケ目、下半部はヘラ磨きがそれぞれ施されているが平行タタキはみられない。内面はａ類とほぼ同じ調整が加えられている。



第47図　北原～大法寺遺跡出土土器器種分類図



第48図　北原～大法寺遺跡出土土器器種分類図



第49図　北原～大法寺遺跡出土土器器種分類図

A３　器高のほぼ半ば付近に最大径をもつ大きく肩の張った胴部と、やや斜め上方に開く筒状の頸部から水平方向に大きく開く口縁部をもった土器である。上下に拡張された口縁端部と頸部には多数の沈線が、また、胴部上半には櫛描の波状文と平行線文が交互に加えられている。器内外面の調整はA２ａと同じ方法がとられている。

A４　比較的短い頸部から外上方または水平方向へ開く口縁部をもつ壺形土器で、口縁端部

の形状や加飾の有無によってさらに４ａと４ｂの二つに分けられる。４ａはＡ１・Ａ２とは異なり、口縁端部の拡張の度合いが弱く、上方へつまみ上げるかやや肥厚させるかして平坦な端面を形成し、そこに１～２本の沈線または凹線を施している。また、頸部には同様の沈線の他、先端の平らな角棒による刺突文が加えられている。器面の調整は外面が縦または斜め方向のやや粗雑なヘラ磨きまたはハケ目調整、内面が頸部以下は粗いヘラ削りが施されている。４ｂは、断面が方形に近い形状をもつ口縁部が頸部から斜め外上方に直線的にのびる形態をもった壺で、口縁部内外面を強く横ナデする以外なんら装飾が施されず、器面調整も外面はハケ目を中心とする調整が頸部から胴部全面に、内面は胴部全体をヘラ削りによって仕上げるという単純な方法がとられている。これらＡ４類の器面調整の方法は、外面の調整にハケ目・ヘラ磨き・平行叩きが用いられたり胴部内面のヘラ削りの範囲が大体胴部半ばで終わっているＡ１・Ａ２類とは大きく異なっている。

Ａ５　頸部からいったん斜め外上方に伸びた後、下方に大きく垂下する口縁端部がつく形態の壺である。口縁の折り返し部分には櫛による圧痕が加えられ、頸部には粗いハケ目が施された後、凹線が加えられる。口縁部から頸部にかけての破片が１点出土しているだけで、胴部以下は不明である。

壺Ｂ　筒状の口頸部がほぼ直立する一般に直口壺と呼ばれるものである。口頸部の形態からさらに細分される。

Ｂ１　頸部から筒状に伸びる口縁の端部は尖り、器外面はハケ目調整、内面は頸部付近までヘラ削りが施されている。口頸部は無文である。

Ｂ２　球形に近い胴部から筒状にのびる口頸部が器高のほぼ半分を占める形態の壺で、長大な口頸部は十数条の凹線文Ｂ種とヘラ圧痕文によって埋め尽くされている。器面調整は壺Ａ２と同様の方法が用いられている。

Ｂ３　筒状の口頸部はハケ目調整の後に凹線文が施され、ヘラ圧痕文が加えられるものもある。同様の圧痕文は胴部にも認められる。口縁の形態は外反して端部を内外に拡張したり平坦にしたものと、内湾気味で端部が丸くおさめられるものなど幾つかに分類できる。

Ｂ４　大きく肩の張った胴部に短い筒状の口頸部がつく。口縁端部は内側に僅かに拡張され平坦面を形作る。器面調整は外面は全てハケ目調整、内面はヘラ削りが頸部まで施されている。

壺Ｃ　二重口縁壺あるいは複合口縁壺と称される大型の壺で、今回の調査では１個体しか出土していない。本来は屈曲して直立する口縁の形態をとるが、本例はその屈曲の度合いが弱く、口縁部には複数の凹線が、また頸部には格子目文が巡らされている。器面調整は、外面では凹線が巡らされる口縁以外は全面にハケ目調整が、また、内面は口頸部がハケ目、胴部は粗いヘラ削りがそれぞれ施されている。

壺D　いわゆる無頸壺で、口径が30㎝の比較的大型のものと８㎝の小型のものがあるが、何れも口縁下に４条の凹線が認められる。形態の明らかなものでは胴部は算盤玉形に張る。

壺E　球形に近い形態をとると考えられる胴部に、短い頸部とくの字形に外反する口縁が付く。口縁端部は上下に拡張され、凹線が施されている。胴部内面の調整は上半部は指頭によるナデ調整または圧痕とハケ目調整が、下半部はヘラ削りがそれぞれ施されている。

壺F　球形に近い形態の胴部に上方に直立気味に立ち上がる短い口頸部が付く。口縁端部は内外に拡張されて平坦面を作り、頸部には刻み目をもった断面三角形の突帯がタガ状に巡らされている。器面調整は、口頸部が内外面とも横ナデ、胴部外面はハケとヘラ磨き、内面は指頭圧痕とハケまたは板ナデが施されている。また、肩部付近にはヘラによる圧痕が加えられている。

甕形土器

壺形土器とともに出土土器の中心を占めるが、その種類は少ない。口縁部の形態から４種類に分かれる。

甕A　口縁端部の断面が方形に近い形態を持つものである。

甕B　口縁端部が上方にのみ拡張されるもので、拡張の度合いで２つに分けられる。

B１　口縁端部の上方への拡張が弱く、断面が三角形に近い。口縁端部には凹線が付けられるものと無いものの両者が見られる。

B２　口縁端部の上方への拡張が著しいもので、拡張された端部には本数に差はあるが凹線が付けられている。胴部外面の調整は、全面をハケ目調整しただけのものや、ハケ目調整の後にヘラ磨きを疎に加えたものが多い。内面の調整はヘラ削りが頸部まで及ぶものと、甕C２と同じような調整が施されたと考えられるものに分けられるが、前者が圧倒的に多い。

甕C　口縁端部が上下に拡張されるもので、拡張の度合いと調整方法でさらに２つに分けられる。

C１　口縁端部の上下への拡張が弱いもので、胴部の調整は内面のヘラ削りが頸部近くまで施されるものが殆どを占める。出土点数は次のB２同様、僅かである。

C２　口縁端部は上下へ大きく拡張され、何条かの凹線文や円形浮文がつけられている。また胴部の最大径を有する箇所には往々にしてヘラまたは櫛による圧痕文が巡らされる。胴部の調整は、外面の上半が平行タタキの後、刷毛またはナデ調整が加えられ、下半部は底部付近までヘラ磨きがほどこされている。内面は上半部は指頭圧痕にハケ目またはナデを加え、下半部はヘラ削りが加えられている。出土点数は少ない。

甕D　くの字形に強く外反する口縁に比較的短い胴部がつく。口縁部から頸部にかけて横ナデがほどこされるが、頸部と胴部の境は特に強く撫でられ凹線状にくぼむ。胴部外面は全面

ヘラ磨き、内面は頸部までヘラ削りが施される。

高杯　杯部の形態から3種類に分類される。
高杯A　杯部より明瞭な稜をもってほぼ直立する口縁の端部が外方に拡張されたもので、脚端部は斜め外上方に拡張される。杯部と脚部の接合には円盤充填法が用いられる。
高杯B　A類同様、杯部から明瞭な稜をもって直立する口縁端部は内外方向に若干拡張され、平坦面を形成する。脚端部は斜め外上方に拡張されるものと拡張されず丸くおさめるものがある。杯部と脚部の接合は円盤充填法。
高杯C　杯部と口縁部との境は直立気味に立ち上がるもののB類のように明瞭な稜を持たないタイプで、脚端部は拡張されない。杯部と脚部は円盤充填法で接合される。

水差し形土器　卵形に近くやや肩の張る胴部に斜め外上方に直線的に開く口頸部がつく。口縁端部は平坦につくられ、頸部には凹線が、また胴部上半にはヘラ圧痕文が巡らされ肩部には把手が横に取り付けられている。器面調整は壺A2類と同様の方法が行われている。

コップ形土器　平らな底部から斜め外上方に直線的に伸びる把手がつけられているが口縁の形態や調整は遺存状態が悪く不明である。

鉢　形態と法量により3つに分けられる。
鉢A　口径50㎝前後の大型のもので、平底の底部からいったん斜め外上方に伸びた胴部は口縁部に近づくにしたがって内湾する。口縁端部は内外に拡張され、平坦面を作る。
鉢B　口径25㎝前後の小型のもので、口縁端部は外側にむかってさがり内面は強く横撫でが施され口縁に並行して凹線状にくぼむ
鉢C　算盤玉形に強く張る胴部を持つ大型の鉢で肩部には注口を持っている。口縁の形態から2種類に分類される。
C1　無頸で算盤玉形の胴部に続く口縁端部は斜め上方に拡張されている。
C2　算盤玉形の胴部にくの字状に外反して伸びる口頸部がつく。口縁端部は上下に拡張されている。

今回の調査で壺A1類としたものは、紫雲出山遺跡の報告中の広口壺A2類とされた資料の中でも(2)口径20㎝前後あるいはそれ以上の大型のものとされた土器にあたるもので、報告書の中では中期3から4にかけての時期に位置づけられている。この類の土器の頸部の文様は普通、何条かの凹線とヘラ圧痕文で構成されているが、SK1001の31は特殊で、頸部に確

認できるだけでも10条の太い凹線が巡らされている。この土器は岡山県雄町遺跡、鹿田遺跡、百間川遺跡など吉備地方でⅣ様式の中段階に位置付けられている高橋　護氏の編年のⅤ－b期からⅥ－a期の壺の口類に類似し、この地域からの搬入品の可能性も考えられる資料である。

壺A2類は、口径20cmに満たない中型の壺で出土点数が最も多いものである。この土器は紫雲出の報告中で広口壺A2類中の中・小型の土器の系譜を引くと考えられるものにA3類とされた頸部に凹線を多条に巡らすものを加えたもので、拡張された口縁部への強い横ナデや胴部外面の調整が上半部をハケ目、下半部をヘラ磨きによって仕上げる点などが共通する(3)。ただ、紫雲出遺跡のこのタイプの壺を飾る口縁端部の円形浮文・棒状浮文や口縁部内面の斜格文・斜線文、頸部の凸帯文などは皆無に等しく、逆に紫雲出で全く認められなかった並行叩きが殆どの土器に施されている。これら紫雲出遺跡で認められた文様はおおむねⅢ様式からⅣ様式の古い段階のものと考えられ、このA2類はそれよりも更に新しい段階のものであろう。このA2類は、前回の北原遺跡の調査で中期末あるいは後期とされた西地区の土壙1や土壙2、今回の調査のSK1010出土の壺の中心的な位置を占める土器で、讃岐では後期初頭の上天神遺跡や大空遺跡の中に類似する形態のものが認められる。

壺A3は出土点数が4個体と少ないうえに、SK1010出土の103以外は頸部または胴部の小片のため詳細は不明な点が多い。103は頸部が長く、肩部の張りも顕著で形態的にはA2とはかなり異なるが器面調整の方法はほぼ同じで、口縁端部と頸部には沈線化してはいるものの凹線が多条に巡らされ、胴部上半は櫛描きの直線文と波状文が交互に施される中期的な色彩の強い土器である。徳島市南庄遺跡19号土壙から類似する文様モチーフと調整のある壺が出土している。櫛描き波状文自体はA1類の口縁内面の文様として使用される例はあるものの壺の胴部に施文される例はA3類に限られる。

壺A4はこれまでの広口壺A1～3が何れも形態や文様などが中期Ⅲ・Ⅳの土器からその系譜を追うことが可能であったのに対して、それまでの土器の系譜とは異なる全く新しい流れのもとに成立した土器と考えられるもので、このことは口縁部の形態と器面調整に最も端的に現れている。これまでのA1～3の壺の多くが口縁端部を上下に拡張するものが普遍的に見られたのに対して、A4では上方のみに拡張するものや単に肥厚させただけのものが多く、明確に上下に拡張されるものは認められない(4)。また、器面調整の方法もA1～3が外面の場合は頸部から胴部上半にかけてがハケ目、下半部がヘラ磨き、内面の場合でも頸部が指頭によるナデ調整、胴部上半が指押さえ＋ハケ目、下半がヘラ削りと言うように全体をいくつかに分割してそれぞれ異なる調整を施すという中期的な要素を踏襲していたのに対して、A4では胴部内面全体がヘラ削りによって処理されていると言う点で、より新しい後期的な要素を持った土器といえる。また、主として頸部付近に認められる圧痕文も、それまでのヘ

ラまたはハケを用いたものとは異なり先端の平らな棒状の施文具で斜めに刺突するように施している。

A５の壺は口頸部のみの破片であるが、よく締まった頸部と大きく垂下した口縁端部はそれぞれ凹線が数条ずつ巡らされ、口縁の屈曲部内面には櫛による圧痕文が加えられている。このような形態の口縁端部を有し凹線文がつけられる壺は、主として畿内とその周辺地域に広く分布するが、この75の例のように口縁部と頸部の何れにも凹線が施されるものは摂津を例にあげると従来のⅢ様式末からⅣ様式の古い段階に成立するようで、この75も少なくともⅣ様式段階に畿内の何れかの地域からの搬入されたものであろう。このタイプの壺は前回の調査を含めてもこのＳＫ1006出土の１点だけである。

壺Ｂはいわゆる直口壺と称されるもので紫雲出の報告中では壺Ｃに分類されるものであるが、Ｂ１のように口頸部が全くの無文で胴部内面がヘラ削りによって調整されるものは報文中には見あたらないようである。Ｂ２類はＳＫ1010から１点だけ出土したもので、器高の半分近くの長さを持つ口頸部には中央部のヘラ圧痕文帯をはさんで凹線文Ｂ種が全面に施されている。同じＢ２類の壺は前回の調査でも東地区土壙４で１点出土している。一見後期の長頸壺と関連づけられるような土器であるが、器面調整には壺Ａ２類やＢ３類と同じ方法が用いられており、短頸の直口壺の口頸部分が長大化したものという前回の解釈が妥当だと考えられる。Ｂ３類は紫雲出報告書中のＣ２・３類に最も近いものであるが、Ｃ３のように口頸部に凹線を７～８条も加えたものはない。唯一器形のあきらかな38では器面調整はＡ２類の壺と共通の方法が用いられ、頸部や胴部には凹線文以外にヘラ圧痕文が加えられるがこのような圧痕文は他の同類の壺にも認められる。器面調整の方法はＢ２類と同じ手法がとられる。38と同様の形態の壺は讃岐の後期初頭の大空遺跡や上天神・末則１号墳北端ピットから出土しているが上天神や末則例では胴部内面のヘラ削りの位置が頸部との境付近まで及び、調整方法はＢ１類に類似している。Ｂ４類は特異な形態の直口壺で全形を伺えないため明確なことはいえないが、直口壺に含めるよりもむしろ無頸壺の変化したものと考えたほうが妥当なのかもしれない。ＳＫ1004から壺Ａ４類とともに２点出土しているだけであるが、類似するものは岡山県上東遺跡才の町Ｄ－Ｚから出土し、後期初頭に位置づけられている。

壺Ｃも紫雲出報告中で壺Ｂ３とされたもので畿内第Ⅳ様式の同種の壺と関連づけられ、一般には中期末で消滅すると考えられている器種である。今回の調査では出土点数はＳＫ1010から１点出土しているが、前回の調査でも西地区土壙15からⅣ様式段階と考えられる水平口縁の高杯とともに１点出土しているだけで、本県ではもともと出土点数の少ない器種である。

壺Ｄ・Ｅは紫雲出の報告でそれぞれＤ２・Ｅ２とされるもので、両者とも中期４の時期に比定されている。しかし、Ｅ２については紫雲出の資料中には頸部に断面三角形の凸帯や指頭圧痕文凸帯・刻目文凸帯を施す例があるが本遺跡の場合、そのような凸帯文の文様自体が

皆無に近い。

甕AはBに次いで出土点数が多いが、胴部内面のヘラ削りは観察できるものはすべて頸部付近まで施されている。Bは最も出土数が多く、本遺跡の甕の中心となるものである。器面調整は、口縁端部の拡張の度合いにかかわらず胴部外面はハケ目調整の上に不規則なヘラ磨きを加え、内面は頸部との境付近までヘラ削りを加えている。ただ、SK1001の35は紫雲出遺跡で壺Fとされる土器の可能性もある。また、SK1002出土の43はB類に属しながら胴部外面上半は叩き目とハケ目、下半はヘラ磨き、内面上半は指頭とハケ目、下半はヘラ削りというC2類と同じ器面調整の方法をとる唯一の例である。前回の調査でも完形品が一個体出土しているが、胎土や胴部上伴が著しく張る器形は今回SK1010から出土した甕C2に含まれる141に類似している。甕C類でもC1としたものは口縁端部の形態が異なる他は器面調整はA・Bの甕と変わらない特徴を有するものであるが、C2類に分類されるものは器面調整に叩き目の技法を採用するが、内面の調整は上半部が指頭とハケ目、下半部がヘラ削りと言うように中期的な調整方法が用いられている。前回の調査を含めて本遺跡出土の甕に叩きの技法が採用されたものはまれで、今回の資料では4例が確認されているだけである。叩き目の技法は隣接する讃岐では中期後半に出現し後期初頭まで残るとされている。特にSK1010出土の141は胎土中に砂粒と角セン石の結晶を多量に含み讃岐地方からの搬入品の可能性の高い土器である。

高杯A類は前回の報告で口縁端部を外方に拡張する　S字形」に近い形態が後期的様相として捉えられたものである。ただ、口縁部の立ち上がりはB類と同じくほぼ直立しているかやや内傾気味で、隣接する香川県の後期初頭に位置づけられている大空遺跡や上天神遺跡出土例のような口縁部を斜め外上方にのばし端部を内外に拡張する形態のものとは異なり、脚部との接合は円盤充塡方が用いられている。今回はSK1010から1点出土しただけである。B類のように杯部との境に明瞭な稜を作り出し、ほぼ直立する口縁部の形態をもつものは隣接する讃岐では良好な資料は見あたらないが、吉備地方では仁伍式あるいは鬼川内0とされる段階に一般化する形態のようである。

鉢Aは紫雲出山遺跡出土の大型鉢の系譜を引くもので、前回の調査でも出土例がある。讃岐では大空遺跡の後に位置づけられる一の谷遺跡群大形土坑から出土しており確実に後期まで下る器種である。

鉢Cとした注口付脚台付き鉢形土器は瀬戸内地方を中心に分布する特殊な形態の土器で、出土例も多くない。今回の調査では形態の異なるものが2例出土している。C1類とした無頸のものは、口縁から算盤玉形を呈する胴部上半にかけての破片で胴部下半から脚台部の詳しい形態は不明であるが、内傾が強い鉢の部分を凹線文や籠状文・扇状文・円形浮文などで飾り口縁端部が斜め上方に拡張される例は広島県塩町遺跡例など一般的に畿内第Ⅳ様式並行

段階の時期に多く出土している。一方、C2類の「く」の字形に外半する口頸部の端部を上方または上下に拡張するものは、前者より若干遅れて出現し後期初頭まで続くとされる形態のものである。このC2類と同じ形態のものは徳島市南庄遺跡の19号土壙からほぼ完全な形のものが出土している。この南庄出土のものは口縁端部の形態や、鉢の肩部に加えられる装飾がヘラ圧痕文であること、器面調整に若干差があることを除けば125の土器に極めて類似するものである。この南庄出土例については調査者は中期末の年代を与えているが、近年発表された注口付脚台付き鉢形土器の集成と編年では南庄の遺物に対して一括性に疑問を投じ同じ土壙内から出土した高杯の脚の形態などから後期に降るものとしている(5)。ただ、口縁部の形態が非常に類似する脚台付き鉢形土器が雄町5類のなかに存在している。

出土弥生土器の問題点

本遺跡出土の土器の特徴とその編年的位置づけについては、先述したように1988年の土成町北原遺跡の報告の中で調査者の一人である林信二氏がその特徴と年代について述べている。その中で、当時の県内の中期から後期初頭の土器の様相の不明瞭な状況を踏まえながら、壺・甕・高杯・鉢など出土した弥生土器のほぼ全ての器種に用いられている凹線文という特徴から、凹線文の盛行する中期後半の畿内第Ⅳ様式平行期の時期に最も近いとする一方、甕の調整に多用される内面のヘラ削りの位置に関する従来の考えから、圧倒的に多い内面上部までのヘラ削りという現象をもとに、より後期的な要素も同時に備えていることを述べ、中期最終末に位置づけている。この甕の内面ヘラ削りについては、東地区土壙3出土の甕を取り上げ、ヘラ削りが内面下半しか施されない中期的な特徴の個体と、頸部近くまで加えられる後期的な個体が共伴する事実を述べている。また、同じ土壙3から出土した高杯や鉢・壺からも中期と後期の土器相の双方を共有する状況を指摘するいっぽう、香川県紫雲出遺跡出土の遺物との比較から、壺の頸部に多用されるハケまたはヘラ状工具による列点文や同じ壺に施される器面調整の方法、胎土などから北原遺跡の土器相を讃岐との強い関連性が伺える資料としてその系譜にも触れている。その後、1992年、「土器から見た瀬戸内の弥生文化　瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性」と言うテーマで松山市で開かれた古代学協会のシンポジウムの中で、菅原康夫氏はこの北原遺跡の土壙3の土器に同じ遺跡の西地区土壙2の遺物を加えて後期Ⅰとし、後期最初頭の段階に位置づけて林氏の年代観とは若干異なる見解を示した。これは氏が弥生時代中期最終末の土器相を「凹線文の盛行と甕の内面ヘラ削り→凹線文の退化・無文化、甕内面上半までのヘラ削り」という流れで捉えた結果であると考えられる。しかし、これは前回の北原遺跡の出土土器の編年的位置づけに対して2人の見解に若干の差があるにも関わらず、少なくとも畿内第Ⅳ様式並行でも新しい段階以降のものであるという点では認識が一致していることを示している。事実、林氏が分析の際に比較の材料に用

いた畿内第Ⅳ様式並行期の紫雲出Ⅲの遺物と比較しても、凸帯文がほぼ皆無に等しく、櫛・竹管などによって描かれた斜線文・斜格文などの各種の加飾性に富んだ文様が少ないことはⅣ様式並行の中でも新しい段階に属するという印象が強く、2人が指摘するように中期最終末から後期初頭の時期という編年的位置づけは当を得たものであったと考えられる。この中期最終末から後期初頭にかけての時期の資料は、本県の弥生土器と密接な関係にあり、編年と資料の蓄積が進んでいる香川県でも比較的まとまったものとして公表されたものは大空・末則・上天神の各遺跡以外になく、不明な部分が多い。ただ、今回の調査資料中には、本遺跡の弥生土器が若干の年代的な幅を有するものであることが推測できうる遺物が出土していることから、ここでは2人の指摘を踏まえながら各遺構出土の弥生土器の組成と特徴から派生する問題について記述を進めてゆきたい。

今回の調査では、SK1005・1010・1011の遺構から多量の弥生土器が出土し、それ以外にもSK1001・1006でも比較的まとまって出土している。これらの遺構出土土器は、広口壺A類や直口壺B類の出土比率や特徴によって大きく2つのグループに分けられる。ひとつは、SK1006出土遺物を中心とする、壺が大型の広口壺A1によって占められるもので、同じグループに属するものとしては他に資料が少ないがSK1001があげられる。出土したA1類の壺はいずれも口径20㎝を越える大型のもので、口縁部から頸部にかけては凹線文の他に棒状浮文が施されるものもあり、比較的加飾に富んだ土器である。また調整に用いられるハケ目はかなり太いものが使用されていることも注目される。この他に、SK1001ではA2が、1006ではB3が出土している。この1006のB3と同じ口縁部の形態のものが紫雲出遺跡の壺Cの中にある。もうひとつはSK1010出土遺物を中心とするもので、1011もこれに属する(6)。これは広口壺A2類とA4類が壺の中心を占め、これにA1類やB1類その他の壺が若干加わっている。A1類はSK1006出土のものなどに比較して口径20㎝以下の小型のものが出現し、口頸部の文様も口縁端部の凹線や頸部のヘラ圧痕文以外は認められず、棒状浮文・櫛描波状文は見られない。この際に注目されるのはSK1005出土の遺物である。SK1005では壺A1が1個体、A4が3個体出土している。A1とA4の壺の共伴はSK1010・1011でも認められ、A4類の比率からいっても本来は後者のグループに含められる資料であるが、A1の壺の口縁部内面に櫛描波状文が施されていることや、共伴する直口壺BがA1・A2と同じ調整が施されるB3であることなど、SK1001・1006のグループにつながる要素も持っている。直口壺B類はSK1010・1011でB1が1点、これと同時期と考えられる前回の東地区土壙3からB1・B3が1点ずつ出土している。ただ、前回のB3類の壺の調整は胴部内面のヘラ削りがB1類と同じく頸部との境界付近まで施され今回の1005のB3類とは異なっている。この直口壺B3の調整方法に関係する資料として、1992年度に県文化課によって調査された阿波郡阿波町長峰遺跡で出土した土壙一括資料があげられる(7)。畿内第Ⅳ様式段階の

高杯Fを伴う出土遺物の中にはB3類が数個含まれているが、胴部内面のヘラ削りの位置には胴部下半のみのものと頸部付近までの両者が出土し、これ自体が明確な時期差をもつものでないことが明らかになっている。このようなことを考慮するとSK1005はよりSK1010に近いと考えることが妥当であろう。

以上の2つのグループのうち、SK1001・1006については口頸部に施された文様などが紫雲出遺跡の資料に近く、時期的に1010などに先行するものと考えて誤りはないと考えられる。特にA1類の壺・31や鉢・78は吉備地方での高橋護氏の編年のV－bからVI－a段階のものに類似し、紫雲出遺跡の紫雲出IIIに後続する時期のものであろう。SK1010・1011については前回の土壙出土の遺物と共通するものが多く、ほぼ同時期のものと考えられるが、その編年的位置づけには前回の報告のように中期最終末のものとし後期に降る可能性があるとする考えと、後期初頭に位置づける二通りの見解があることは先述した通りである。前回の報告では中期的な要素として、壺に施される凹線文や櫛あるいはヘラによる圧痕文などの文様や、甕の一部に見られる胴部内面の過半部のみのヘラ削りを、また、後期的要素としては、壺や甕の一部に見られる胴部内面上半のヘラ削りや甕の胴部外面のハケとヘラ磨きによる調整、高杯A類の口縁端部の外方への拡張をあげているが、これらは今回のSK1010・1011出土の土器にも全て共通するものである。このうち、中期的とされた凹線文や櫛・ヘラなどの圧痕文は香川県の後期初頭の大空遺跡出土遺物や上天神SK19出土土器、末則古墳北端ピット出土の土器に認められ、甕の胴部内面下半のヘラ削りも末則古墳出土の甕を見る限り後期初頭まで残り、いずれも中期の決め手にはならないと考えられる。一方、一部の壺や殆どの甕に認められる後期的とされる胴部内面上半へのヘラ削りも先行する1001・1006でも一般的でこれも中期的とされる要素同様、後期の決め手になるものではない。また、高杯Aは口縁端部の外方への拡張を見れば後期的と言えないこともないが、大空遺跡や上天神、末則例のように杯の屈曲部のすぐ上から斜め外方に拡張される形態とは異なり、杯部と脚部の接合にも中期に一般的な円盤充填法が用いられている。ただ高杯については、先行する1006段階でも言えることであるが吉備地方のIV様式中葉以後のものと比較すると脚部には凹線文以外の装飾が全く見られないことや、脚端部を拡張しないものが少なからず認められることなどから、この時期には壺A2類とともに独自の形態のものが存在した可能性が強く、円盤充填法が存在するからといって中期と言い切ることも出来ないのが実状である。この他に、SK1010段階で今回新たに出土した遺物として、鉢C2類に分類した注口付き脚台付鉢形土器や壺A3・C・D1がある。本遺跡の注口付き脚台付鉢形土器に類似する例は、本県では徳島市南庄遺跡19号土壙例がある。この南庄遺跡の資料については先述したようにそれぞれ中期末と後期初頭に位置づける2通りの見解があるが、口縁部の形態は他の後期の例よりも中期の雄町5類のものに類似している。事実、この土器が出土した南庄遺跡19号土壙の他の遺物をみて

も、透かしの入った高杯の脚意外は櫛描波状文や凹線文B種の施された壺に代表されるように一般に中期に属すると考えられているものによって占められている。壺A3類も同じ南庄の19号土壙から出土しているが、南庄例の壺の頸部の文様が凹線文であるのに対して本例は沈線が施され、やや新しい様相を示している。また、壺CやD1も一般的には中期で終わるとされる形態の土器であるが、C類の場合には内面のヘラ削りの範囲が頸部との境まで及んでいる。このように前回、中期末あるいは後期初頭とされた資料と同時期と考えられるSK1010・1011出土の個々の資料を検討すると、前回以上に中期的要素と後期的要素が混在し、その編年的位置づけを困難なものにしている。ただ、壺A4類についてはSK1004から後期初頭の上東遺跡才の町D－Z出土の壺に類似する壺B4類とともに出土していることから、上限はともかくその下限が後期に下がる可能性が強いと考えられる。このA4類に特徴的な胴部内面のヘラ削りについては、先述した阿波町長峰遺跡の畿内第Ⅳ様式段階並行の土壙一括資料のなかのB3類の壺に胴部内面のヘラ削りが頸部との境付近まで施される例が存在することから、中期段階で壺の一部にもA4同様の胴部内面の広範囲なヘラ削りが採用されていることは間違いないと考えられ、今後の壺A4類の系譜を考えるうえで注目される。

本遺跡出土の土器は、前回の調査で中期末あるいは後期初頭と大きく一時期のものとしてとらえてきたものを、今回新たに加わった資料をもとにSK1006に代表される確実に中期に位置づけられるグループと、それに後続するSK1010のグループに分類し、前者に関してはある程度編年的位置づけを行うことができた。しかし、後者については前回、中期的あるいは後期的とされた特徴を具体的に検証する過程で従来の時期区分の概念を適用できない資料であることを再認識させられる結果となった。これを確実なものにしてゆくにはすでに編年の確立された他地域の遺物の遺構内での共伴例を調査によって検証してゆくことが今後とも必要であろう。また、この2つのグループの差はSK1005出土の一群の土器が示すように、両者に共通するものが多く、その変化が非常に漸移的であったと考えられるが、一括遺物を中心とした土器の分析によっては今後これらの土器の詳細な流れを把握することも十分可能であろうと思われる。

4　まとめ

本遺跡出土の弥生土器は、前回の調査以来、その編年的位置づけには異なる見解がとられてきたが、今回はそれを確実に中期に属するものとそれ以後の2時期に区分した。ただ、その内容をみると両時期の土器とも相互に類似する特徴をもち、個々の遺物だけでは所属時期を決定することができないものが多い。また、壺や高杯には壺A2類やA4類、高杯A類など、形態や調整方法に独自のものを持ったものが少なくない。出土点数の多い壺A2類の胴部外面は胴部最大径付近とその上下ではハケやヘラ磨きなど種類や方向が異なる調整が胴部を3分割するように施されている。このような胴部外面の調整はそれ以前のⅢ様式並行段階の中小型壺でも認められ、A2類がこれらの系譜の上にあることを示しているが、A2類では新たな要素としてこれに叩き目を加えた例が多く出土している。これは恐らく畿内周辺から叩き目の技法が導入された時点でこれらの壺の調整に新たに採用されたと考えられるが、同時期の甕に叩き目の調整が施される例が極端に少ないのとは対象的である。壺A4については、先述したようにA2類とは異なり、それまでの壺のなかからはその系譜がたどれない土器である。すべての個体に認められる胴部内面のヘラ削りの位置や、外面全面に施されるヘラ磨きの調整の粗雑さなど後期的な色彩の強い土器で、事実、SK1004出土例から下限はほぼ後期まで降ると考えられるが、上限に関してはその系譜同様、明かではない。この土器の系譜と時期の上限が明かにされたなら、SK1010をはじめとする遺物群の所属時期もある程度決定されるものと考えられる資料である。高杯に関しては、A類の杯の形態に独自のものが認められる一方、脚部についてはA・B・C類を問わず凹線以外の分様が全く施されていない。北岸下流域の光勝院寺内遺跡では、紫雲出Ⅲ式並行に位置づけられている一群の土器の高杯の脚部には少量ではあるがヘラ描沈線文や透かしが施された例が存在することから考えて、それ以降に急速に無文化が進んだものと考えられる。

以上のように本遺跡の土器はいずれも中期後葉から後期にかけての時期に属すると考えられるが隣接する地域と比較すると独自色をもったものが少なくなく、系譜をたどれないものが少なからず存在する。しかも、その前後の時期の遺物に関してもいまだに公表されたものは少なく、地域も限定されているのが実状である。したがって本遺跡の土器も今後の新たな資料の増加によって時期や系譜・地域色に対する認識を大きく変更せざるをえない場合も充分考えられる。今後の研究の進展に期待したい。

註

1　前回の調査の際の土器の分類と今回の関係は以下の通りである。

壺　A1　類：前回のAb1類の一部

A2　類：前回のAb1類の一部

A3　類：前回の出土例なし

A4a類：前回のAb1類とAd類の一部を合わせたもの

A4b類：前回のAa1類に該当

A5　類：前回の出土例なし

B1　類：前回の分類と同じ

B2　類：前回の分類と同じ

B3　類：前回の分類と同じ

B4　類：前回の出土例なし

C　類：前回のAc類

D　類：前回の出土例なし

E　類：前回のAa1類

F　類：前回出土例なし

甕　A　類：前回のA1・A2類

B1　類：前回のB1・B2類の一部

B2　類：前回の分類のB1類に含まれていたものの一部

C1　類：前回のC1・C2類の一部

C2　類：C1類の一部

D　類：前回のD類

高杯A　類：前回のAa類

B　類：前回のC・D類

C　類：前回出土例なし？

鉢　A　類：前回のA類

B　類：前回出土例なし

C1　類：前回の壺Dにあたる可能性、注口の有無は不明

C2　類：前回出土例なし

2　紫雲出遺跡の報告の中でA2類土器を、口径10cm前後あるいはそれ以内の小型品と、口径20cm前後あるいはそれ以上の大型のもの、口径が両者の中間にあるものにわけ、小型のものと大型のものについては、大きさ以外の点でも多くの差異をもち、口径が中間のものは両者の中間の性質をそなえているとしている。

3　SK1011出土の壺151はA2bに含めたが、口縁端部の形態が畿内で広口短頸壺とされる土器

に類似する。

4　壺Ａ４ａとした土器の中でもＳＫ1005の58と1010の107～1012などとは口頸部の形態が異なるため本来、分離すべきものかもしれない。

5　妹尾周三「注口付きの脚台付鉢形土器について」古代吉備第14集　1992の論文を参照

6　ＳＫ1010からは1990年の古代学協会四国支部第四回大会の際に菅原氏によって中期末ａとされた南庄遺跡19号土壙出土の遺物の一部に類似するものが後期初頭とされた北原遺跡土壙３あるいは土壙２の遺物と共伴して出土している。

7　県教育委員会文化課の御好意で実見させていただきました。記して感謝いたします。

参考文献

鎌木義昌　六車恵一　「香川県高松市高松町大空遺跡の土器」『弥生式土器集成資料編』日本考古学協会 1961

小林行雄　佐原真他　『紫雲出』詫間町教育委員会　1964年

正岡睦夫ほか　「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会　1972

柳瀬昭彦ほか　「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会　1977

渡部明夫　「末則古墳調査概報」『香川県埋蔵文化財調査報告』香川県教育委員会　1977

高橋護　「弥生土器－山陽－」『考古学ジャーナル』ニューサイエンス社　1980

菅原康夫　高橋正則　『光勝院寺内遺跡』徳島県教育委員会　1984

徳島市教育委員会　「南庄遺跡発掘調査現地説明会資料」　1985

真鍋昌宏　横田周子　『矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会　1987

林慎二　谷匡人　「土成町北原遺跡』徳島県教育委員会　1988

大久保徹也　「上天神遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』香川県教育委員会　1988

西岡達哉他　「一の谷遺跡群」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第７冊　香川県教育委員会　1990

地学団体研究会吉野川グループ「土成町の地形・地質と古生物」『総合学術調査報告　土成』土成町・阿波学会・徳島県立図書館　1990

福家清司編　『土成前田遺跡』徳島県教育委員会　1990

『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性　古代学協会四国支部第四回大会資料』古代学協会四国支部　1990

「下川津遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』香川県教育委員会　1990

妹尾周三　「注口付きの脚台付鉢形土器について」『古代吉備』第14集　古代吉備研究会　1992

正岡睦夫　松木岩雄編　『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社　1992

第1表　北原～大法寺遺跡遺構一覧表　(1)

遺構名	出土地点	規模（cm）			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
SB1001	B・C－29・30・31	572	558	20	弥生土器片、石鏃等	
SB1002	D・E　30	315	292	53	弥生土器片、磨製石斧、石鏃等	
SK1001	C－10・11	162	91	60	弥生土器片 打製石包丁等	
SK1002	C・D－12・13	366	313	17	弥生土器片 砥石、打製石包丁等	
SK1003	B－13・14	166	113	15	弥生土器	
SK1004	E－9・10	133	95	30	弥生土器片 石鏃、打製石包丁	
SK1005	G　14	198	54	24	弥生土器片	
SK1006	E－14	314	142	21	弥生土器片 砥石、打製石包丁	
SK1007	B・C－24・25	352	258	23	弥生土器片、石鏃、打製石包丁、鉄鏃等	
SK1008	D・E－29	232	110	44	石鏃	
SK1010	E－39	198	153	62	弥生土器片 打製石包丁、砥石	
SK1011	C・D－34・35	131	108	41	弥生土器 打製石包丁等	
SK1012	A・B－19	270	80	30	弥生土器片	
SP1001	D－39	32	28	17	無	
SP1002	D　38・39	34	29	39	弥生土器片	
SP1003	E－38	30	24	14	無	
SP1004	D－36	32	31	24	無	
SP1005	D－35	21	18	12	無	
SP1006	D－35	29	26	17	弥生土器片	
SP1008	D－35	24	23	21	弥生土器片	
SP1009	D－34・35	40	39	41	弥生土器	
SP1010	D－34	48	47	26	弥生土器片	
SP1011	D　34	47	41	23	弥生土器片	
SP1012	D－34	65	50	24	弥生土器片	
SP1013	D－34	56	50	18	弥生土器片	
SP1014	C　34	88	46	18	無	
SP1015	D－33	26	24	22	無	
SP1016	D－33	26	26	26	無	

北原～大法寺遺跡遺構一覧表 (2)

遺構名	出土地点	規模（cm）			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
SP1019	C－32	26	22	9	無	
SP1020	C－32	36	32	23	無	
SP1022	E－30	21	16	10	無	
SP1023	D－29	30	20	14	無	
SP1025	D－28・29	26	25	14	無	
SP1026	D－28	31	24	18	無	
SP1027	D－28	26	20	16	無	
SP1028	A・B－26	48	44	31	無	
SP1029	A・B－26	41	39	26	弥生土器片	
SP1030	A・B－26	59	54	45	弥生土器片	
SP1031	A・B－26	49	45	29	無	
SP1032	D－24	41	37	28	無	
SP1033	D－24	25	22	21	無	
SX1001	F－14	80	60	12	無	焼土がつまる。
SX1002	B－16	46	35	18	無	
SX1003	B－16・17	44	29	35	無	
SX1004	G－17	75	28	23	無	木炭、焼土を多く含む。

第２表　北原～大法寺遺跡出土遺物観察表　北原～大法寺　ＳＢ1001

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
1	壺E	口径17 胴部最大径37	胴の張った球形に近い胴部からなめ外上方にくの字に外反する短かい口縁がつく。口縁端部は上下に拡張され、凹線が２条めぐらされている。 胴部の最大径付近にはヘラ先による斜文がめぐらされている。	口縁部の内外面は横ナデ。 胴部外面の上半はハケ目調整、下半はヘラ磨きが加えられる。 内面は上半部が指頭圧痕の後、板またはハケによるナデ調整、下半部にはヘラ削りが施こされる。	黄褐色十	砂粒などをあまり含んでいない。	
2	壺Ａ４ａ	口径15	胴部からなめ外上方にのびたやや短かい口縁端部は上方にのみ拡張される。頸部と胴部との境には先端の平らな板状工具による刺突文がめぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部外面はハケ目調整、内面は粗いヘラ削り。	灰黄褐色		
3	壺Ｂ２	口径15.8	大きく肩のはる胴部からくの字形に短かく屈曲する口縁端部は上方にのみ拡張され、凹線が巡らされている。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部外面はハケ目、内面は指頭圧痕が残る。	にぶい褐色		

ＳＢ1002

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
5	壺Ａ１ａ	口径（22）	外反する短かい口縁の端部は断面方形につくられている。	口縁内外面は横ナデ調整、頸部以下はヘラ削りが施こされる。	明黄褐色土	砂粒を多く含む。	
6	壺Ａ４ａ	口径（17）	口縁端部はやや上方に拡張され凹線が巡らされている。	口縁、内外面は横ナデ調整、胴部外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りが施こされる。	にぶい黄橙色	砂粒を多く含む。	
7	壺Ａ	口径(16.5)	口縁端部は断面方形に作られる。	口縁部は内外面とも横ナデ調整。 胴部外面はヘラ磨き。 内面は頸部との境までヘラ削り。	にぶい黄橙色	砂と小礫を多く含む。	
8	壺Ａ	口径（18）	口縁端部は上方に拡張され凹線が施こされる。	口縁部は内外面とも横ナデ調整。 頸部外面はハケ目調整、内面はヘラ削りが施こされる。	橙色	胎土中に砂粒を多量に混入。	
9	壺Ｂ１	口径（15）	口縁端部は上方に拡張される。	口縁部内面はハケ、または板によるナデ調整、外面は横ナデ。 胴部内面は頸部との境付近までヘラ削り。	にぶい黄橙色	砂粒を多量に含む。	
10	壺Ｂ	口径（21）	口縁端部は上方に拡張され凹線が施こされる。	口縁部内外面は横ナデ調整。	浅黄橙色	砂粒を多く含む。	
11	壺Ａ	口径（21）	断面方形につくられる口縁端部は肥厚し凹線が２条巡らされている。	口縁部内外面はともに横ナデ調整。 胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削り。			
12	ミニチュア土器	口径（９） 底径（４）	楕円形にひらく口縁部を持つ壺のミニチュア土器。	全面に指頭圧痕を残している。	灰黄色	焼て粒を若干含んでいる。	
13		底径（５）	上げ底の底部。	胴部外面はヘラ削りの後粗いヘラ削り、胴部内面はヘラ削り。	黒褐色	多量の砂を含む。	
14		底径（6.6）	若干上げ底気味の底部。	外面はヘラ磨き、内面はおそらくヘラ削り。 上げ底の底部は、ヘラ削の後にナデ調整が加えられる		砂と小礫を多量に混入。	
15		底径（７）	底部は著じるしい上げ底。	内面は粗いヘラ削りが施こされる。 外面はハケ目調整とヘラミガキ。 上げ底の底部はヘラ削りによってととのえられナデ調整が加えられる	明黄褐色	多量の砂粒を混入。	
16		底径（8.5）	やや上げ底気味の底部。	外面にヘラ磨きが若干観察される。	浅赤橙色	砂礫を多量に混入。	
17	甕	底径（8.5）	脚台付きの甕の底部。	底部内面はヘラ削りの後ナデ調整が加えられる。底部外面は指頭による圧痕の後ナデ。	にぶい黄橙色	砂粒を多く含む。	

S K 1001

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
31	壺A1	口径（31）	口縁端部は上下に拡張され凹線が施され縄状浮文が付加される。 頸部はゆるやかに外反し凹線文3帯が多段に施されている。	外面はナデ調整 口縁部内面はナデ調整 頸部内面は指オサエの後にナデ調整。	赤褐色	砂粒を含みやや粗い。	
32	壺A2a	口径(15.5)	ななめ外上方にひらく口縁端部は上下に拡張され凹線文が2条施らされる。 頸部は筒状。 胴部はゆるやかに外反。	口縁部付近は内外面ともに強い横ナデが施こされる 頸部外面はハケ目調整。内面はナデ調整	明黄褐色	砂粒などをあまり含まない。	
33	壺A2a		頸部はゆるやかに外反。ヘラ圧痕が施こされる。 胴部上半に最大径をもつ。	頸部外面はハケ目調整、口縁部との境は強い横ナデが施こされる。 内面は指頭によるナデ調整が施こされる。 胴部外面はハケ目と平行タタキが併用される。 内面は指頭による圧痕が施こされる。	明赤褐色	砂粒をほとんど含まない。	
34	壺A1	底径(14.5)	底部の破片。胴部は緩やかな底部から明確な稜をもってななめ外上方にのびる。	外面はハケ目調整の後にヘラ磨き、内面は粗いヘラ削り。	赤褐色	砂粒を多量に含む。	31の壺の底部
35	壺B	口径 17	頸部でいったん外方に向かって強く屈曲した後内傾にむかってふたたび強く内湾し胴部を形成する。口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部内外面とも横ナデが施こされている。	明赤褐色	砂粒を多量に混入する。	
36	壺A	口径 16.5	胴部から外方にむかって直線的に屈曲する口縁端部はやや尖り気味に仕上げられる。	口縁の内外面と胴部の一部は横ナデ調整、胴部内面頸部との境までヘラ削り。	にぶい橙色	砂粒をあまり混入しない。	
37	甕A	口径 15	胴部から直線的に短かく立ち上がる口縁端部は断面方形に作られ、凹線が施こされる。	口縁部外面は横ナデ、内面はハケ目調整が施こされる。 胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削りが認められる。	黒褐色	雲母を少量混入する以外、砂粒の混入などは少ない。	
38	甕C2	口径 31	胴部から外上方にむかって短かく立ち上がる口縁端部は下下に拡張され凹線が3条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ調整、胴部内面は指オサエの後ハケ目調整が施こされる。	にぶい褐色	砂粒を多量に混入する。	
39	鉢		ゆるやかになな外上方にむかってのびる口縁端部は内外に拡張され頂部には凹帯が形成される。 口縁部直下には凹線が4条めぐらされている。	口縁部は内外面ともていねいな横ナデ。	橙色	砂粒を多量に混入する。	

S K 1002

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
41	壺A2a	口径（15）	口縁端部は上下に拡張され凹線が2本施らされている。	口縁部から頸部上半にかけて強い横ナデが加えられ内面には段がつく。 頸部外面はハケ目調整。	赤褐色	砂粒をあまり含まない。	
42	甕B2	口径（15）	口縁端部は、上方にのみ拡張され浅い凹線が2本施らされている。	口縁部は内外面とも横ナデ。 胴部外面は縦のハケ目調整、内面は指頭圧痕の後ナデ調整。	にぶい褐色	砂粒をあまり含まない。	
43	甕B2	口径（13）	口縁端部は上方にのみ拡張され凹線文が2条施らされている。	口縁内外面とも横ナデ。 胴部外面の上半部はタタキ目の後ハケ目調整、下半部はタタキ目の後ヘラ磨き。内面上半部はハケ目調整、下半部はヘラ削り。	にぶい褐色	砂をあまり含まない。	

S K 1002

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
44	甕C 2	口径(22.5)	口縁端部は上下に大きく拡張されて凹線が3本巡らされ、押形浮文が付けられている。 頸部はくの字形に大きく屈曲する。	口縁部は内外面とも強く横ナデが施こされ頸部まで及ぶ。 胴部は外面の上半部がタタキ目の後にハケ目、内面が指頭によるナデ調整の後ハケ目が施こされる。	にぶい橙色	砂粒を多く含むが調整がていねいである。	
45	高杯脚部	底径(10.5)	脚部は外下方に穴かってハの字形に大きく開き脚端部は外上方にむかって拡張される。	脚絞部は強くナデられ凹面となっている脚部外面はナデ調整、内面はヘラ削りが施こされている。	橙色	砂粒を多く含むが外面の表面は入念にナデて砂が浮いていない。	
46	無頸壺 D 2	口径（30）	ゆるやかに内傾する口縁端部は内外に拡張され平坦面を作り頂部はわずかに凹む。口縁直下には同線文が4条めぐらされている。	内面は指オサエの後ナデ調整。 外面はヘラ磨き調整。	淡橙色	砂粒を多く含む。	
47	壺底部	底径（6）	薄手で入念な作り。	内面はヘラ削り調整。 外面はヘラ磨き調整。	橙色	砂粒をあまり含まない。	

S K 1003

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
50	壺A 2	口径	口縁端部は上下に拡張し4条の凹線、または擬同線がつけられる。	口縁の内外面は強い横ナデが施こされ段を生じている。	にぶい褐色	砂粒を含まず	
51	壺A 2 a	口径（13） 胴最大径（31.5）	口縁端部は上下に拡張され同転が3～4条廻らされる。また頸部下半と胴部にはそれぞれヘラ描文や沈線が施こされている。	口縁の内外面は強い横ナデが加えられ段を生じている。胴部外面はハケ目調整、内面は指頭によるナデ調整が施こされる。 胴部外面は上半部にハケ目、下半部がヘラ磨きがそれぞれ施こされ肩部には幅の広いタタキ目が加えられている。 内面は上半部が横撫とハケ目、下半部はヘラ削りが加えられる。	にぶい褐色	砂粒を含む。	

S K 1004

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
52	壺A 4 a	口径（18）	算状の胴部からななめ外上方にのびる口縁の端部は上方にのみ拡張され頸部と胴部の境に棒状の工具による刻文が施こされる。	口縁部は内外面ともナデ調整頸部以下は不明。	橙色	中に砂礫を多く含む。	
53	壺B 4	口径（14）	球形の胴部に直立する短かい口縁部がつけられる。口縁端部は内方にむかって若干拡張され平坦に作られる。	口縁部内面は板またはハケによるナデ調整、外面は全面にハケ目が施こされる。	橙色	石礫を含む。	
54	壺B 4	口径（19）	球形の胴部に直立する短い口縁部がつく。口縁端部は内外に拡張され平坦面を作り出す。	口縁から頸部にかけての内面はナデ調整。外面はハケ目調整が頸部まで及ぶ胴部内面は胴部の境までヘラ削りが施される。	明黄褐色土	大小の砂礫を多量に含む。	
55	台付鉢	底径(15.6)	外下方にゆるやかに開く脚端部は上下に拡張され回線文が巡らされている。	鉢から脚柱部にかけての外面は板ナデ調整、脚端部近くはタタキ目が施こされている。 鉢内面はヘラ削りで脚端部近くでは横ナデが加えられる。	にぶい黄橙色	砂礫を多く含む。	

ＳＫ1005

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
58	壺Ａ１	口径（23）	頸部からななめ外上方に大きく開く口縁をもつ大形の広口壺で口縁部内面には横振の波状文がまた頸部外面にはヘラ圧痕文がそれぞれ施こされている。	口縁部内外面から頸部上半にかけて強い横ナデが施こされる。 頸部外面はハケ目調整、内面には指頭圧痕が施こされる。	にぶい褐色	砂粒を含む。	
59	壺Ａ４ａ	口径（15）	ななめ外上方にむかってのびる短かい口縁の端部に凹線が１条つけられる。	口縁部は内外面とも横ナデ。 胴部外面は粗いヘラ磨き、内面はヘラ削りが頸部付近まで施こされる。	橙色	砂粒を多く含む。	
60	壺Ｂ２	口径（10）	筒状の頸部からゆるやかに外反しながらのびる口縁の端部はやや拡張され平坦面を作り出す。口縁部直下から頸部にかけては凹線が何条か巡らされ頸部と胴部の一部にはヘラによる斜文が施こされる。	口縁から胴部上反にかけて内面は指頭による圧痕やナデ調整が施こされ、下半部にはヘラ削りが加えられる。	橙色	砂粒を多く含む。	
61	壺Ｂ	口径（10）	直下内傾気味に上方にのびる筒状の頸部に尖り気味の口縁端部がつく。口縁から頸部にかけては凹線がつけられる。	口縁から頸部外面にかけてはハケとナデが、また内面は指オサエとナデ調整が施こされる。	明赤褐色	小石などを含む。	
62	壺Ｂ	口径（12）	筒状の頸部からのびる口縁端部は丸くおさめられ口縁直下には凹線が４条めぐらされている。	口縁部外面は粗いハケとナデ調整、内面は口縁端部近くはナデそれ以下は指頭圧痕	にぶい橙色	砂粒を多く含む。	
63	壺Ｂ	口径（10）	筒状の頸部にやや開きぎみにのびる口縁部がつけられ口縁端部は丸くおさめられる。口縁直下には凹線がつけられる。	口縁部内外面はナデ調整、頸部外面はハケ目、内面は指頭圧痕が施こされる。	橙色	砂粒を多量に含む。	
64	脚台	底径（15）	ハの字形に直線的に開く脚端部は若干、拡張されて凹線状にくぼむ。脚柱部と脚端部には凹線が巡る。	脚部外面はナデ調整？内面も不明。	橙色		
65	高坏Ｂ	口径(20.6) 器高（14） 底径（10）	坏部は口縁との境に稜を持ち、口縁部は横ナデだけで凹線を持たない。 口縁端部はやや外方へ拡張され平坦面を作り出している。 脚端部は丸く収める。	坏部は内外面ともヘラ磨き。 脚部外面はハケ目調整とヘラ磨き、内面はヘラ削りが施こされる。	赤褐色	砂粒を多く含む。	
66	高杯Ｃ	口径（12） 高さ(10.6) 底径（７）	坏部はななめ外上方にむかってゆるやかに内弯しながら立ち上がる。脚端部は丸くおさめる	脚部内面はヘラ削り。	黄褐色		
67	壺Ｂ１	口径(18.5) 胴最大径 （33）	口縁端部は上方にのみ拡張され拡張された端部には凹線が施こされる。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部外面はハケ目とヘラ磨きによる調整が、また内面は頸部までヘラ削りが施こされる。	赤褐色	砂粒を多く含む。	
68 69 71	壺Ｄ 頸底部	口径（20） 底径（６） 底径（75）	球形に近い胴部に頸部から外上方に屈曲する短かい口縁部がつき口縁端部は著じるしく肥厚する。	口縁部内外面から頸部外面にかけては横ナデ調整、特に頸部は強くナデられ凹面を形成する。 頂部外面は全面ヘラ磨き。 頸部から頂部内面はヘラ削りが施こされる。	赤褐色	砂粒を含む。	
70	底部	底径（５）	胴部は平底の底部からななめ外上方にむかって直線的に伸びる。	外面はヘラ磨き、内面はヘラ削り。			

ＳＫ1006

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
72	壺Ａ１	口径(30cm)	ゆるやかに外反しながらななめ外上にのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線とヘラ斜線が施こされる。 また、頸部外面と口縁内面にはヘラ正収と櫛描波状文がそれぞれ施こされる。	口縁端部から３～７cmの間は内外面とも強い横ナデが加えられる。 頸部外面は縦のハケ目、内面は横のハケ目調整と指頭によるナデが施こされる。	にぶい黄橙色	砂粒を多く含む。	

ＳＫ1006

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
73	壺Ａ１	口径（20）	頸部からいったんななめ外上方に直線的にのびる口縁は起部近くで外方に屈曲し上下に拡張されている。口縁端部と頸部にはそれぞれ凹線が施こされる。	口縁端部付近は内外面とも横ナデ。頸部内面はナデ調整か？頸部外面から胴部にかけてはハケ目とヘラ磨きが併用される。	淡黄色		
74	壺Ａ１	口径（24）	ななめ外上方に大きく開く口縁の端部は上下に拡張されている。口縁端部と頸部にはいずれも凹線とヘラ状原文が施こされている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整頸部外面はハケ目？内面は指頭によるナデ調整が施こされる。	にぶい橙色	砂粒を多く含む。	
75	壺Ａ５	口径15	いったんななめ外上方にのびた口縁は著じるしく下方に垂下する。口縁上面には櫛の圧痕が加えられ、垂下した部分と頸部には凹線が施こされている。	頸部内面はハケ目調整が施こされているが胴部近くでは指頭によるナデ調整に変わる。	赤褐色	表面はやや粗い。	
76	壺Ｂ３	口径（14）	筒状の頸部から外反して伸びる。口縁端部は内外に拡張され凹線がつけられるとともに口縁直下も凹線がつけられる。頸部にはハケによる圧痕がつけられる。	内面の上半は強い横ナデ、下半は指頭圧痕とハケによるナデが施こされる。頸部はハケ目と横ナデが施こされる。	橙色	砂粒をあまり含まない。	
77	壺Ｄ	口径(24.5)	球形の胴部に直立する短かい口縁がつけられる。口縁端部は内外に拡張され、頸部にはキザミを施った太い突帯がタガ状にめぐらされている。また、胴部にはハケによる圧痕も認められる。	口縁は内外面とも横ナデ調整。胴部内面は指オサエ、ハケ目、ヘラ磨きが、また外面にはハケ目底整の後、ヘラ磨きが施こされる。	赤褐色	砂粒をあまり含まない。	
78	鉢Ｃ１	口径30.5	ソロバン玉形の胴部に端部を内外に拡張した平らな口縁部がつけられる。胴部には明らかに注口が付けられていた痕が認められる。口縁端部には貝殻腹縁文が、また胴部には櫛による斜行する直線文と扇状文がそれぞれ施こされ、口縁直下と胴部には同施と竹管が使用された文様が巡らされている	口縁部は内外面とも横ナデ調整。胴部の調整は外面下半がハケ目、下半がヘラ磨き、内面上半が板ナデ、下半が粗いナデ調整。	浅黄橙色	砂粒を多量に含む。	
79	鉢Ｂ	口径24.6底径6	口縁端部は外方にむかって斜めに傾斜する。口縁内面は凹線状に凹む。	口縁部の内外面はともに強く横ナデが施えられる。胴部外面は粗いヘラ磨き、内面は板によるナデ調整。	黄橙色	砂粒を多く含む。	
80	ジョッキ形土器	底径4	底部と把手付近しか残存していない。	把手には指頭圧痕が残される。	浅黄橙色	砂粒を多く含む。	
81	壺		胴部のみの破片で形態は不明だが櫛描の波状文と平行線文が交互に施こされている。	外面はヘラ磨き、内面は指頭圧痕。	赤褐色	きめの細かい精良な胎土。	
82	壺		81と同じように櫛描による波状文と平行線文が交互に施こされる。	外面はヘラ磨き、内面は指頭圧痕。	赤褐色	砂粒をあまり含まない。	
83	甕Ａ	口径（25）	口縁は断面が方かたち近く端部に凹線は認められない。	焼成不良で外面の調整は不明。胴部内面はヘラ削り。	黄褐色		
84	甕Ａ	口径(24.5)	口縁は断面方形に近く端部に凹線が１条認められる。	外面は粗いハケ目、内面はヘラ削りが頸部との境まで施こされる。			

ＳＫ1007

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
87	壺Ａ３？		上方にむかってゆるやかに開く漏状の頸部に波状文と刺突文が交互に加えられている。88と同一個体か？	内面は指頭によるナデが横方向に施こされている。			
88	壺Ａ３？		頸部に向かってゆるやかに内弯する壺の胴部の破片。外面には櫛状文と波状文施かれている。	胴部内面上半は指頭による圧痕文が施こされる。			

S K 1007

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
89	高坏脚部	底径（11）	脚柱は長めで脚端部にむかってゆるやかに開く。 脚端部は上方に拡張され凹線が3条廻らされている。 脚と坏部との接合は円盤充填法。	脚部外面はヘラ磨きとハケ目調整、内面はヘラ削りが施こされる。	赤褐色	砂粒を多く含む。	
90	底部	底径（7）	上げ底の壺の底部	内外面の調整不明。 二次加熱？	にぶい橙色	胎土中に小礫を多量に混入している。	二次加熱？
91	底部	底径（6）	平底の底部	内面はナデ調整？ 外面は粗いヘラ磨き。	灰赤褐色	小礫を多量に混入している。	二次加熱？
92	底部	底径（7）	平底の底部	内外面の調整は不明だが外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りか？	橙色	小礫を多量に含む。	
93	壺	底径(28.6)	若干上げ底の底部	外面の調整は不明、内面は細かいヘラ削りが施こされる。	明黄褐色	小礫を多量に混入している。	二次加熱？

S K 1010

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
98	壺A 2 a	口径17.0	筒状の頸部からなめ外上方にのびる口縁の端部は上下に拡張されている。口縁端部と頸部には凹線が多段に巡らされ、肩部にはヘラ庄痕文も施こされている。	口縁部内外面は強い横ナデ。 頸部外面から胴部上半にかけてはハケ目調整、下半はヘラ磨き。肩部には半行タタキが施こされる。頸部内面から胴部上半は指頭によるナデ。下半はヘラ削り。	明赤褐色	砂粒などをあまり含んでいない。精良なものを用いている。	焼成良好
99	壺A 2 a	口径13	筒状の頸部から水平に近い角度で外方にのびる口縁の端部は上下に拡張され、凹線がめぐらされている。 口縁には円孔が多数あげられ、頸にはヘラ庄痕文が認められる。	口縁部内外面は強い横ナデ。 頸部外面から胴部上半にかけてはハケ目と平行タタキが施こされる。頸部内面はハケと指頭によるナデ調整、胴部上半は指頭庄痕が認められる。	明赤褐色	砂粒などをあまり含まない。	
100	壺A 2 b	口径13	筒状の頸部から水平に近い角度で外方にのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線がめぐる。頸部にはヘラ庄痕文が施こされ、胴部との境には弱い段がつけられる。	口縁部内外面は強い横ナデが施こされる。頸部から胴部上半にかけての外面はハケ目調整、内面は指頭によるナデ。	明黄褐色		
101	壺A 2 b		頸部は筒状に仕上げられ、ヘラ庄痕文が施こされる。頸部と胴部の境には弱い段がつけられている。	頸部は外面がハケ目調整、内面は指頭によるナデ。 胴部外面上半はヘラ磨き、下半はハケ目調整、内面はヘラ削り。	橙色	砂粒などをあまり含まない。	
102	壺A 2 a	口径18	大きく肩の張った胴部からなめ外上方にのびる比較的短かい頸部につけられた口縁端部は上下に拡張され凹線が1条めぐらされている。また頸部にはヘラ庄痕文も認められる。	口縁部は内外面とも強い横ナデが施こされる。 頸部は外面がハケ目、内面が指頭によるナデ調整。 胴部外面は上半部が平行タタキの後にハケ目調整、下半がハケ目調整。 内面は上半部が指頭庄痕、下半がヘラケズリ。	赤褐色		
103	壺A 2 a	口径 17 底径9.5 器高41	ほぼ中央部で最大径を持つ胴部とやや上方に開き気味の筒状の頸部からなめ外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張されるが下方への拡張の度合いは少ない。口縁端部には凹線とヘラ庄痕文が施こされる他、円孔があけられている。また、頸部と胴部にもそれぞれヘラ庄痕文が認められる。頸部と胴部の境には弱い段。	口縁部内外面は強い横ナデが施こされる。 頸部外面はヘラ磨き、内面は指オサエ 胴部外面は上半部にタタキ目を施こした後、全面にヘラ磨き、内面は上半部が指頭庄痕、下半がヘラ削り。	橙色	砂粒等を多く含む。	焼成良好。

SK1010

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
104	壺A 3	口径17 底径8 器高41	細長い筒状の頸部から外方にむかって水平にのびる口縁の端部は上下に拡張され、沈線が施こされる。また頸部にも同様の沈線が多段にめぐらされ、そろばん玉形に胴の張った胴部上半には櫛描の平行線文と波状文が交互に施こされる。 底部はやや上げ底。他の土器と比較して器壁が厚い。	口縁部内外面は横ナデ。 頸部外面はナデ？、内面は指頭によるナデ。 胴部外面上半はハケ目、下半はヘラ磨き、内面上半はハケと指頭圧痕、下半はヘラ削り。	黄橙色	砂粒をあまり含まない。	焼成不良二次加熱か？
105	壺E	口径15	球形の胴部と内立した短かい口縁をもつ。口縁端部は上下に拡張され凹線がめぐらされている。	口縁部内外面とも横ナデ、胴部外面はハケ目調整。	明黄褐色	砂粒を多量に混入。	
106	壺A 1	口径16.5	筒状の頸部からななめ外上方に短かく立ち上がる口縁の端部は上下に大きく拡張され凹線が2条めぐらされている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整、頸部外面は横ナデ、内面はナデ。 胴部外面上半はタタキ目の後、ハケ目（板ナデ？）調整、下半はヘラ磨き、内面上半は指頭圧痕とナデが施こされる。	明黄褐色	砂礫を多く含むが焼成は良好。	
107	壺A 4 a	口径15 胴部最大径23	球形の胴部から大きく外反して外上方にのびる口縁は端部にむかうほど肥厚し断面は方形に仕上げられる。口縁端部には凹線、頸部には沈線がめぐらされ頸部にはヘラによる刺突文が施こされる。	頸部外面はハケ目調整、内面はヘラ磨きと板ナデ。 胴部外面は粗いヘラ磨き、内面は全面にヘラ削りが施こされ頸部との境には指頭圧痕が残される。	橙色	砂粒などをあまり含まない。	
108	壺A 4 a	口径18	頸部からななめ外上方に外反しながらのびる口縁の端部は上方に拡張され凹線がめぐらされる。	遺存状態が悪く調整が明らかではないが頸部から胴部にかけては粗いハケ目がまた胴部内面には粗いヘラ削りが施こされている。	橙色		
109	壺A 4 a	口径15.5	筒状の頸部からななめ外上方に直線的にのびた口縁の端部は上方にのみ拡張され凹線（？）が1条めぐらされている。	口縁外面は遺存状態が悪く調整は不明頸部内面は指頭によるナデの後板ナデ胴部内面は粗いヘラ削りが行なわれる。	赤灰色	砂礫を多量に含む。	
110	壺A 4 a	口径18	口縁端部を上方にのみ拡張し、拡張した口縁端部に凹線をめぐらせる。 頸部には先端が平らな角棒による刺突が施こされる。	口縁部は内外面とも横ナデ。 頸部から胴部外面にかけてはヘラ磨き、頸部内面はナデ調整。 胴部内面は頸部付近までヘラ削り。	明褐色	砂粒を多く含む。	
111	壺A 4 a	口径14	筒形の頸部からななめ外上方に短かくのびる口縁の端部は上方に拡張され凹線がめぐらされている。また頸部と胴部の境には棒状工具による刺突が施こされる。	口縁部は内外面とも横ナデ。 頸部内面はナデ調整、外面はヘラ磨きが加えられる。 胴部上半はヘラ磨き、内面は頸部までヘラ削りが施こされる。	橙または赤褐色	砂粒を含む。	
112	壺A 4 a	口径15.5	筒状の頸部から外方に短かくのびる口縁の端部は上方にのみ拡張され凹線が施こされている。	口縁部外面は横ナデ。 頸部外面は板によるナデ、内面は指頭による圧痕。 胴部外面はハケ目調整？内面はヘラ削り。	橙色	砂粒などを多く含む。	
113	壺A 4 b	口径17.5	いったんななめ外上方にゆるやかにのびた口縁は端部付近で若干内傾する。	口縁部内外面は強い横ナデが施こされる。頸部外面はハケ、内面は指頭圧痕とヘラ削りが施こされる。	褐色		
114	壺A 4 b	口径17.5 胴部最大径26 底部7 器高36.6	短い頸部にななめ外上方に直線的にのびる口縁部がつく。 口縁端部の断面は方形、底部はあげ底。	口縁部内外面は横ナデ。 外頸部以下はハケ目調整で下半部はヘラ磨きが加わる。 内面も頸部以下はすべてヘラ削り。	褐色	砂粒などを含んでいるが他の胎土に類似。	
115	壺C	口径19	頸部からゆるやかに内湾する口縁のいったんゆるやかに外上方に開く。頸部に内湾する口縁がつく。 口縁端部は平たんに作られ口縁外面には凹線が6条めぐらされている。 頸部にはヘラ先による鋸子目文が付けられる。 頸部から胴部にかけては、ハケ目調整が行なわれる。	口縁内面は一部横ナデ。 頸部内面はハケ目調整がそれぞれ施こされている。 胴部は頸部との境まですべて粗いヘラ削りが施こされる。	にぶい褐色 内面灰白色	砂礫を多く含む。	

S K 1010

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
116	壺B 1	口径 7 底径 5	球形の胴部に直立する口縁部がつく。口縁端部は尖る。底部は若干上げ底。	外面は頸部と胴部の１部にハケ目調整が認められるだけ。内面は頸部の境までヘラ削り 口頸部内面ナデか？	橙色	砂粒を多く含む。	
117	壺B 2	口径10.5 胴部最大径 23.5	球形の胴部から筒状の長い頸部がほぼ直上に向って伸びる。口縁端部は平坦に作られ長い頸部には多数の凹線とヘラ状貝殻文が付けられる。 頸部はハケ目調整の後に凹線が施こされる。	長い筒状の頸部内面から胴部上半は、指頭によるナデをほどこし胴部中ほどはハケ目下半はヘラ削りをそれぞれ施こす。 胴部上半は*平行タタキ*の後ハケ目調整胴部中部から下半部にかけてはヘラ磨きが施こされる。	赤褐色	砂粒を含む。	
118	水差し形土器	口径12.5 胴部最大径 24	直線的に外上部に伸びる断面方形の口縁の端部から頸部にかけて凹線がめぐらされ頸部と胴部上半にはそれぞれハケによる*櫛*描文が付けられる。	口縁から頸部には入念なナデ調整が施こされ頸部との境付近は指頭によるナデ調整が施こされ、それ以下はヘラ削りが加えられる。 頸部から胴部にかけてハケ目調整が施こされ下半部にはヘラ磨きが加わる。	淡黄橙色	砂礫を含む。	
119	壺D 1	胴部最大径 15	そろばん形の胴部に短かい口縁部が付く。 口縁端部内下に凹線がく条めぐらされ円孔が穿たれている。おそらく半底で台はつかない。	調整不明。	橙色		
120	高杯A	口径29.5 器高16.8 底径8.5	口縁部は陵線をもってやや内傾気味に上方に立ち上がり端部は内外方に拡張される。	口縁部は内外面とも横ナデ。 杯部は内外とも入念なヘラミガキ端端部は下方に拡張された面は強く横ナデ調整が加えられる。 脚内部はヘラ削りが行なわれる。 脚（部は）ヘラミガキ	橙色		
121	高杯C	口径24	口縁部が鍔をもって屈曲し直立する口縁端部は平坦に作られ口縁部には凹線が施らされる。	・杯は内面は横ナデとヘラ磨き、 外面は板ナデ調整？ヘラ磨き。	橙色	砂粒を多く含む。	
122	高坏B	口径15.5 器高12.5 底径 9	二次加熱のため調整はおろか、外形も不明鉢杯の口縁は陵を持って上方に立ち上がる、端部は尖る。 脚端部は拡張されず丸くおさめられ凹線が施らされている。		灰色		
123	鉢B	口径24 器高19 底径10.5	底部からゆるやかに内湾しながらななめ外上方にのびる口縁端部は内傾から外側に向ってなめにそぎ落としたように傾斜する。この口縁端部直下は内外とも凹線状に凹む。	内外面とも強く横ナデが加えられている。 内外面ともあらいが、ヘラ磨きが加えられている。 内面はナデ調整が加わる？	灰白色	砂粒を多く含む。	
124	鉢A	口径30 底径12.5 器高27	底部からななめ外上方にのびる体部は口縁部付近で内湾する。 口縁端部は内方に拡張する。	口縁部は横ナデ。 胴部外面はヘラ磨き、胴部内面はヘラ磨きと横ナデ。	橙色	砂粒を多く含む。	
125	鉢C 2	口径30 底径21 器高46	算盤玉形の胴部にくの字形に外反して伸びる口頸部がつく。口縁端部は上下に拡張され、口部には注口が付けられる。	口頸部は横ナデ。 胴部外面はヘラ磨き、内面はハケ目調整とナデ。	赤褐色	砂粒を含む。	
126	壺A	口径17	頸部からくの字形に屈曲して外上方にのびる口縁の断面は方形。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部内面は頸部との境までヘラ削りが外面はハケ目が施こされる。	にぶい黄橙色	砂粒を多く含む。	
127	壺A	口径16	直線的な口縁部は断面方形。	口縁の内外面は横ナデ調整。 胴部内面は頸部との境までヘラ削りが外面はハケ目が施こされる。	淡黄色	砂粒を含む。	
128	壺A	口径17	直線的にななめ外上方にのびる断面方形の口縁端部は肥厚され凹線がめぐらされる。	口縁内面はハケ目調整、外面は横ナデが施こされる。 胴部内面はヘラ削り、外面はハケ目調整の後頸部近くまでヘラ磨きが加えられる。	赤褐色		

SK1010

番号	器種	法量(cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
129	甕B1	口径19	頸部でくの字に屈曲して外下方にのびる短かい口縁端部は上方に拡張される。	二次加熱をうけているせいか遺存状態が悪く調部表面の調整は不明。 内面は頸部との境までヘラ削りが加えられる。	橙色	砂粒を若干含む。	
130	甕B1	口径18	短かい口縁端部は外下方にのみ拡張する。	口縁部内外面とも横ナデ調整。 頸部内面はヘラ削り外面はハケ目調整。			
131	甕B1	口径23.5	頸部からくの字にななめ外下方にのびる口縁端部は上方に拡張され浅い凹線が施こされる。	頸部は内面が頸部との境までヘラ削りが、外面はヘラ磨きが施こされる。	にぶい黄橙色	砂粒を多く含む。	
132	甕B1	口径19.5	頸部でくの字形に屈曲する口縁はやや内湾気味に外上方にのびる。 端部は上方にのみ拡張され丸くおさめる。	口縁内外面は横ナデ。 頸部の一部から胴部にかけてハケ目調整。 内面は頸部の境までヘラ削り。	灰白色	砂粒を多量に含む。	
133	甕B1	口径20	胴部からななめ外上方にのびる短かい口縁端部は上方に拡張され凹線が巡らされる。	口縁部、内外面とも横ナデ調整。 頸部内面は頸部との境付近までヘラ削り一部い 外面は二次加熱による遺存状態が悪く不明	黄橙色	砂粒を多く含む。	
134	甕B1	口径15.5	やや内湾気味に外上方にのびる口縁端部は上方に拡張され強くナデ調整がくわえられて凹線状にくぼむ。	口縁部内外面とも横ナデが加えられる頸部内面は頸部との境以下はヘラ削りが加えられる。外面はハケ目調整が加えられ下半部にはさらにヘラ磨きが施こされる。	橙色	砂粒を多く含む。	
135	甕B1	口径18	若干内湾気味にななめ外上にのびる口縁端部は上方に拡張され凹線を2条回らす。	口縁の内外とも強い横ナデ。 頸部内面は頸部との境までヘラ削りが施こされる。			
136	甕B1	口径21	ななめ外下方に直線的にのびる口縁端部は上方に拡張され凹線が2本巡らされている。	口縁内外面とも横ナデが施こされている。	橙色		
137	甕B1	口径17	やや内湾気味にななめ外上方にのびる口縁端部は上方に拡張され凹線が2本巡らされる。	口縁部内外面とも強い横ナデ調整が行なわれる。 胴部内面は頸部との境までヘラ削りが行なわれる。外面はあらいハケ目。	赤褐色	砂粒などを含む。	
138	甕B1	口径16	口縁部は上下に拡張され、内外面ともナデ調整が施こされる。	胴部内面は頸科との境付近までヘラ削りが施こされる。	橙色	石粒を多く含む。	
139	甕C1	口径14	頸部からくの字形に屈曲して、直線的にななめ上方にのびた口縁端部は上下に拡張され凹線が2条廻らされている。	口縁部は内外面とも強い横ナデが加えられている。 胴部外面はハケ目、内面は頸部との境までヘラ削りが加えられる。	橙色		
140	甕C1	口径15	頸部からくの字形に屈曲して直線的にななめ上方にのびた口縁端部は上下に拡張され凹線が2条廻らされている。	口縁部は内外面とも強い横ナデが加えられている。 胴部外面はハケ目、内面は頸部との境までヘラ削りが加えられる。 内面のヘラ削りはない。	明褐灰色	大粒の礫などを混入している。	
141	甕C2	口径22 底径7	頸部でくの字に屈曲し水平に近い方向にのびる。 口縁端部は上下に拡張されている 底部は口縁部に比べて著じるしく小さい。	口縁内外面の強く横ナデが加えられる強く張った胴部上半はタタキ目のトにハケ目調整が施こされ胴部最大径のところにはハケによる圧痕が施こされる胴部下半はヘラ磨きが施こされる内面の上半は指頭圧痕とハケ目調整、下半部はヘラ削りがそれぞれ施これる。	にぶい橙色	砂粒を多量に混入する。	

S K 1010

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
142	甕C 1	口径17 底径 8	胴部からくの字形に屈曲してななめ外上方に直線的にのびる短かい口縁端部は上下に拡張され凹線が巡らされているが拡張の度合いは弱い。	胴部内面は頸部との境までヘラ削り。 頸部外面は上部がハケ目、下部がヘラ磨き。	赤褐色	砂粒を多く含む。	
143		底径 (8)	やや上げ底の壺の底部。	内面はヘラ削り。 外面は入念なヘラ磨き。	橙色	砂粒を多く含む。	
144		底径 (8)	つぼの底部。	内面は幅広のヘラ削り、外面は幅広のヘラ磨き。	黒褐色	砂粒を多く含む。	
145		底径(7.5)	やや上げ底気味になっている。	底部の内面はヘラケズリと磨き、外面は入念なヘラ磨き。	灰褐色	砂粒を含む。	
146		底径(7.5)	やや上げ底の底部。	ヘラ削りの後ナデ調整。 内面はヘラ削り。 外面は入念な磨き。	赤褐色	砂粒を多く含む。	
147		底径(6.5)	平底の底部。	外面はヘラ磨き。			
148		底径 (8)	つぼの底部。	内面ヘラ削り、外面ヘラ磨き。 上げ底 ヘラ削りで整える。 底部の立ち上りはヘラ削りを加えてある。	にぶい黄橙色	砂粒を多く含む。	

S K 1011

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
150	壺A 2 b	口径 (13)	算状の細い頸部から水平方向にのびる口縁端部は上下に拡張され凹線が巡らされる。	口縁部の内外面は強く横ナデされ波がつく。 頸部から胴部上半にはハケ目調整下半はヘラ磨き。 頸部と胴部最大径の部分にはヘラによる巨孔がつく。 頸部はハケによるナデ調整。 体部上半は指頭圧痕、内面下半はヘラ削り。	橙色	砂礫混入。	
151	壺A 2 b	口径 (16)	筒状の頸部からななめ外上方にのびる口縁端部は上下に拡張されて強い横ナデが加えられて凹線状にくぼむ。また、口縁内外面も強くナデられて段がつく。	頸部の一部と体部は板ナデや磨きの後にナデ調整が加えられる。 頸部内面は指頭によるナデ。 胴部上半までヘラ削り、部分的に二次加熱をうけている。	赤褐色	砂粒を多く混入。	
152	壺A 1	口径(15.5)	肩のよく張った胴部に短かい頸部がつく。口縁端部は上下に拡張され凹線がつけられる。	口縁の内外面は横ナデ調整。 頸部内面上半は指頭によるナデ。 頸部外面は頸部から胴部上半にかけてはハケ目の調整。 胴部内面上半は指頭と指オサエ 下半はヘラ削り 胴部外面上半はハケ目の調整 下半はヘラ磨き	赤褐色	砂礫を多く含む。	
153	壺A 1		胴部にはヘラによる圧痕。	頸部外面はハケ目。 内面は指オサエとナデ調整。	赤褐色	砂粒を多く含む。	破片。
154	壺A 4 a	口径(16.5)	ななめ外上方にゆるやかに外反しながらのびる、口縁端部は上方にわずかに拡張され（凹線風の横ナデ）がめぐらされている。	口縁の内外面は横ナデ。 頸部内面指頭によるナデ、頸部外面ハケ目とヘラ磨きが加えられる。 胴部上反内面は粗いヘラ削り 胴部上反外面はハケ目とヘラ磨きが加えられている	淡黄色	砂粒を多く含む。	
155	壺A 4 a	口径(13.5)	ななめ外上方にゆるやかに外反する、のびる短い口縁の端部は丸みを持ち凹線が巡される。	内面は頸部は指オサエ胴部上半は粗いヘラ削り。 外面は口縁から胴部の一部まではば広く横ナデ。	淡黄色	砂礫を多量に混入。	
156	甕C 2	口径(29.5) 胴最大径 (43.5)	胴部上半で大きく丁のはる器形。頸部から「く」の字に屈曲する、短かい口縁端部は上下に拡張され凹線と円形の竹管文が施される。	内面は胴部上半はハケと指オサエ、下半はヘラ削り。 外面は胴部上半はハケ、下半はヘラ磨き。	赤褐色		

S K 1011

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
157	鉢B 1	口径(18.5)	頸部でくの字に屈曲する口縁端部は上方に拡張されそこに凹線が２本巡らされている。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部内面は頸部との境で指頭圧痕を残しながらそれ以下はヘラ削り。 胴部外面上半はハケ目調整。	橙色	砂礫を多く混入。	
158	甕A 1	口径（17）	頸部から外上方に内傾的にのびる断面方形の口縁端部は肥厚され横ナデが加えられる。	口縁内外面は横ナデ調整、一部は胴部上半にまで及ぶ。 胴部内面は頸部との境までヘラケズリ、斜外面はハケ目が施されている。	橙色	砂粒を多量に含む。	
159	鉢B 1	口径（13）	口縁端部は上方に拡張される。	口縁内外面は横ナデ調整。 胴部内面指頭によるナデ（？）の後ヘラ削り。 胴部外面不明。	明褐色	砂礫を多く含む。	
160	甕A	口径（13）	口縁端部は方形に近い。	内面ヘラケズリ。	にぶい赤褐色		
161	台付鉢？	底径（19）	ゆるやかに外反する、脚柱と上方に拡張された裾部をもつ。	端部は弱く横ナデが施こされ凹線状に凹む。 内面はヘラ削り外面は入念なヘラ磨き裾端部近くは横ナデ。	浅黄橙色	砂粒を多量に含む。	
162	高坏B	口径（22） 器高(18.5) 底径（9）	稜をもって直立する口縁部は前後に拡張され平らに作られる。	口縁部内外面は横ナデ杯内外面はヘラミガキ、底なでで同線状に施こされる脚柱部は細く脚端部は極端に広がらない端部は上方に拡張され凹線が施こされる。 脚柱内部は指頭によるナデ外部はヘラミガキ。 脚端部はヘラ削り。			

ＳＢ1001　出土石器計測一覧表

番号	機種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	備考
4	打製石鏃	32	17	3	1.4	サヌカイト	

ＳＢ1002　出土石器計測一覧表

番号	機種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	備考
18	打製石鏃	25	18	4	2.2	サヌカイト	
19	打製石鏃	27	15	4	1.8	サヌカイト	
20	打製石鏃	35	13	4	2.3	サヌカイト	
21	剥器	24	33	5	3.7	サヌカイト	
22	打製石包丁	40	86	8	40.1	結晶片岩	
23	打製石包丁	41	100	8	43.1	結晶片岩	
24	打製石包丁	55	116	7	73.7	結晶片岩	
25	柱状磨製石斧	88	39	38	190	結晶片岩？	
26	柱状片刃石斧	146	36	45	450	結晶片岩？	
27	砥石	85	30	11	42	片岩？	
28	砥石	117	25	9	40.9	粘板岩	
29	砥石	127	40	23	240	砂岩？	
30	砥石	224	83	74	2450	砂岩	

ＳＫ1001　出土石器計測一覧表

番号	機種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	備考
40	打製石包丁	65	112	7	57.9	結晶片岩	

ＳＫ1002　出土石器計測一覧表

番号	機種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	備考
48	打製石包丁	50	88	6	23.3	結晶片岩	

ＳＫ1004　出土石器計測一覧表

番号	機種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	備考
56	打製石鏃	42	24	4	3.5	サヌカイト	
57	打製石包丁	48	55	6	22.9	結晶片岩	

ＳＫ1006　出土石器計測一覧表

番号	種　類	現存最大長(cm)	現存最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	備　考
85	砥石	102	19	13	59	粘板岩	
86	打製石包丁	60	41	6	29.9	結晶片岩	

ＳＫ1007　出土石器計測一覧表

番号	種　類	現存最大長(cm)	現存最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	備　考
94	打製石鏃	31	18	5	2.7	サヌカイト	
95	打製石包丁	48	55	5	16	結晶片岩	

SK1008　出土石器計測一覧表

番号	種　類	現存最大長(cm)	現存最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	備　考
97	打製石鏃	36	16	4	2.2	サヌカイト	

ＳＫ1010　出土石器計測一覧表

番号	種　類	現存最大長(cm)	現存最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	備　考
148	打製石包丁	50	68	8	80	結晶片岩	
149	砥石	89	32	10	68	砂岩？	

ＳＫ1011　出土石器計測一覧表

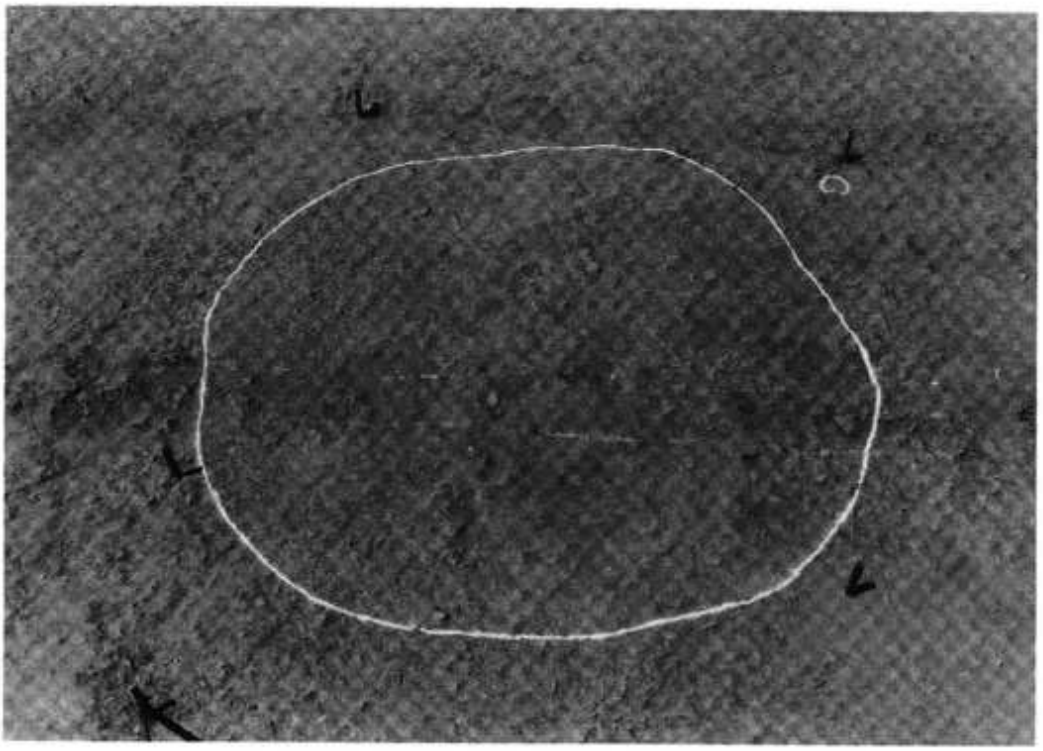
番号	種　類	現存最大長(cm)	現存最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	備　考
163	削器	39	68	9	35.7	サヌカイト	
164	打製石包丁	46	66	9	42.1	結晶片岩	
165	打製石包丁	42	106	5	54.7	結晶片岩	

図版1

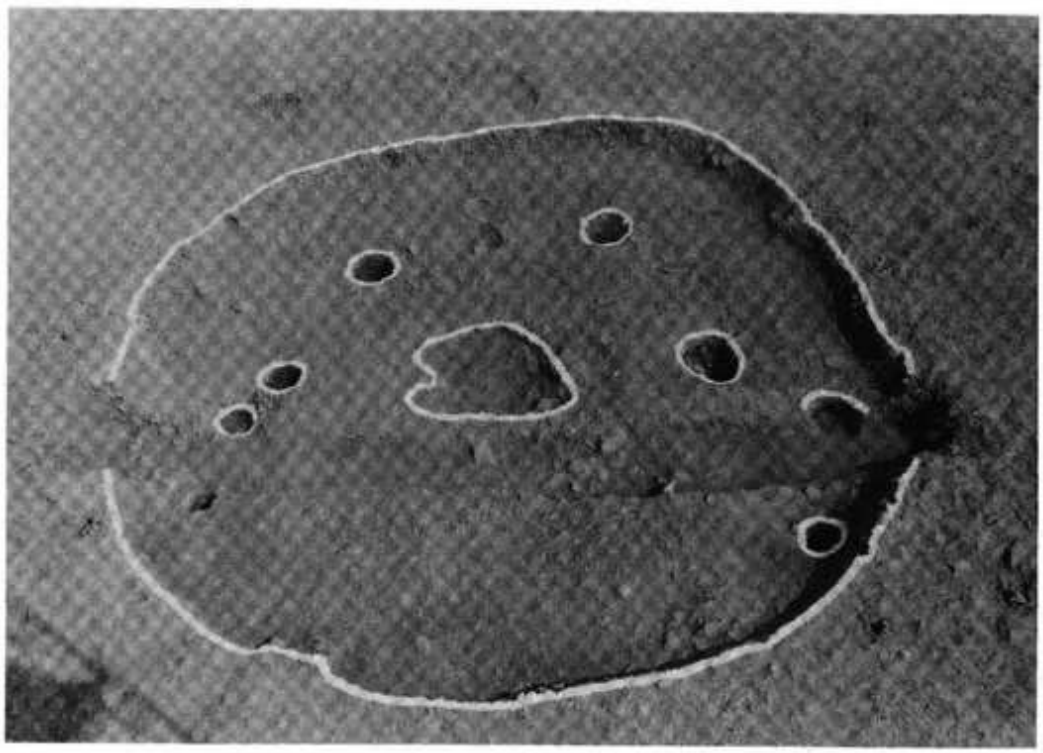
調査区遠景

調査風景

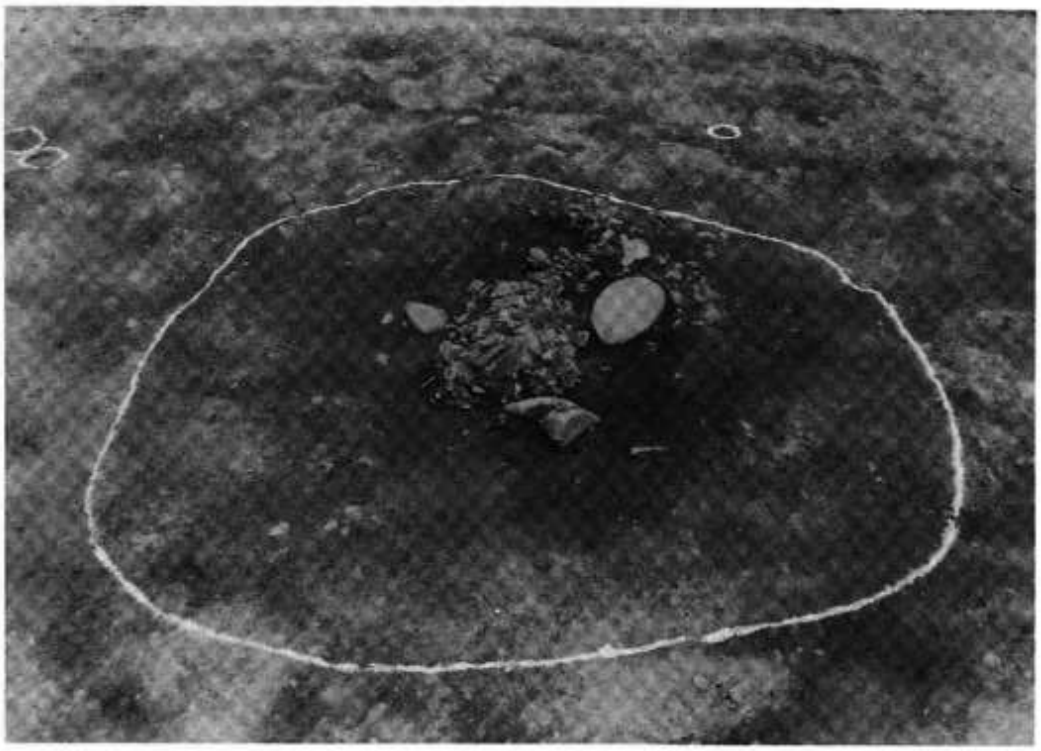
図版2



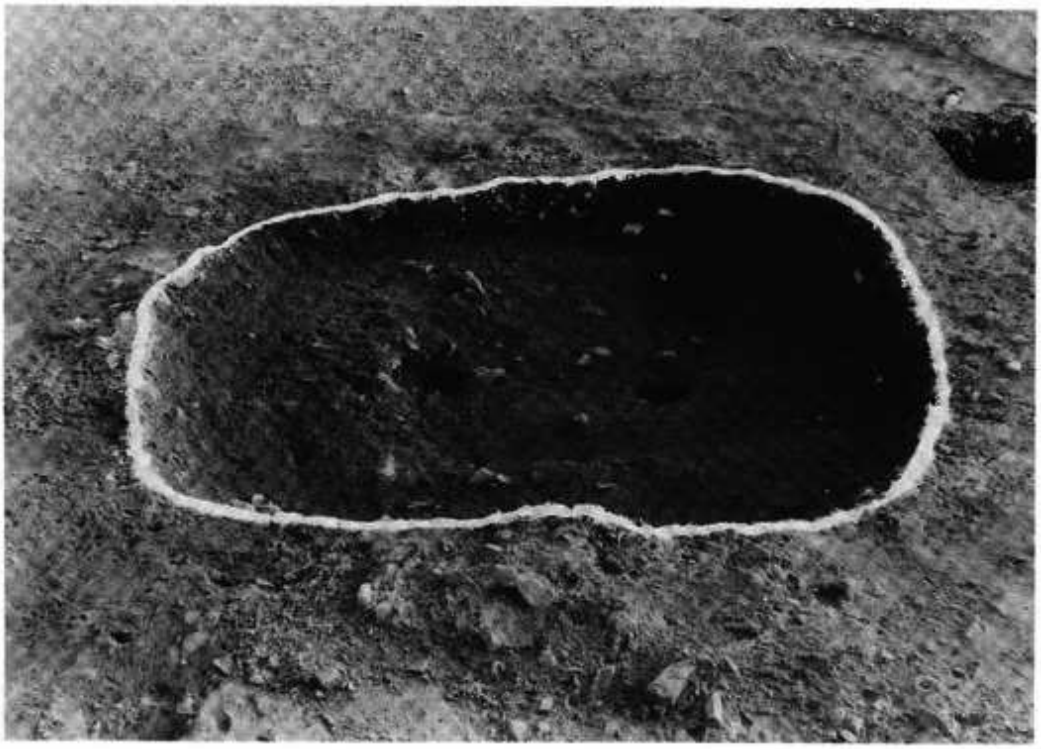
ＳＢ1001検出状況（南から）



ＳＢ1001完掘状況（同）



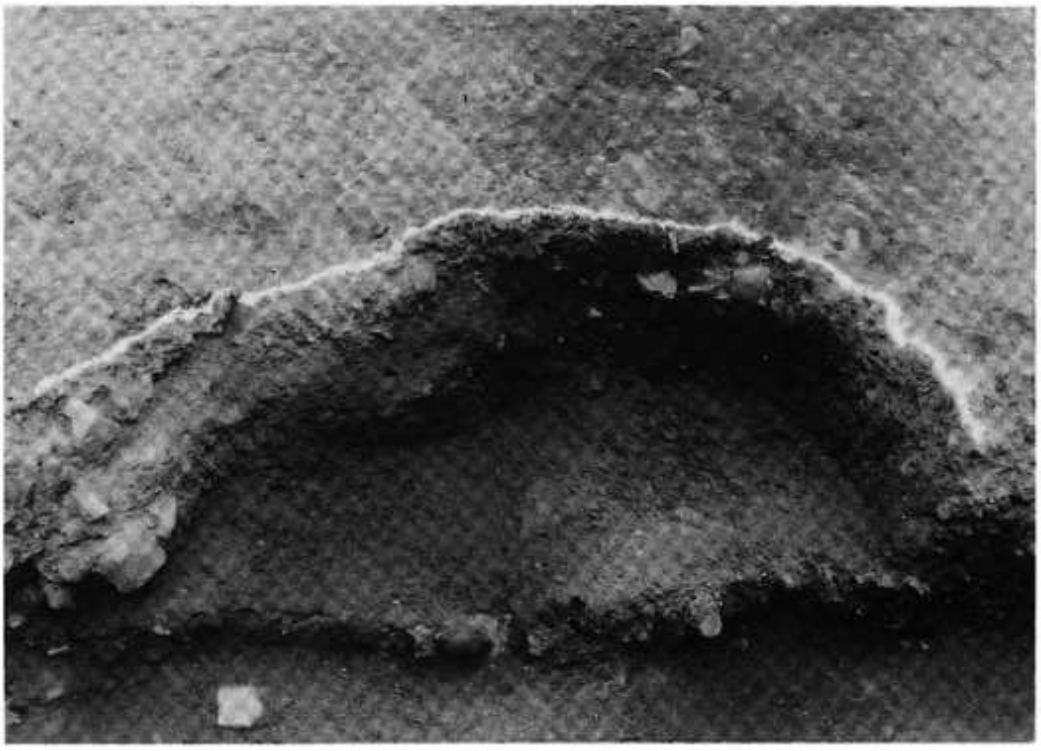
S B1002検出状況（西から）



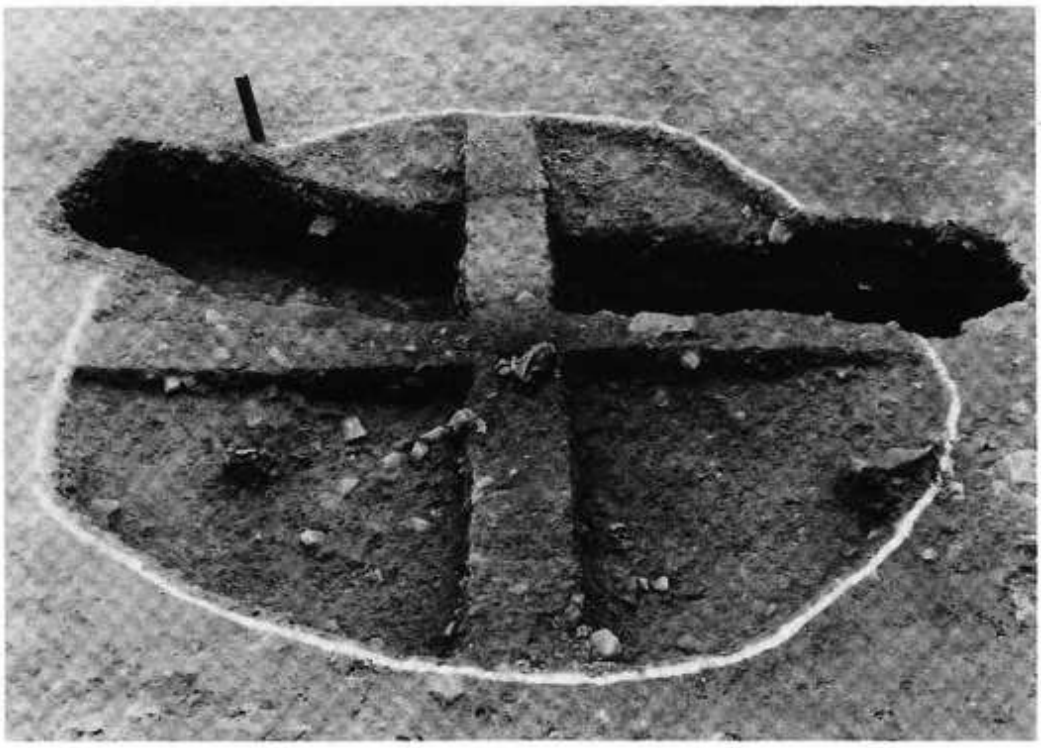
S B1002完掘状況（南から）

図版4

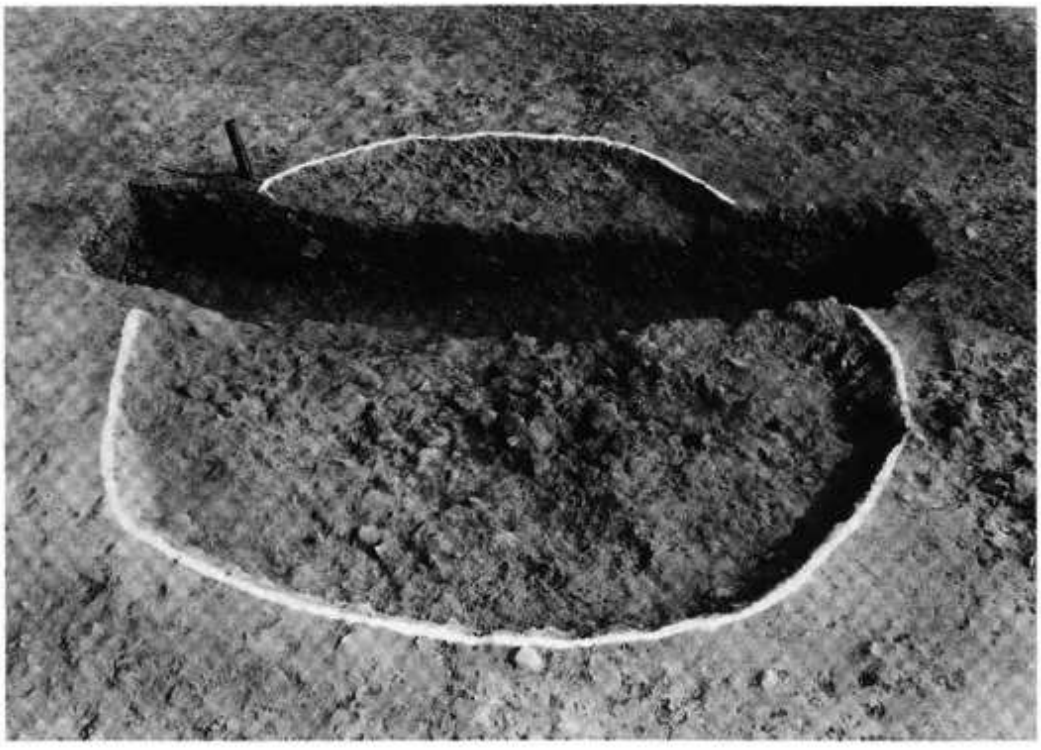
ＳＫ1001遺物出土状況（北から）



ＳＫ1001完掘状況（同）

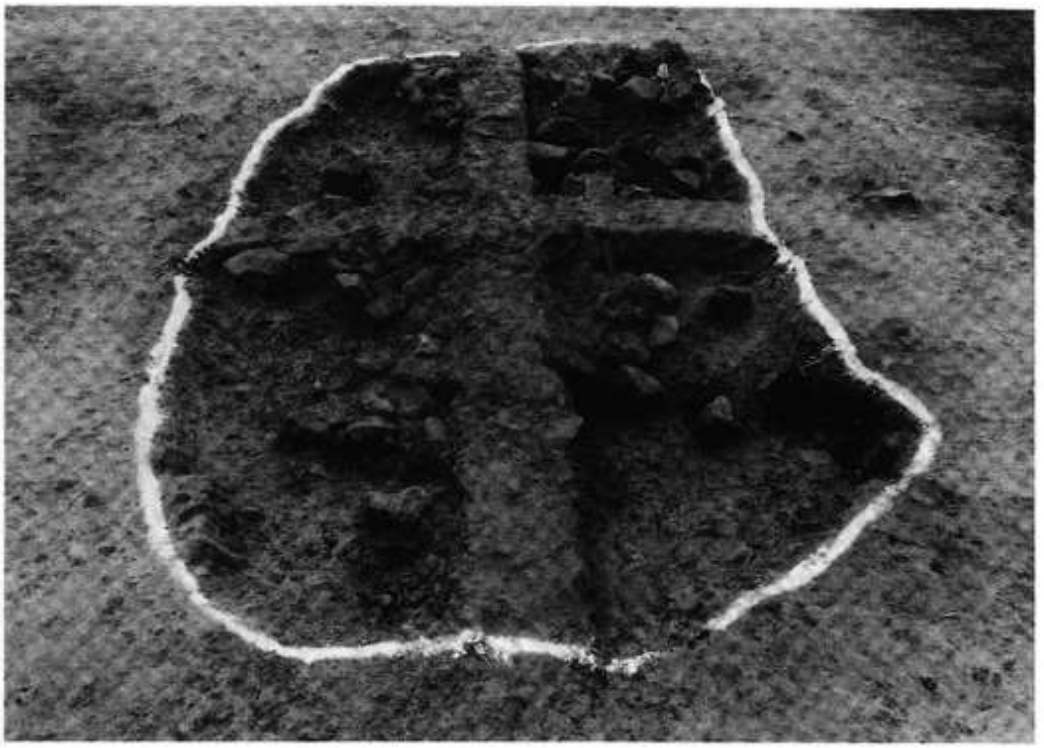


ＳＫ1002掘り下げ状況（北から）

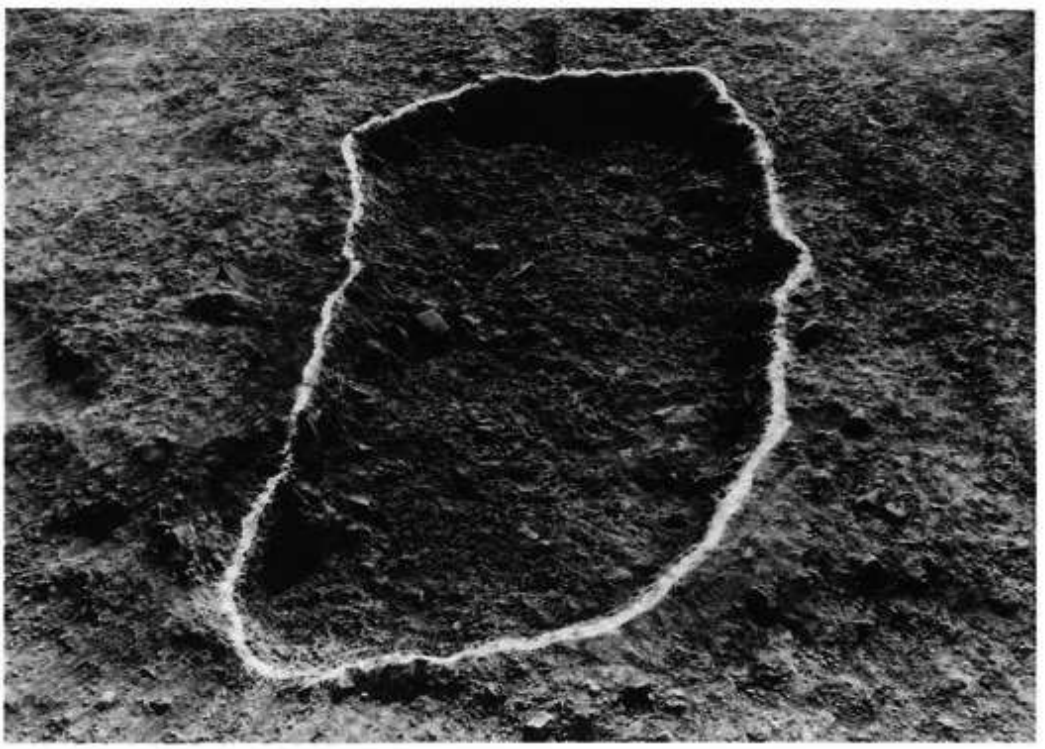


ＳＫ1002完全掘状況（同）

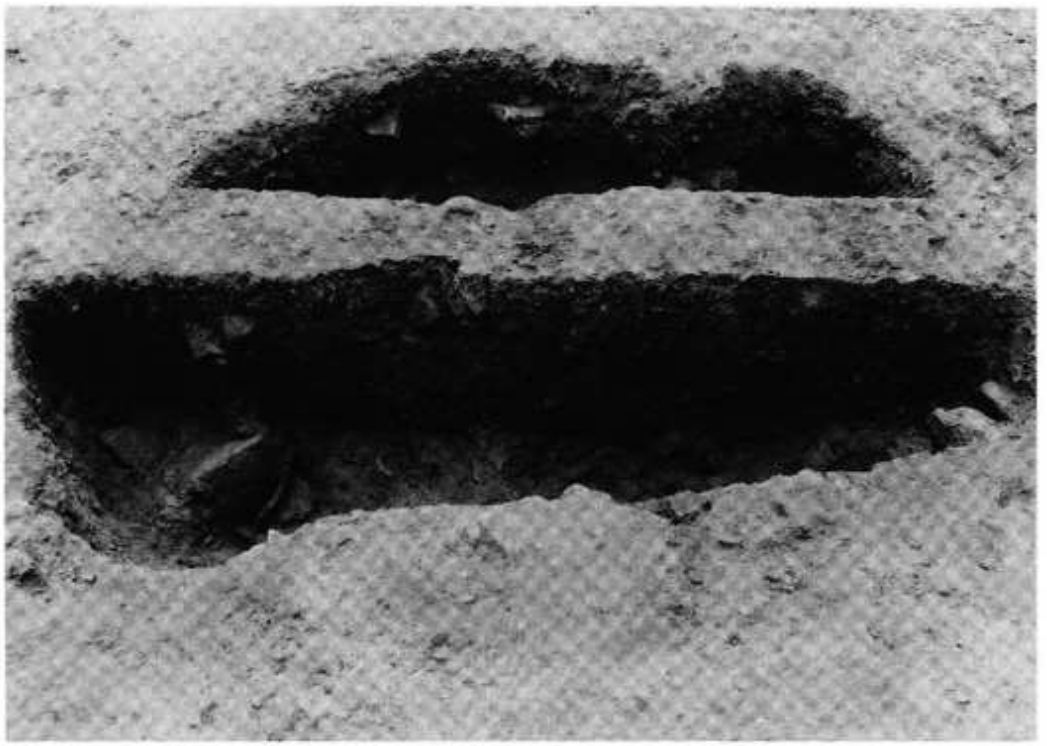
図版 6



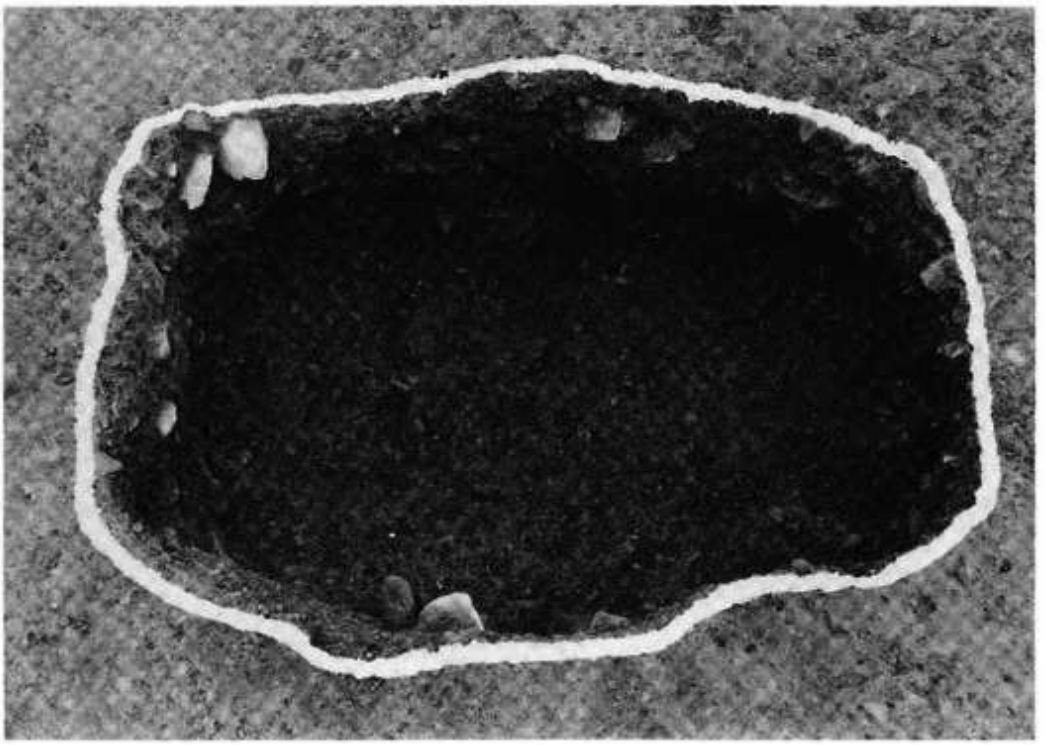
ＳＫ1006掘り下げ状況（西から）



ＳＫ1006完掘状況（東から）

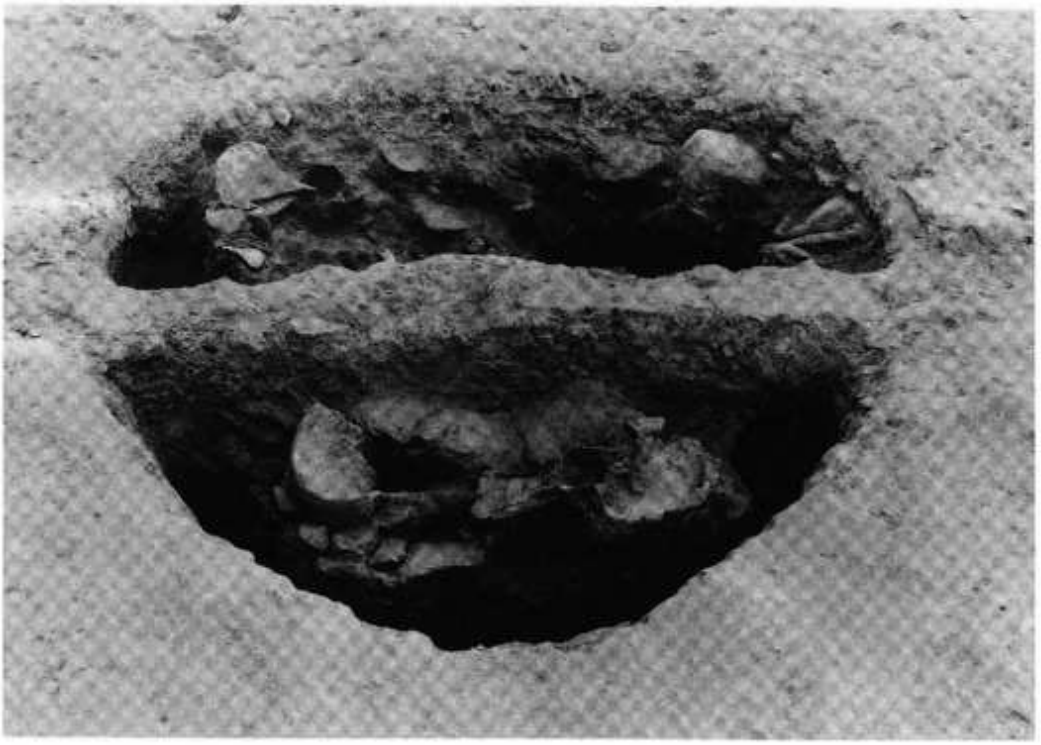


ＳＫ1010掘り下げ状況（東から）

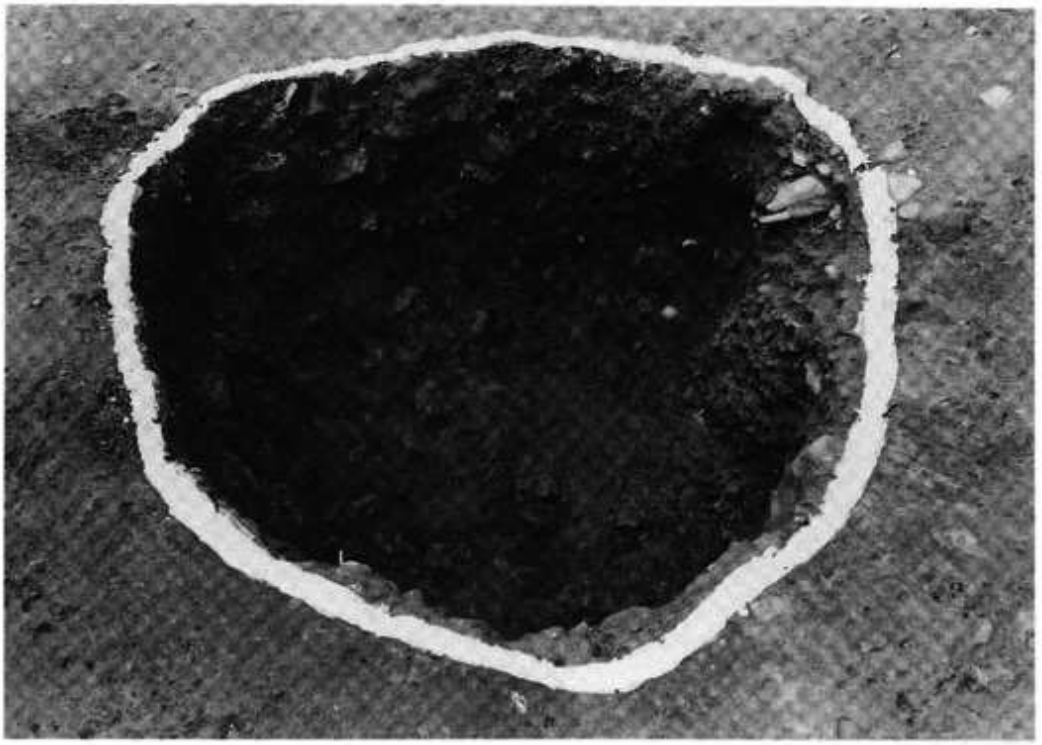


ＳＫ1010完掘状況（東から）

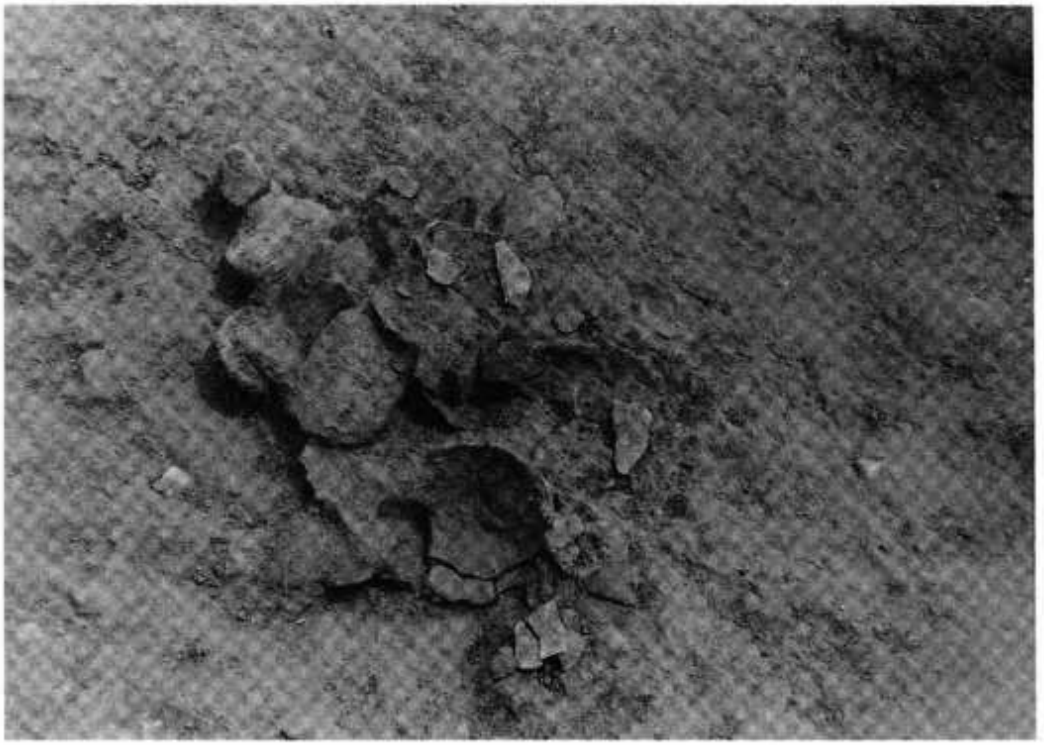
図版 8



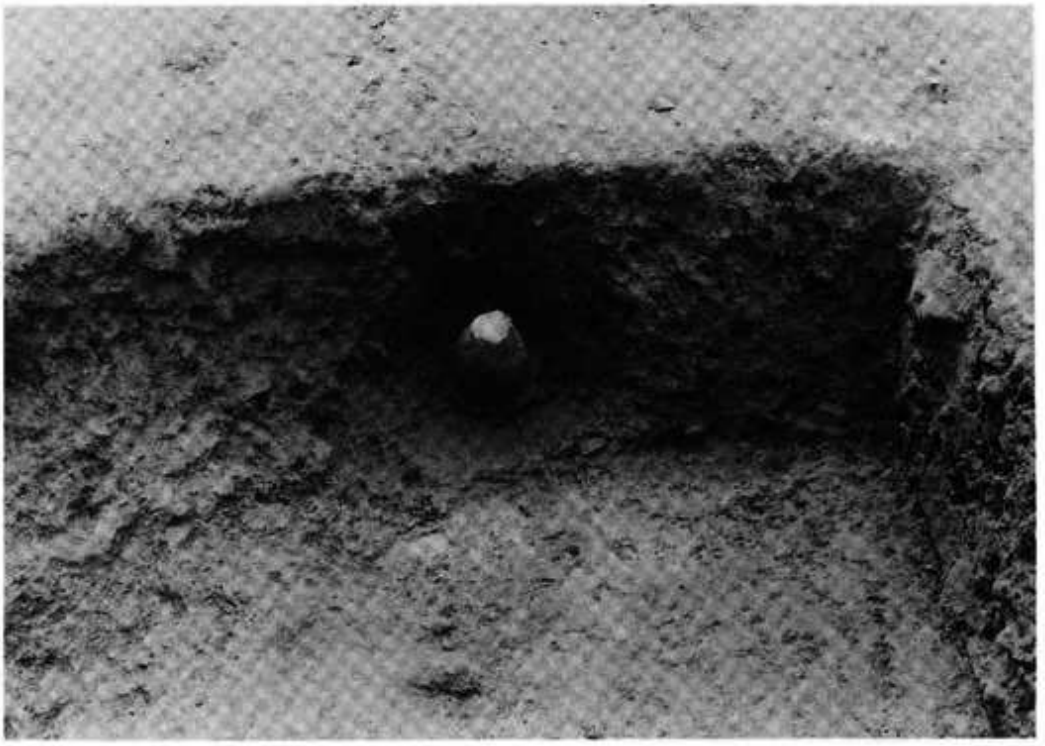
ＳＫ1011掘り下げ状況（東から）



ＳＫ1011完掘状況（同）

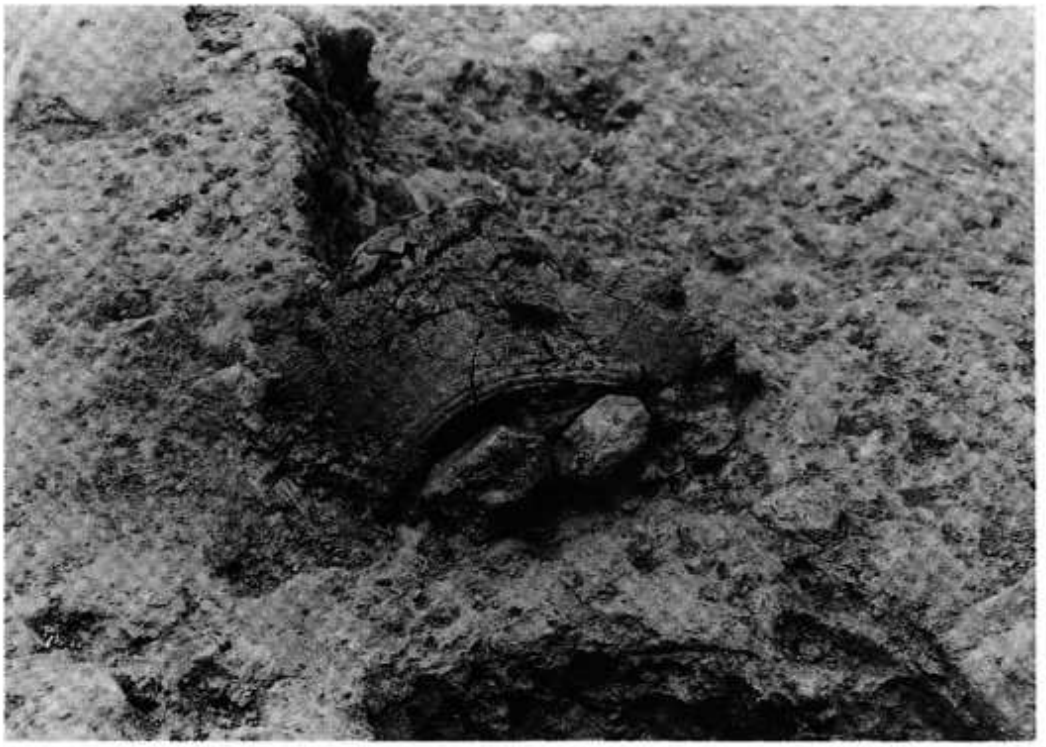


S B1002床面遺物出土状況



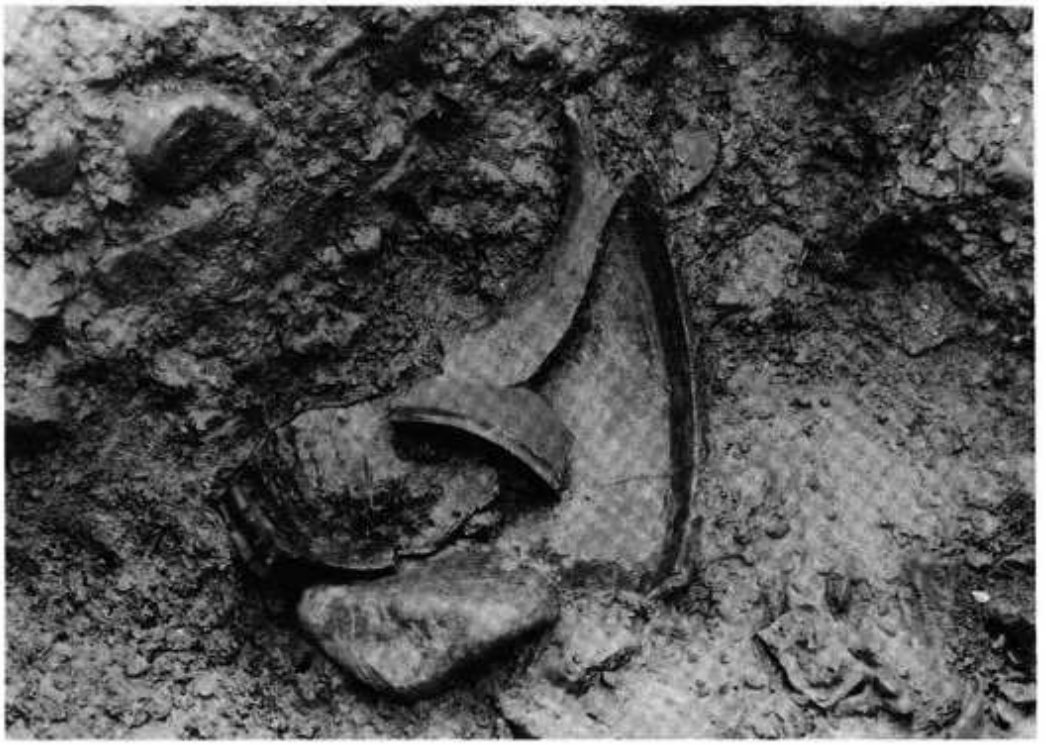
S B1002ミニチュア土器出土状況

図版10



ＳＫ1002遺物出土状況

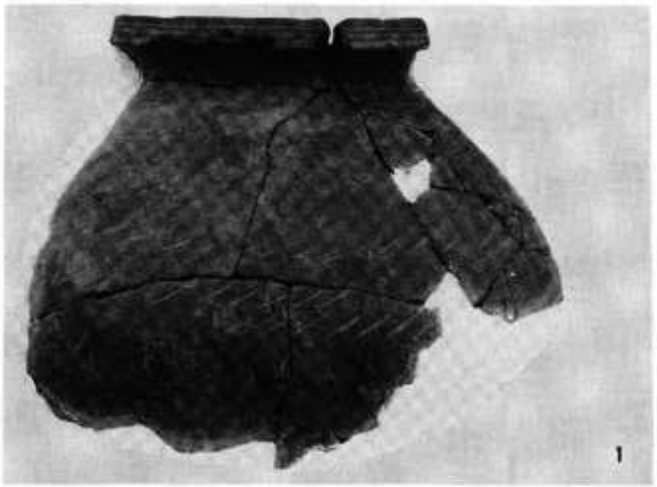
ＳＫ1003遺物出土状況



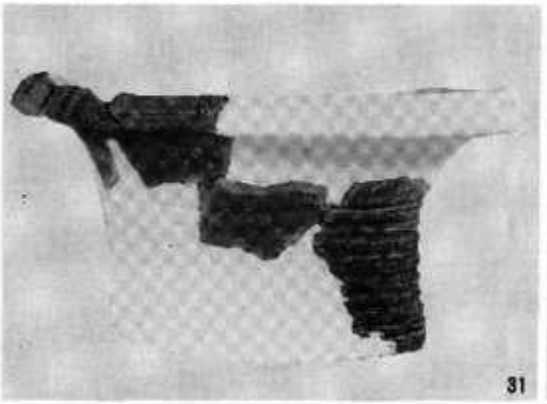
SK1010遺物出土状況

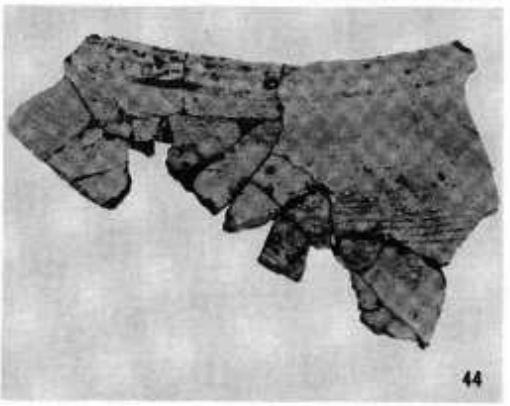
SK1010遺物出土状況

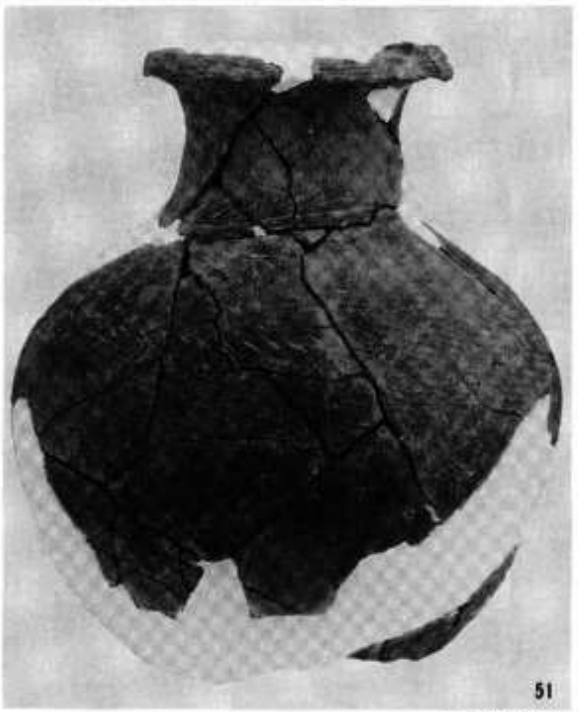
図版12

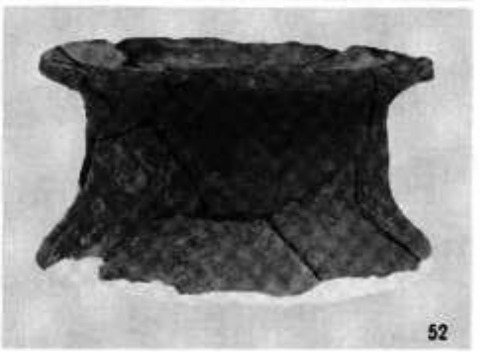

1

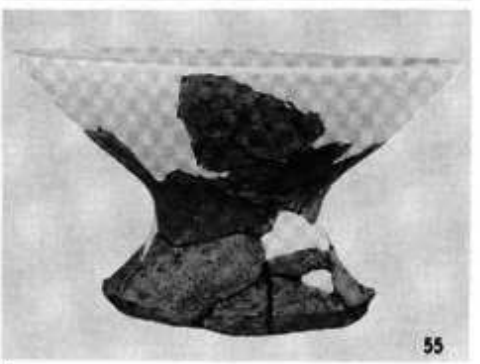
12


31

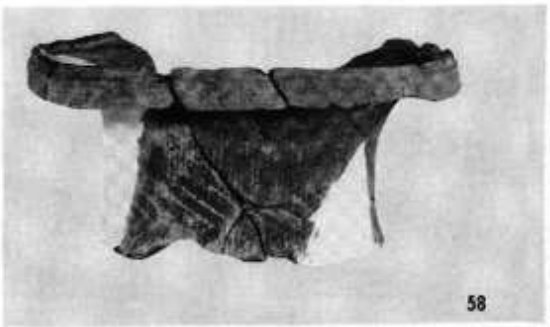

44

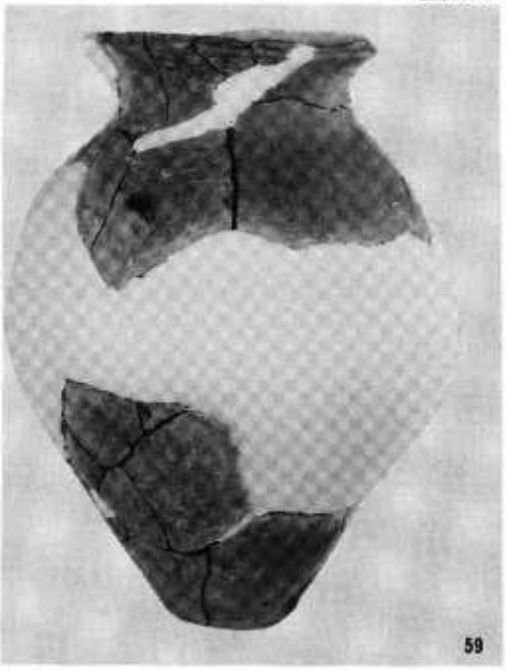

51


52


55

出土遺物（1）

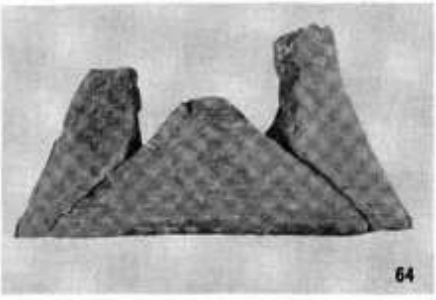

58

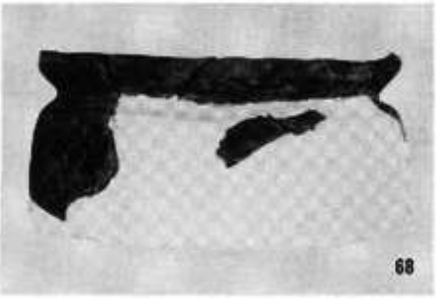

59

60

65

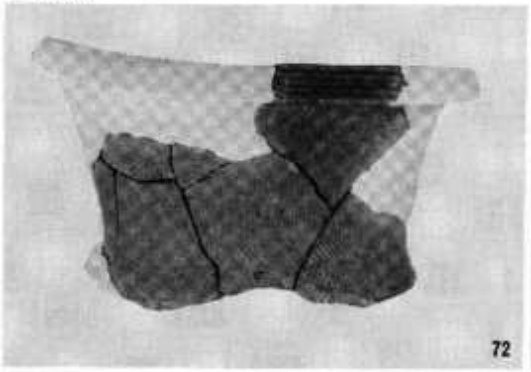
67

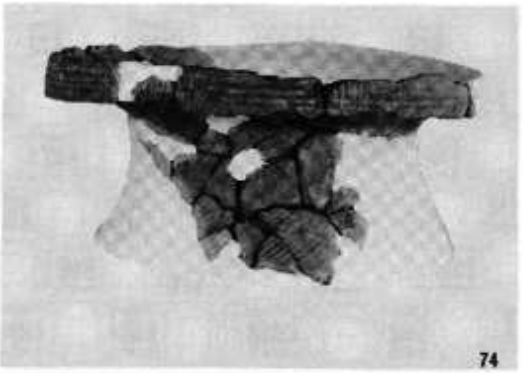

64

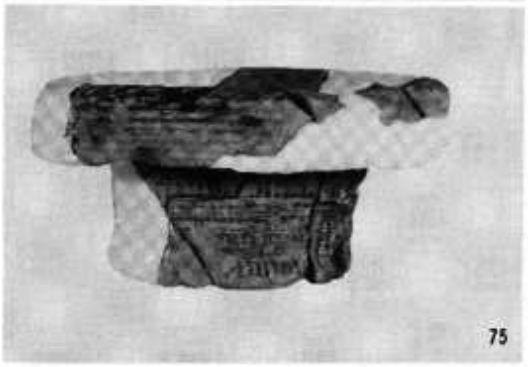

68

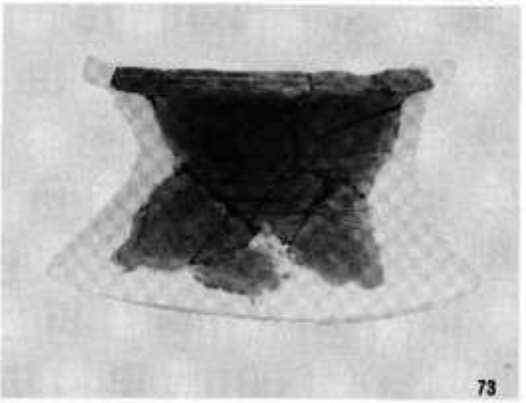
出土遺物（2）

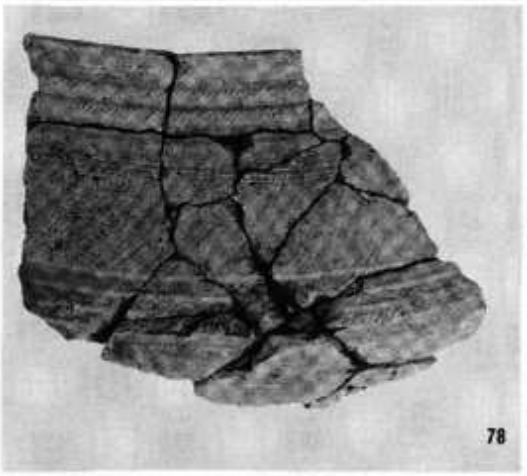
図版14

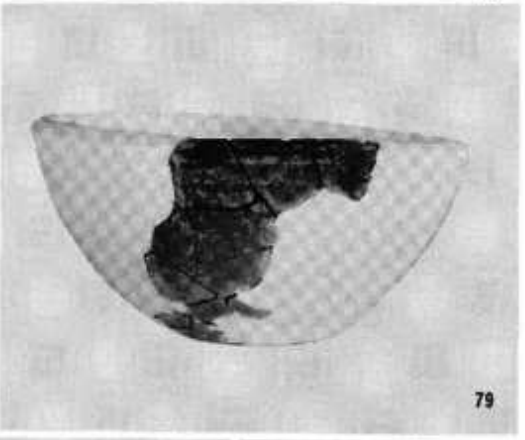












出土遺物（3）